吾妻町の文化財 7

弘法原遺跡

1988

長崎県吾妻町教育委員会

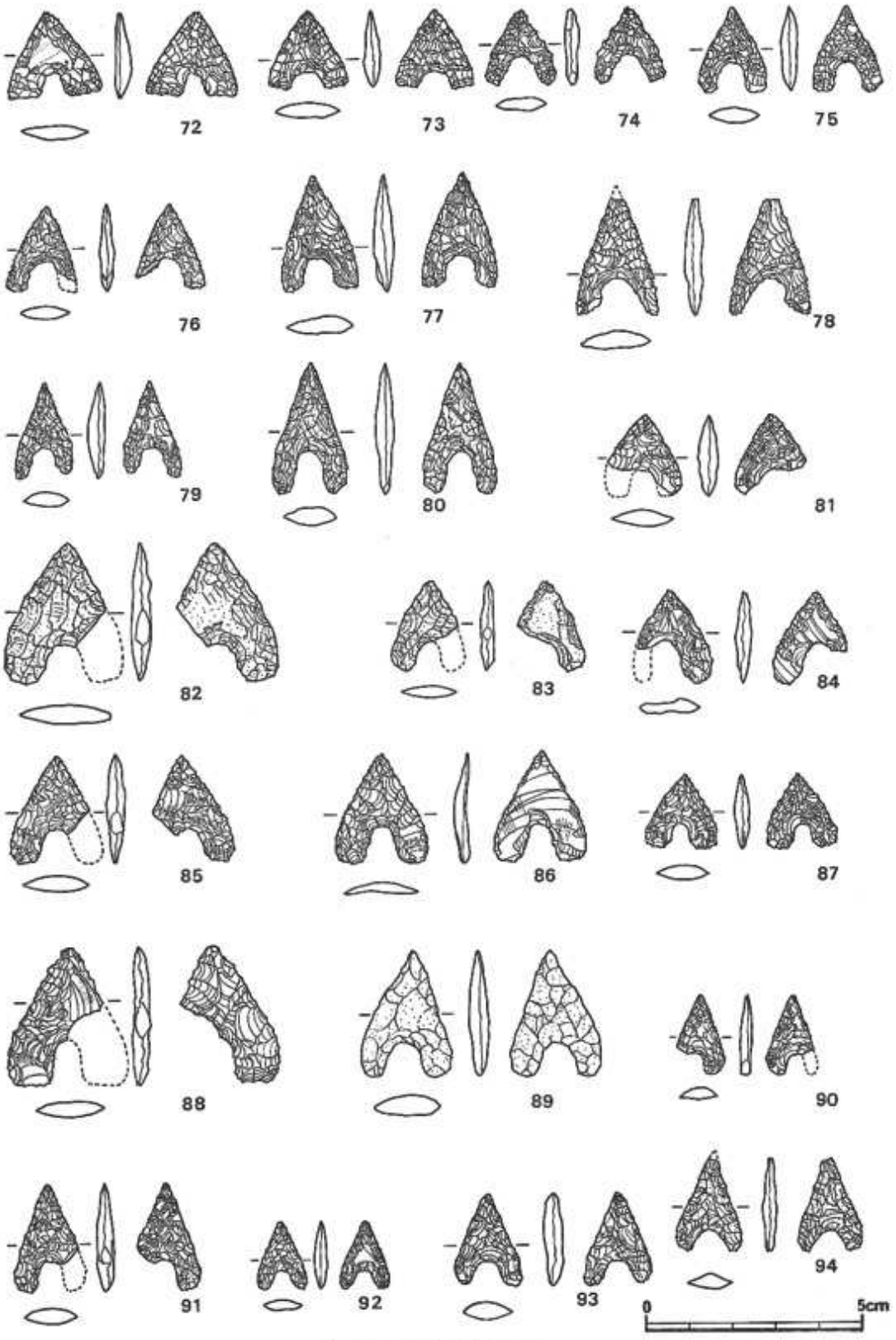


Fig. 73 石鏃実測図③（$\frac{2}{3}$）

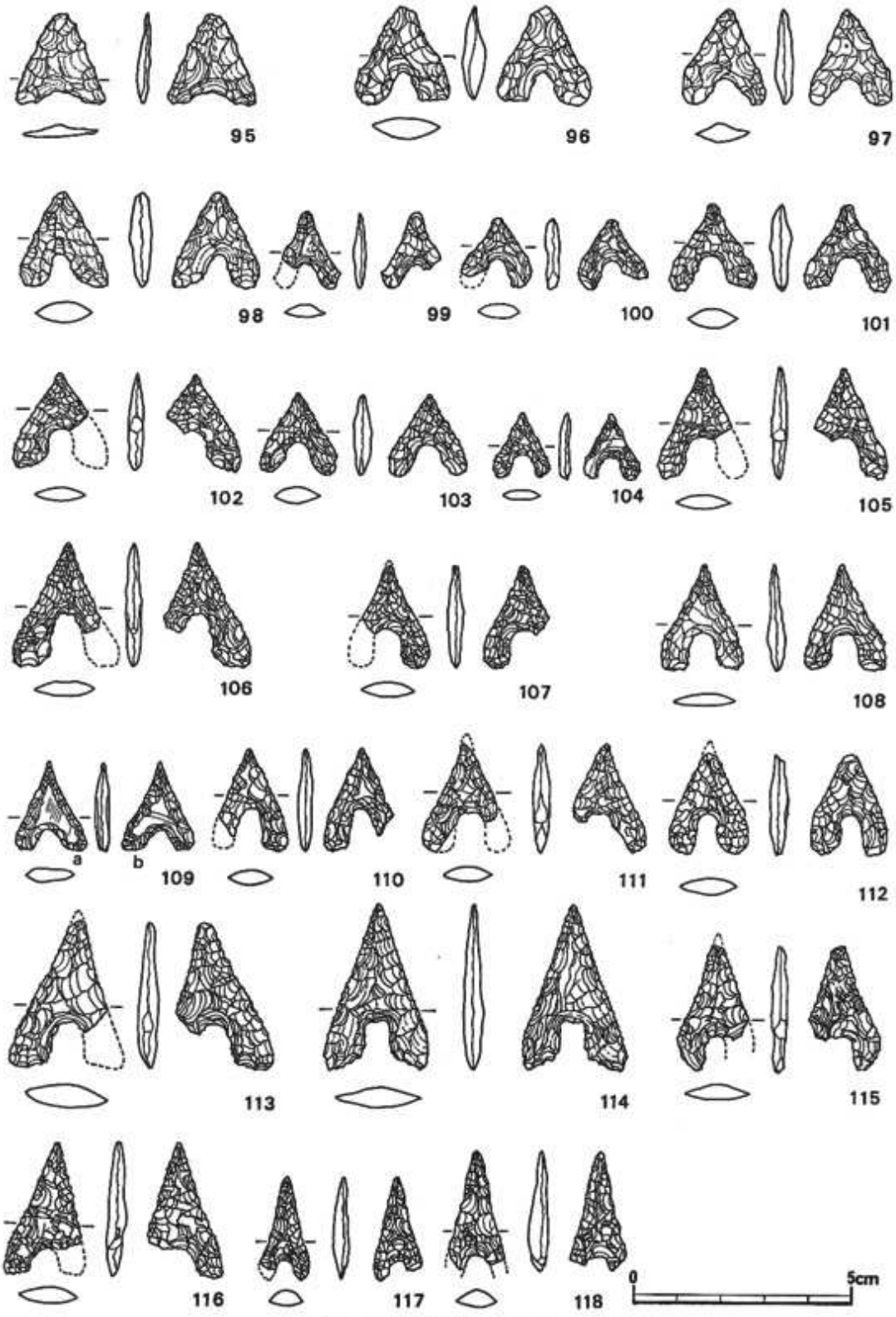


Fig. 74 石鏃実測図④（¾）

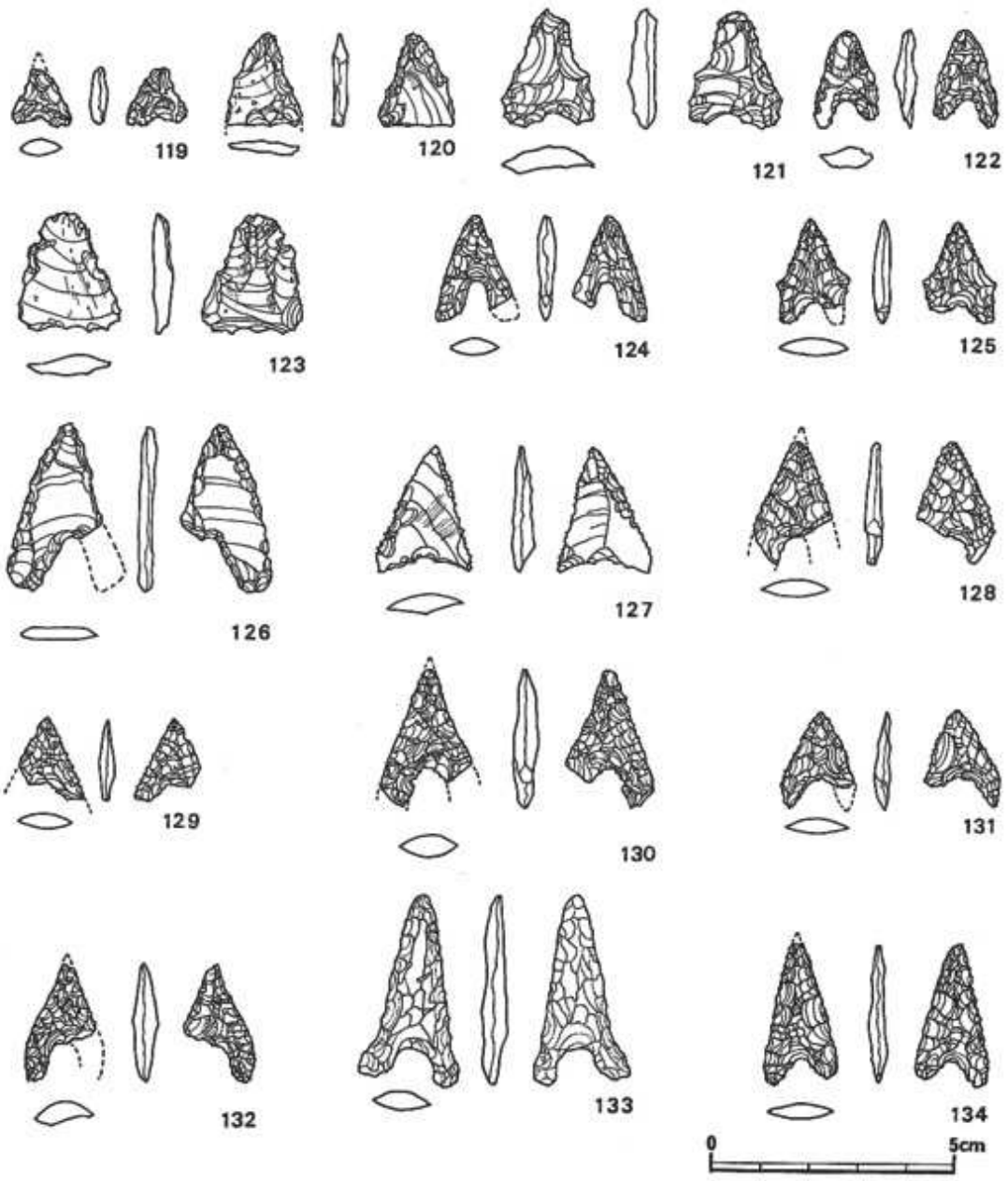


Fig. 75 石鏃実測図⑧（$\frac{2}{3}$）

Ia とした。そして基部の抉りが幅より浅いもの〔幅>深さ〕を Ib，抉りの幅と深さが同じもの〔幅≒深さ〕を Ic，抉りが幅より深いもの〔幅<深さ〕を Id とした。Ⅱ，Ⅲ類もⅠ類と同じように分類した。尚Ⅲ類に関してはd類の後に基部の抉りは浅くなるが，尖端部の角度が小さくなるものをそれぞれ Ⅱe，Ⅲe 類とした。また Ia 類の中でも形態の違いによって Ia_1 と Ia_2 に細別した。Ⅱ，Ⅲ類も同様に形態が違うものは細別した。

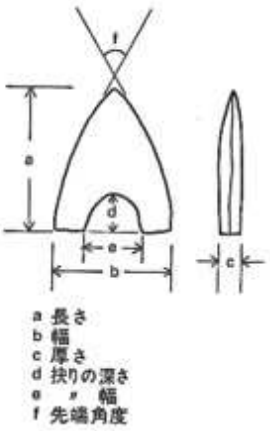


Fig. 76　石鏃計測法模式図

形態別一覧表以外のもので31～34は基部が丸味をもつもので，31の片面には自然面，33の片面には一次剥離面がある。Ia_1 類は基部が非対称形をなすもので34，35がある。2点とも尖端部が薄くなるが，35は極端に薄い。$Ⅱa_2$ 類は左右対称形をなすもので36がある。$Ⅱa_1$ 類は基部が平坦なもので37，42，43がある。42は細かな調整を施していて小形である。43は表裏を研磨しており中央に稜線が縦に入るものである。$Ⅱa_2$ 類は基部が若干弓なりに反るもので，38，39がある。$Ⅲa_1$ 類は，基部が平らなもので，44～46がある。$Ⅲa_2$ 類は，基部が若干弓なりに反るもので47がある。

記号	破損部位		黒曜石	安山岩	その他	計
完		完形品	36	11		47
A		先端部破損	7	1		8
B		両脚破損	9	0		9
C		片脚破損	22	3	2	27
D		先端部片脚破損	13		1	14
E		先端部両脚破損	8			8
F		脚部のみ	16	1		17
			111	16	3	130

Fig. 77　石鏃破損部位別一覧表

Ib_1 類は基部の抉りが極端に浅いもので，48，49がある。Ib_2 類は，50～53，55，57～62がある。Ic 類は，54，56である。$I'b_1$ 類は，脚部が尖るもので，調整が粗く，先端角度が50°より大きいもので，63，64，66がある。63，64は調整が荒い。64は側面図でみると反りがある。$I'b_2$ 類は調整が比較的丁寧で，先端角度が50°より小さくなるもので68，69がある。71は片脚が折れているもので，脚部片が P-5 区Ⅱ層のもの，胴部が R-2 区Ⅱ層のものであり，接合資料である。

$Ⅱb_1$ 類は角度が大きく抉りが浅いもので72～74がある。$Ⅱd_2$ 類は $Ⅱd_1$ 類に比し角度が小さくなり逆に長幅比が大きくなり（長幅比1.2以上）縦に長くなるもので75～77がある。$Ⅱc_1$ 類は片方の脚部下端が若干直線的なものであり78がある。$Ⅱc_2$ 類は縦に長くなり（長幅比1.7以上），両脚が尖るものであり79，80がある。

$Ⅱ'b_2$ 類には81～83，85，87がある。$Ⅱ'b_2$ 類は縦に長くなるもの（長幅比1.2以上）で86がある。Ⅱ'd 類は88がある。Ⅱ'e 類は，角度が50°より小さいもので縦に長くなるもの（長幅

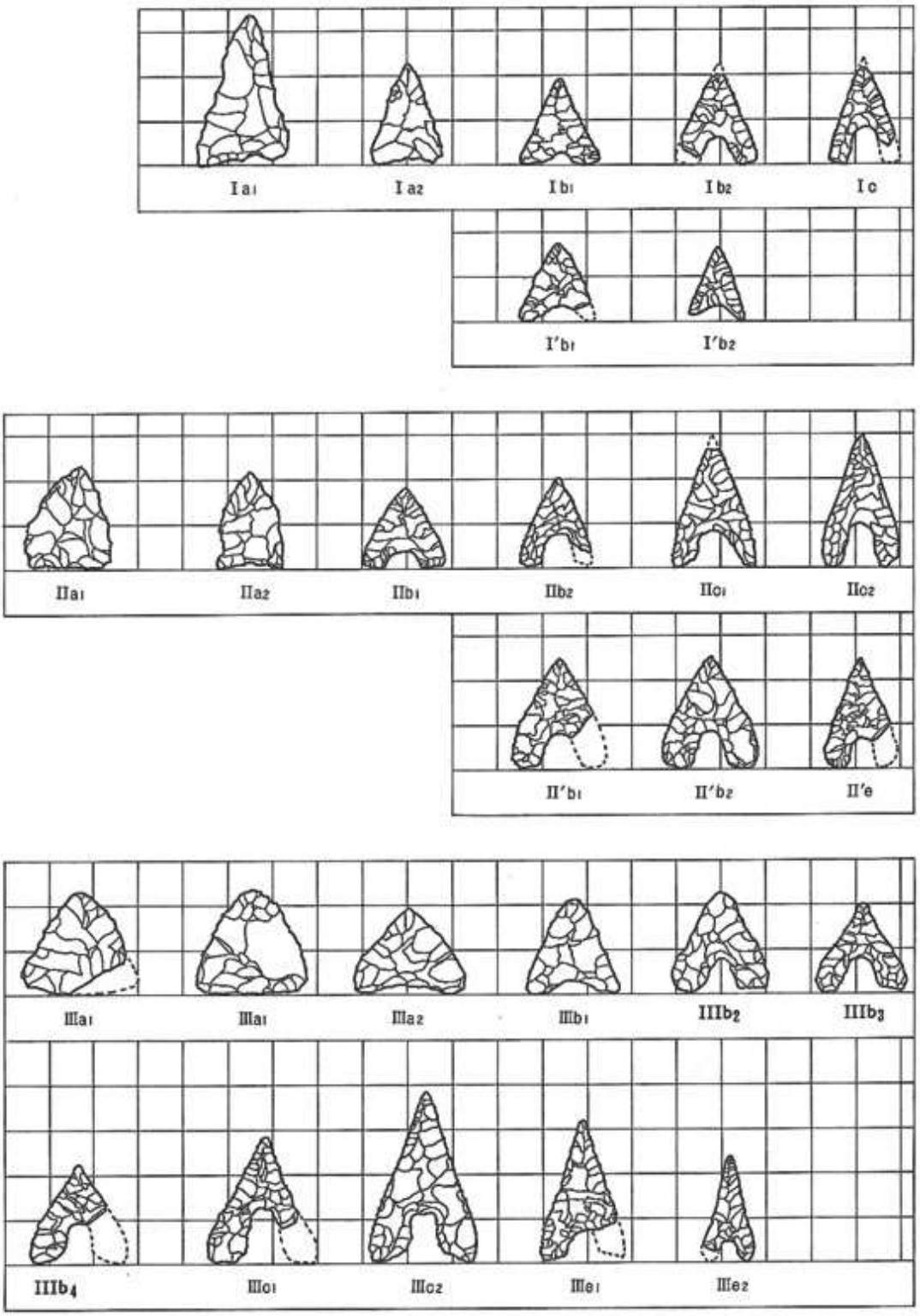


Fig. 78 形態別一覧表

比1.5以上）で90，91がある。82，83，84，86は一次剝離面を残している。

Ⅲb$_2$ 類は尖端部または脚部が丸味をもつものであり，96～98があるが，97は尖端部が尖っている。Ⅲb$_2$ 類は側縁を内湾するように調整するもので，尖端部が丸く突起する感じになるものである99～101，109がある。109は尖端部が鋭く，a面は磨製，b面には一次剝離面を残す。Ⅲb$_3$ 類は側縁が直線に近くなるもので，102～105がある。

Ⅲc$_1$ 類は脚部が大きくなり丸味を帯びた形になるもので，106，110，112がある。112の抉り幅は狭い。Ⅲc$_2$ 類は脚部の丸味がなくなり直線に近くなるものであり，113，114がある。114は抉りの幅が狭くなる。非常に調整が丁寧である。Ⅲd 類には108がある。Ⅲe$_1$ 類は長幅比が1.6>2.0のものであり116がある。Ⅲe$_2$ 類は長幅比が2.0以上のものであり，117，118がある。99～114までは鍬形鏃である。

119は，非常に小形のものである。120，121，123は，石鏃の未製品と思われるものである。122，126，127は一次剝離面を残すもので，122の尖端部は丸く，126は，全体的に平べったい剝片の周縁を調整加工して整形仕上げしている。127は，側縁を細かな鋸歯状に調整加工している。125は，胴部に小突起をもつもので縄文晩期に多く出土する。132は鍬形鏃であろう。133は小さな脚部の張り出しが特徴的な異形石鏃である。

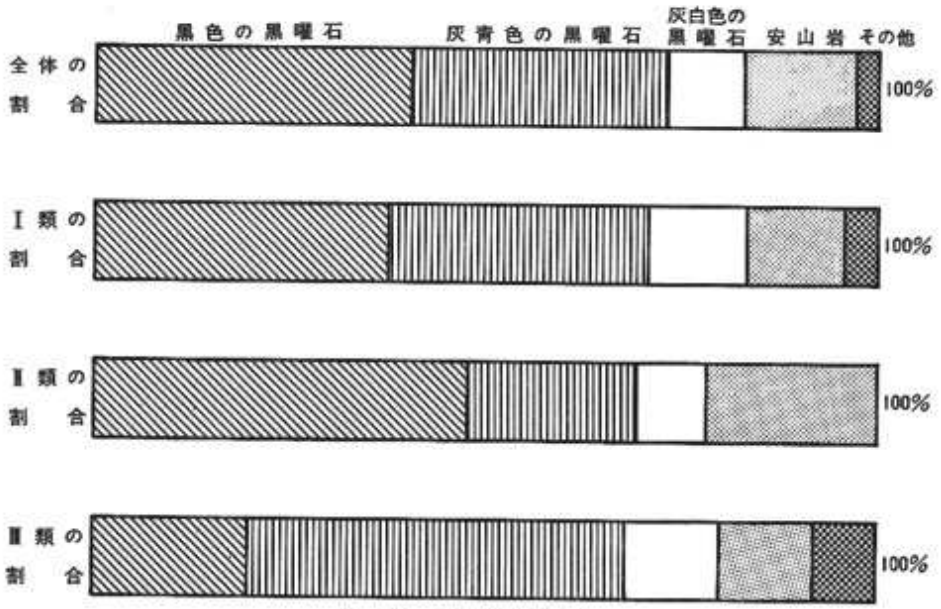


Fig. 79　石材別利用状況

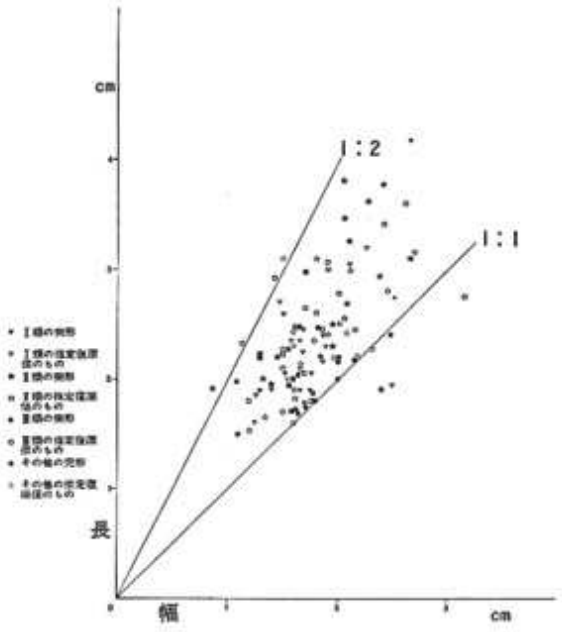


Fig. 80　長幅比グラフ

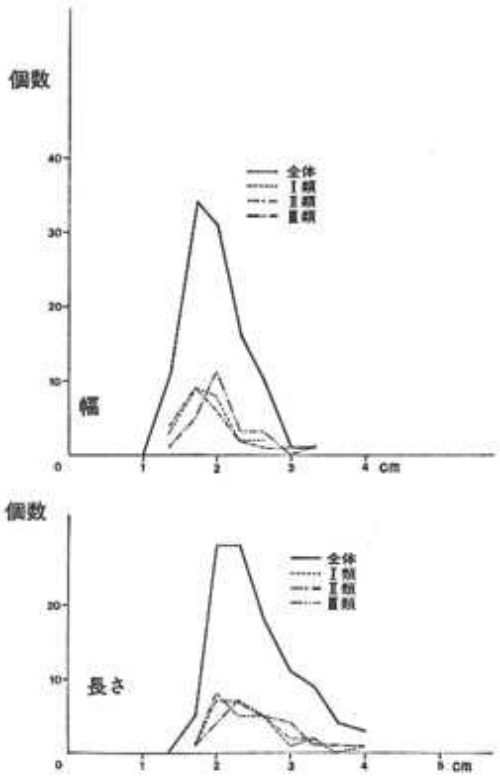


Fig. 81　幅，長さグラフ

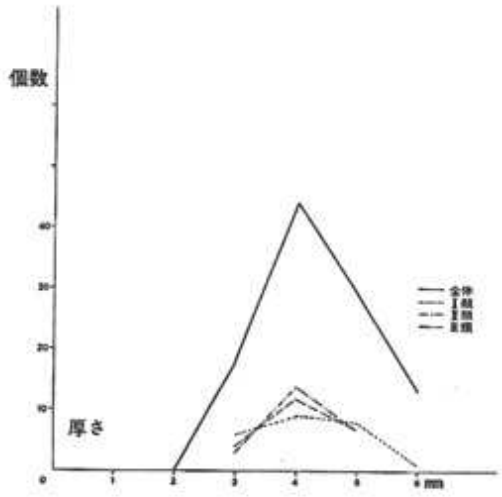


Fig. 82　厚さグラフ

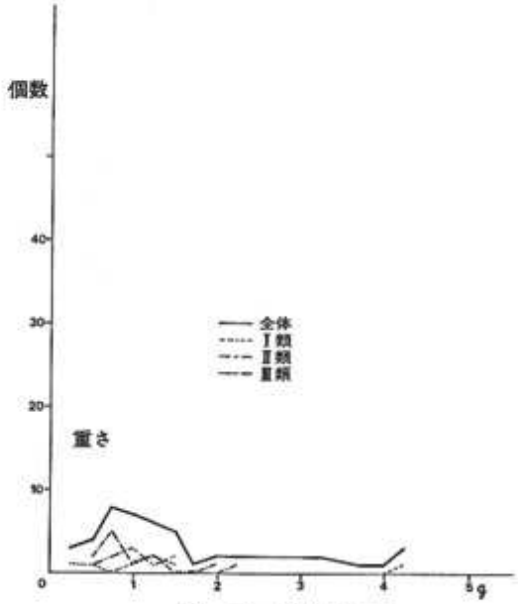


Fig. 83　重さグラフ

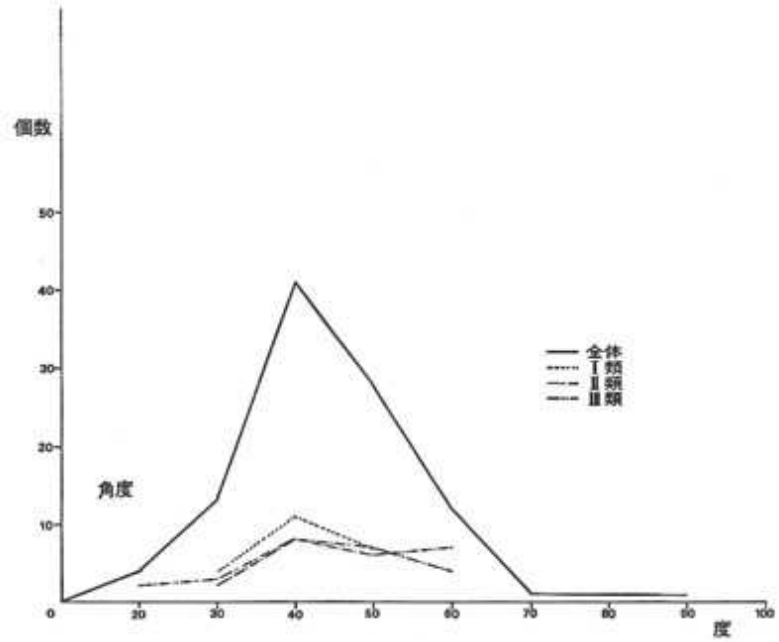


Fig. 84　角度グラフ

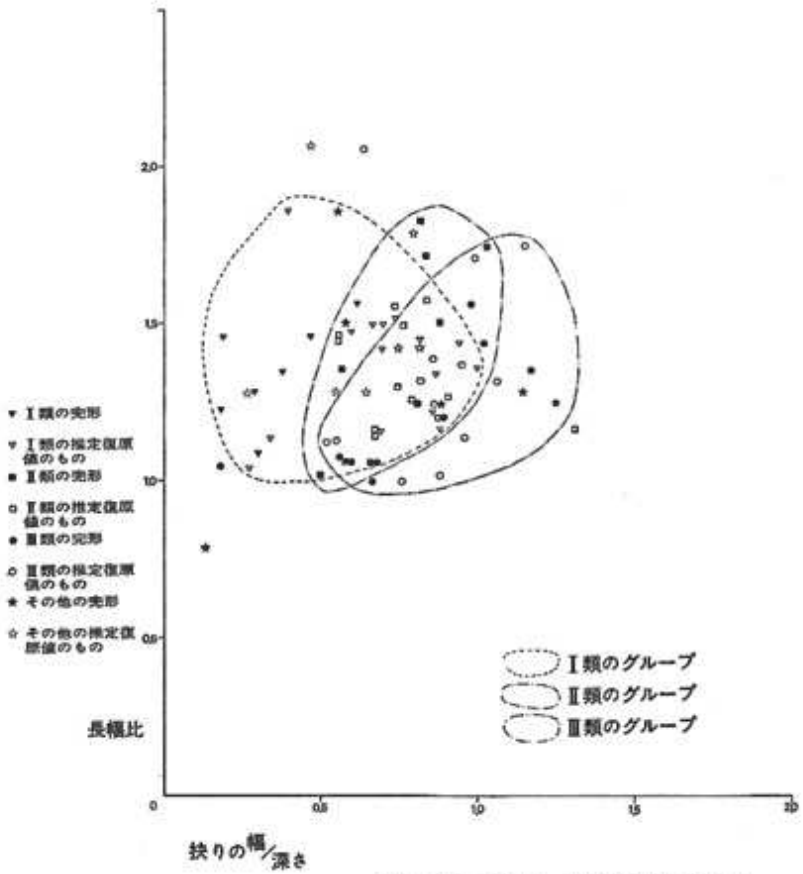


Fig. 85　長幅比，抉り幅/深さグラフ

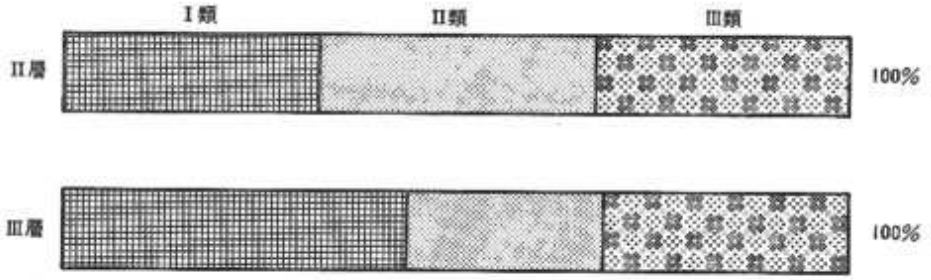


Fig. 86　II・III層におけるI～III類の割合

石鏃の石材別利用状況を（Fig. 79）でみると，弘法原遺跡全体では，黒曜石が82.5%，安山岩が14.4%を占める。黒曜石は，黒色黒曜石，灰青色黒曜石，灰白色の3種類に分けられる。次に，I，II，III類の石材別利用状況をみてみると，I類では，黒色と灰青色の黒曜石で70.8%を占め，そのうち黒色黒曜石が37.5%，灰青色黒曜石が33.3%でほぼ半々を占める。II類では黒色黒曜石が47.8%で約5割を占め一番多い。III類では灰青色黒曜石が48%で約5割を占め一番多い。I～III類によって石材の利用状況に特徴がみられる。

また，石鏃の長幅比を（Fig. 80）でみると長幅比が1：1～1：2の中に収まっている。次にグラフ（Fig. 81～84）で，幅，長さ，厚さ，重さ，角度をみてみると，幅は，全体では，1.66cmのものが一番多く，I，II類も同じであるが，III類では2cmのものが一番多い。長さは，全体では2～2.33cmのものが一番多い。厚さでは，全体，及びI～III類でも4cmのものが一番多い。重さは，全体では0.7gのものが多く，I～III類ではばらつきがみられる。角度では全体，及びI～III類のものも40°のものが一番多い。最後に長幅比と抉りの深さと幅の比をグラフ（Fig. 85）でみてみると，I～III類が混在するが，若干のずれをもって偏在性も認められる。

I～III類の層位における割合を（Fig. 86）でみると，III層ではI類が43.7%で一番多く，II層では，I～III類がほぼ同じ割合を占める。

Tab. 13 石 鏃 計 測 表

挿図番号	出土区	層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm) 長さ	幅	厚さ	幅/長	抉り(mm) 深さ	幅	幅/深	先端角度	分類
31	M1-24	Ⅲ	黒色ob	完	2.35	17.5	17	6.9	1.03				55°	
32	O2-82	Ⅱ	漆黒色ob	完	1.8	22	18.4	6	1.2				71°	
33	Q3-H3		漆黒色ob	完	3.05	30.1	20.1	6.3	1.5				65°	
34	V4-21	Ⅱ	黒色ob	完	1.45	23	19.5	4.1	1.18				50.5°	Ⅰa₁
35	N1-1	Ⅱ	灰白色ob	完		22	14.5	3	1.52				57°	〃
36	O2-53	Ⅱ	黒色ob	完	1.75	19.5	14	4	1.4				41°	Ⅰa₂
37	N2-H14		灰青色ob	E	0.65	18.2	14.8	2.5	1.23				54.7°	Ⅱa₁
38	H1-4	Ⅱ下	灰白色ob	完	1.65	26.8	20.8	4.9	1.29				49.2°	Ⅱa₂
39	N1-1	Ⅱ	黒色ob	完	0.2	19	8.7	2.2	2.18				38°	〃
40	B-50	Ⅱ上	安山岩	完	4.25	34.6	20.6	5	1.68				40°	〃
41	P3-53	Ⅲ	黒色ob	完	3.75	36.2	22.8	8	1.59				35°	Ⅱa₁
42	R3-34		安山岩	完	3.8	32.5	21	8.5	1.55				35°	〃
43	P1-35	Ⅱ	安山岩	完	0.9	22.5	15.3	4	1.47				42°	〃
44	O2-92	Ⅱ	灰青色ob	完	4.15	29.4	23.8	6.9	1.24				50°	Ⅲa₁
45	弘-89		灰青色ob	C	1.75	22.7	23.1	5.1	0.87				82°	〃
46	C-196	Ⅲ下	灰青色ob	完	3.1	24	24.8	7.8	0.97				53.7°	〃
47	D3-19		灰青色ob	完	1.35	19	24	4	0.79	2	16	0.13	92°	Ⅲa₂
48	U1-6	Ⅱ	灰青色ob	完	0.9	19	17.5	4.5	1.09	2	6.7	0.3	51°	Ⅰb₁
49	P1-32	Ⅱ	黒色ob	C	0.65	19	14	4.5	1.14	0.34	2.5	7.5	57.5°	〃
50	C-191	Ⅲ下	安山岩	C	0.95	23.5	15.5	4	1.52	5.2	7	0.74	55°	〃
51	A1-34	Ⅱ	灰白色ob	E	0.6	19	16.5	3.5	1.17	7	8	0.88	54.5°	Ⅰb₂
52	S5-21	Ⅲ	黒色ob	D	0.6	17.7	16	3	1.22	6	7	0.86	52°	〃
53	O6-5	Ⅲ	灰青色ob	D	0.55	17.2	16.8	3	1.34	6.5	7.5	0.87	50°	〃
54	V2-2	Ⅱ	黒色ob	B	0.55	18	14	4	1.36	5	5	1.0	49°	Ⅰc
55	O3-26	Ⅲ	灰青色ob	D	0.8	20.2	17.2	4	1.16	6.2	9	0.69	48°	Ⅰb₂
56	R4-56		黒色ob	D	0.7	21.5	14.5	4.1	1.44	8	8.5	0.94	42°	Ⅰc
57	A-1	Ⅱ上	黒色ob	C	0.7	22.5	15	4.5	1.5	6	9	0.67	42°	Ⅰb₂
58	O-25	Ⅱ	灰白色ob	C	0.45	18.5	12.5	3.5	1.48	4.5	7.5	0.6	40°	〃
59	Q1-148		チャート	D	0.55	20.7	14	3	1.5	7	10	0.7	40°	〃
60	U1-3	Ⅱ	灰青色ob	D	1.5	29.5	20	5	1.42	9.5	13.5	0.7	50°	〃
61	R4-58		黒色ob	D	1.1	26	17	4	1.45	9	11	0.82	40°	〃
62	S1-119		黒色ob	D	1.15	27	14.7	4.8	2.03				42°	
63	A161	Ⅲ上	安山岩	完	1.3	24.5	16.8	5	1.46	2	10.3	0.19	55°	
64	P5-38	Ⅱ	灰青色ob	完	1.15	20.5	15.2	4.6	1.35	3	8	0.38	43°	
65	U3-12	Ⅱ	安山岩	完	1.05	24	19.5	3	1.23	3	17	0.18	47°	
66	T4-5	Ⅱ	黒色ob	C	0.5	17.7	16	3.2	1.04	3.2	12	0.27	59°	Ⅰ'b₁
67	U1-16	Ⅲ	灰青色ob	A	1.55	19.5	24.9	3.8	0.78	4.5	21	0.21		Ⅰ'b₁
68	P5-25	Ⅱ	灰青色ob	完	0.25	16	12.5	2.4	1.28	3	10.5	0.29	42°	Ⅰ'b₂
69	O2-4	Ⅱ	灰白色ob	完	0.35	19	13	2.6	1.46	4	8.5	0.47	41°	〃
70	S2-57	Ⅲ	黒色ob	D	0.7	21	14	3.1	1.86	6.5	14	0.4		〃
71	P5-3	Ⅱ	灰青色ob	完	4.1	41.7	26.6	6.5	1.57	6.3	10.2	0.62	40°	
72	R55		黒色ob	完	1.15	19.9	10.9	3.5	1.83	6	7.3	0.82	68°	Ⅱb₂
73	T5-8	Ⅲ	黒色ob	完	0.7	18	17.7	3.8	1.02	4	8	0.5	65°	Ⅱb₁
74	C-88	Ⅱ上	黒色ob	完	0.6	17	16	3	1.06	6.5	11	0.59	62°	Ⅱb₂
75	D-23	Ⅱ	黒色ob	完	0.6	19.5	11.5	3.6	1.25	6.5	8	0.81	58°	〃
76	V1-1	Ⅱ	灰青色ob	C	0.6	20	15.8	3.5	1.26	6	7.5	0.8	53°	〃
77	KO-H		灰青色ob	完	0.3	26.5	17	4.5	1.56	5.2	7	0.74	50°	〃
78	E2-57	Ⅲ	灰青色ob	A	1.35	27	19	4	1.42	8	9.5		34°	Ⅱc
79	C177	Ⅱ下	灰青色ob	完	0.6	20.3	16.3	3.2	1.25	4.5	9		48.5°	
80	U2-16	Ⅱ	安山岩	完	1.2	29.8	17	4.2	1.75	9.5	9.2	1.03	38°	Ⅱc

幅/長と抉りの幅/深は推定復原値のものを含む

Tab. 14 石 鏃 計 測 表

挿図番号	出土区	層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm) 長さ	幅	厚さ	幅/長	抉り(mm) 深さ	幅	幅/深	先端角度	分類
81	N2-8	II	灰白色ob	B	0.75	18	16.5	4.5	1.03	6	8	0.75	67°	II'b1
82	C-102	II上	安山岩	C	2.1	31	22.8	4.3	1.17	8.6	12.7	0.68	62°	〃
83	N3-33	II	安山岩	C	0.6	20.5	15	3	1.2	7	8	0.88	67°	〃
84	Q3-4	II	黒色ob	C	0.75	21	16.5	4	1.27	10	11	0.91	65.5°	II'c
85	P1-37	II	黒色	C		24.5	18	4	1.14	7.5	11	0.68	60°	II'b1
86	Q-29		黒色ob	完	1.0	25	20.1	4	1.24	8	9	0.89	58.5°	II'b2
87	R5-31		黒色ob	完	0.6	17	16	3.6	1.06	5	7.5	0.67	56°	II'b1
88	O2-53	II	黒色ob	C	1.8	31.5	22	4.5	1.17	10.5	8	1.31	57°	II'd
89	Q4-36	II	安山岩	完	1.85	28.8	20.3	5	1.42	7.4	10.3	0.72	50°	
90	弘-117		黒色ob	C	0.4	18	11	2.8	1.5	5	6.5	0.77	44.5°	II'e
91	G1-6	III	黒色ob	C	0.8	24.7	14.5	4	1.51	7	8	0.88	45°	〃
92	M1-22	III	灰白色ob	完	0.3	15	11	3	1.36	4	7	0.57	48°	
93	R-3・4		灰青色ob	A	0.85	21	15.2	4.5	1.45	5	9	0.56	46°	
94	U2-6	II	安山岩	A	0.5	21	15・	3.2	1.47	5	9	0.56	42.5°	
95	C-67or62	II上	安山岩	完	0.9	21	20	3	1.05	3	17	0.18	50°	IIIb1
96	S1-H2		灰青色ob	完	1.35	21.9	21.5	4.5	1.02	7.8	8.8	0.89	55°	IIIb2
97	N3-1	II	安山岩	完	1.2	22	19.6	4	1.12	6.3	12.2	0.52	55°	〃
98	E1-34	II	安山岩	完	1.3	21.6	20	5	1.08	7.2	12.8	0.56	51°	〃
99	M1-23	III	灰青色ob	C	0.4	17	13	3	1.13	5.5	10	0.55	50°	IIIb3
100	弘-58		灰青色ob	C	0.5	16	16	3.5	1.00	6.5	8	0.76	68°	〃
101	A-92	II	灰青色ob	完	0.9	20	20	5	1.00	7	10.5	0.67	60.5°	〃
102	P2-12	II	灰白色ob	C	0.75	22	17	3.5	1.02	8	9.2	0.82	66°	IIIb4
103	S2-1	II	灰青色ob	完	0.6	18.7	17.7	4	1.06	7	12	0.59	63°	〃
104	H		黒色ob	完	0.3	15	13	2.5	1.15	5	7	0.71	57°	〃
105	S2-119		黒色ob	C	0.75	25.5	17	3.5	1.24	9	10.5	0.86	50°	〃
106	C-19	II上	黒色ob	C	1.05	28	20.5	3.5	1.14	12	12.5	0.96	51°	IIIc1
107	C-145	II下	黒色ob	D	0.7	23	15.5	3.7	1.32	9	11	0.82	52°	
108	P3-49	II	灰色ob	完	0.95	24.5	18.2	4	1.35	8.2	7	1.17	52°	IIId
109	O3-15	III	灰白色ob	完	0.6	20.3	16.3	3.2	1.25	4.5	9	0.5	48.5°	IIIb2
110	B222	III	灰青色ob	C	0.6	23.5	16	3.1	1.32	9	8.5	1.06	49°	IIIc1
111	P2-15	II	灰色ob	D	0.85	25	17	4	1.39	9	10.5	0.86	46°	
112	R4-88		灰青色ob	A	1.0	23	18	4	1.44	9.2	9	1.02	50°	IIIc1
113	S6-13	III	灰青色ob	D	2.0	34	23	4.5	1.37	9.5	10	0.95	41°	IIIc2
114	U1-16		灰青色ob	完	2.25	37.8	24	4.7	1.56	8.8	9	0.98	39°	〃
115	D-17	II	灰青色ob	E		27.5	16.5	4	1.75	7.5	6.5	1.15	39°	
116	A-55		チャート	C		30.5	17	4.5	1.61	5.5	7	0.79	38°	IIIe1
117	C-210	III下	黒色ob	C	0.6	23.3	11.3	3.8	2.06	4.5	7	0.64	30°	IIIe2
118	C-115	II上	灰白色	B	1.0	27	12.7	4.5	2.06	5.2	9.3		27°	〃
119	弘-116		黒色ob	A	0.35	12	12	3.7	1.28	1.6	6	0.27	50°	
120	D-17	II	黒色ob	完	0.9	19	16	3	1.19					
121	A-55	II	灰青色ob		2.25	24	19	6	1.26					
122	N3-27	II	黒色(透明)ob	完	0.7	20	13.3	4.7	1.50	5	8.5	0.59	43°	
123	P2-32	II	黒色ob		0.7	20	13.3	4.7	1.50				43°	
124	N2-16	II	チャート	C	0.7	21.3	15.2	3.5	1.29	8	10	0.8	43°	
125	B-226	III	黒色ob	C		21	15	3.7	1.4				45°	
126	V4-2	III	黒色ob	C	1.8	34.2	13.1	3	1.42	10.8	13.1	0.82	47°	
127	P3-34	II	灰青色ob	完	1.05	25	19.5	4.5	1.28	3	16.5	0.15	45.5°	
128	R4-15		黒色ob	D		27.5	16	3.4	1.72				46°	
129	O4-25	III	灰青色ob	B	0.4	16.5	13.4	3.3	1.23				53°	
130	H-15	III	黒色ob	E	1.4	28	18	5	1.43	9	12	0.75	42°	

幅/長と抉りの幅/深は推定復原値のものを含む

Tab. 15 石 鏃 計 測 表

挿図番号	出土区	層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm) 長さ	幅	厚さ	幅/長	抉り(mm) 深さ	幅	幅/深	先端角度	分類
131	弘-59		灰青色ob	C	0.55	20	15	3	1.29	6	11	0.55	53.5°	
132	C-56	II 上	黒色ob	D	0.85	24.3	14	5	1.28	7.5	11.5	0.65	47.5°	
133	N2-H 11	II	安山岩	完	2.01	38.1	20.5	5	1.86	6.8	12.2	0.56	26°	
134	R4-73		黒色ob	A	1.15	31	15	3.8	2.07	4.7	10	0.47	30°	

幅/長と抉りの幅/深は推定復元値のものを含む

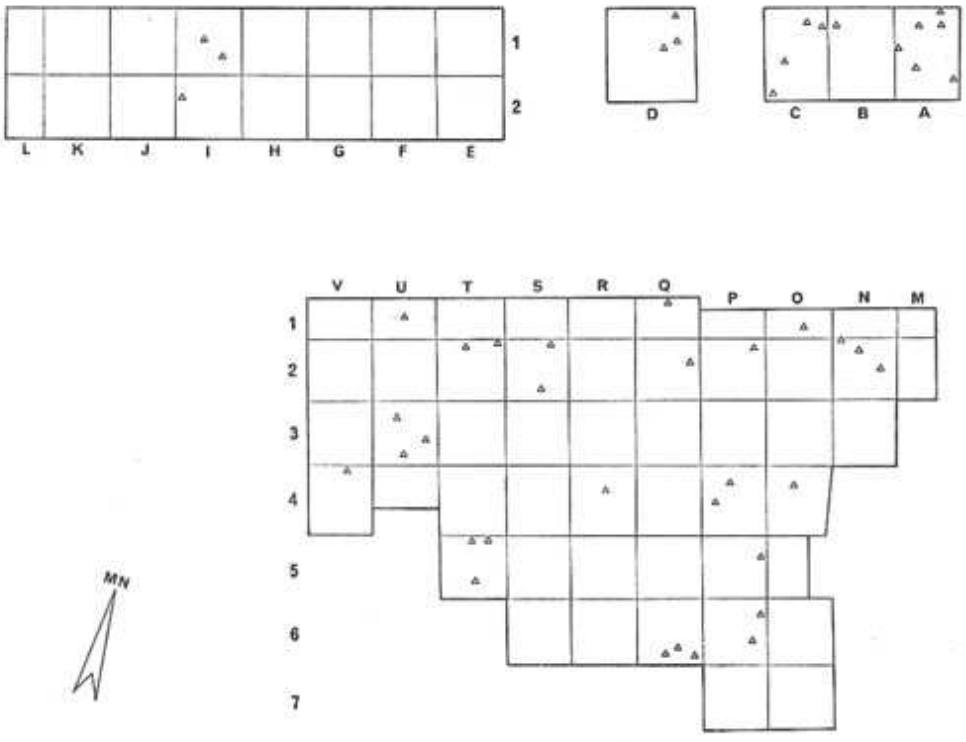


Fig. 87 石器平面分布図（石核）

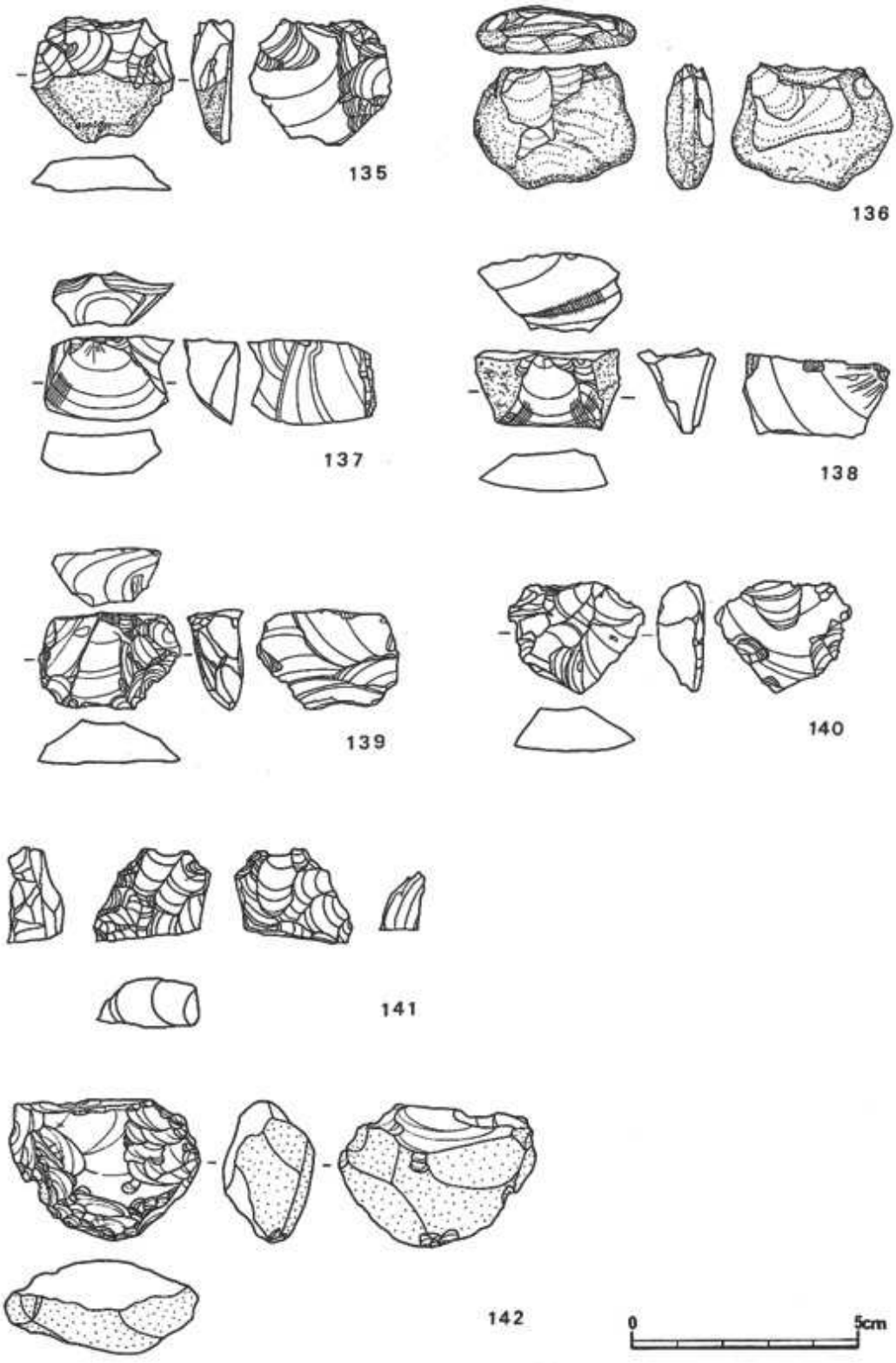
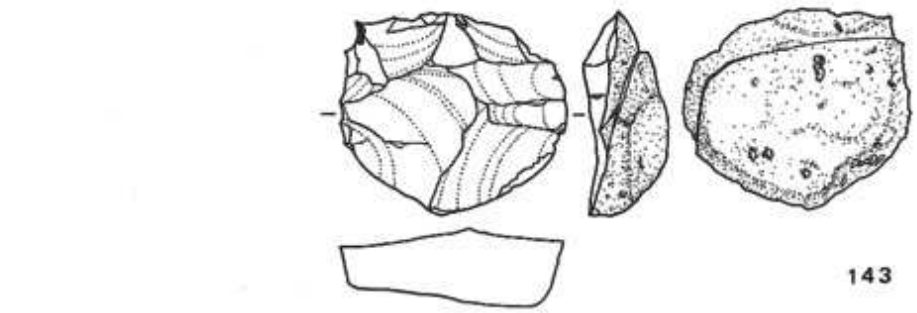
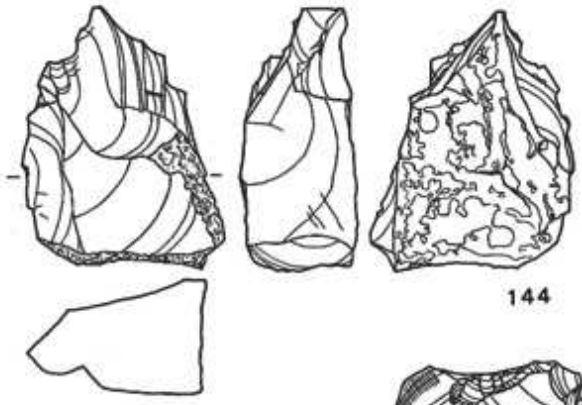
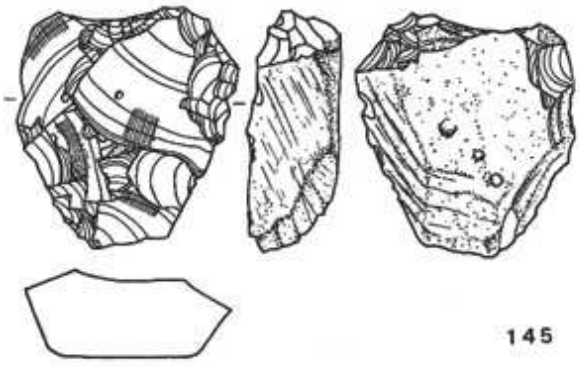


Fig. 88　石核実測図①（$\frac{2}{3}$）







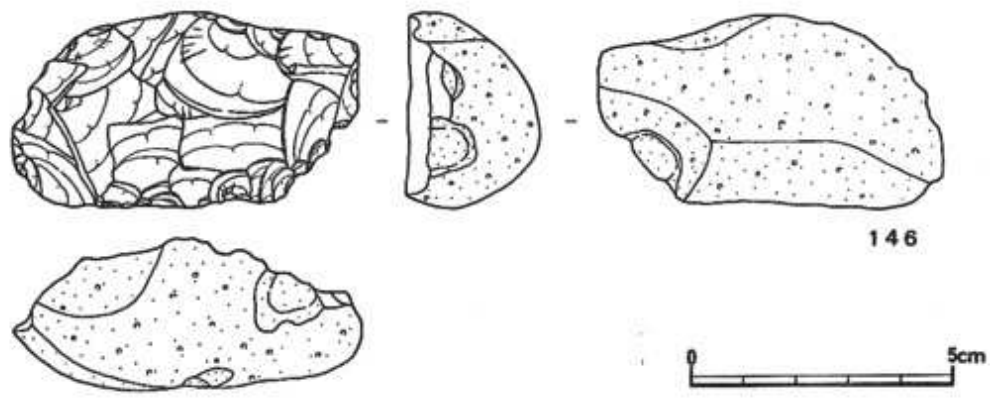


Fig. 89　石核実測図②（$\frac{2}{3}$）

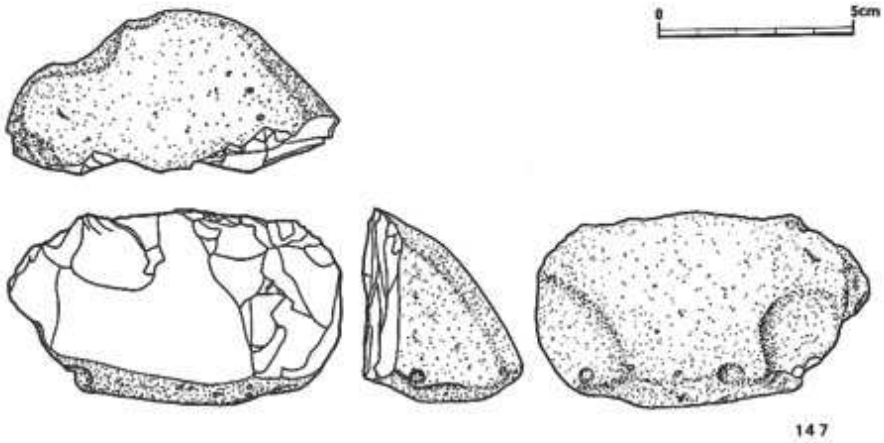


Fig. 90　石核実測図③（$\frac{1}{3}$）

◦**石核**（Fig. 88-135～142, Fig. 89-143～146, Fig. 90-147, PL. 80～83）

全部で44点出土している。そのうち特徴的な13点を図示した。比較的大きな礫を母材とするものと良質の黒曜石を選択した小形のものがあり，その一部に自然面を残すものが多い。一定の剝離技術で剝離したものではなく，不定形の石核である。これらの中にあって**137～140**は断面が楔形を呈する特殊なものである。**137**と**138**は，石質が黒曜石，大きさが約3㎝，剝離技術の酷似，すなわち，折断後の第1剝離がヒンジを起こしている。主要剝離面の打点が同方向である。断面が楔状を呈す等である。**139**，**140**，**141**は更にこの発達したものかどうかについては推論の域を出ない。**135**は楔形石器の範疇か？

石材が黒曜石・安山岩・チャートと限定される中にあって，特異例として眼につくのが**144**の石核である。黄土色で滑らかな肌をもち，樹脂状の光沢がある。専門家の鑑定は得ていないが，玉髄の一種ではないかと考えられる。2次の調査を通じてその出土例はこの一例だけで，フレイク，チップ等の出土例はない。

◦**調整痕および使用痕のある剝片**（Fig. 93-148～159, PL. 84～87）

62点の出土をみ，出土石器中第4位を占める。小剝片でノッチ状にチッピングされたもの（**149**），折断されたもの（**150～152**，**154**，**156**，**159**），縦長剝片の両エッジを使用したもの等多種多様ある。**151**は折断後，作出された平坦な面をプラットフォームとし段階剝離を施しており，他の器種の未製品とも考えられる。**157**，**158**は特徴的な縦長剝片で，一見石刃を思わせる形態を有している。**158**は第2次剝片である。両者とも両エッジに細かい使用痕が見られ，とくに**157**は鋸歯状を呈する程である。

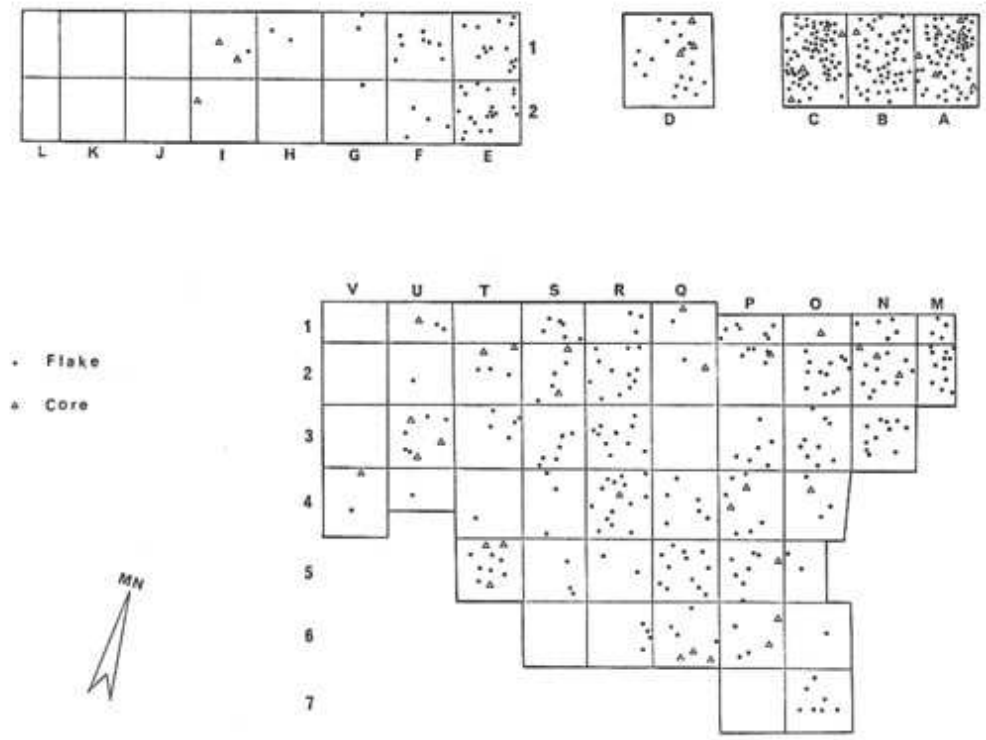


Fig. 91　石器平面分布図（石核・剥片）

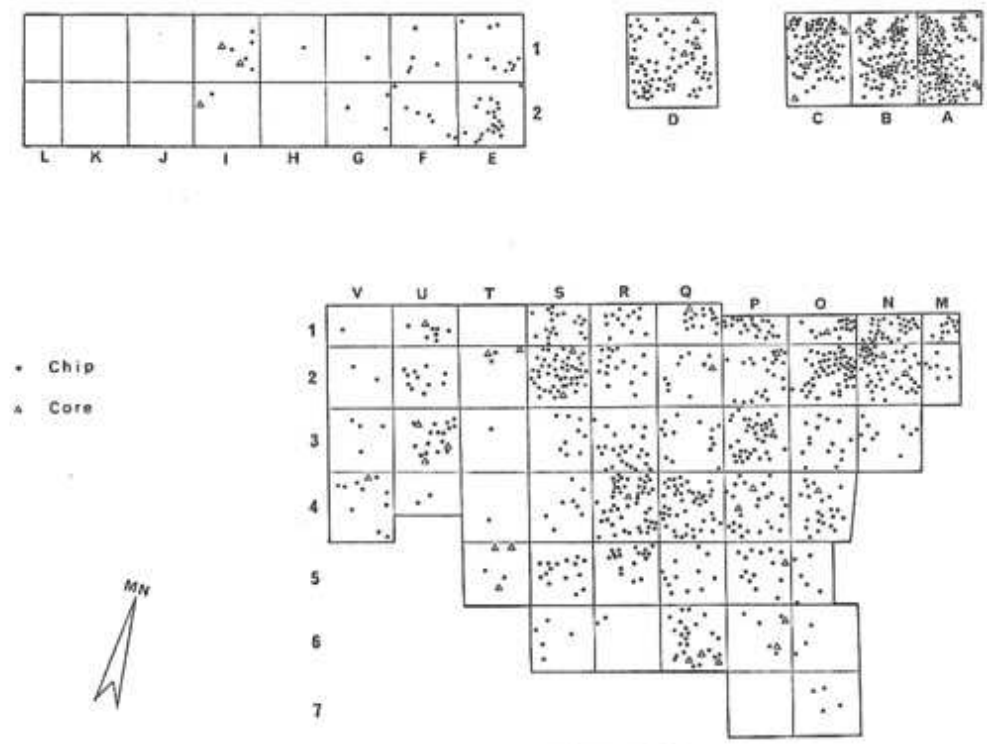


Fig. 92　石器平面分布図（石核・砕片）

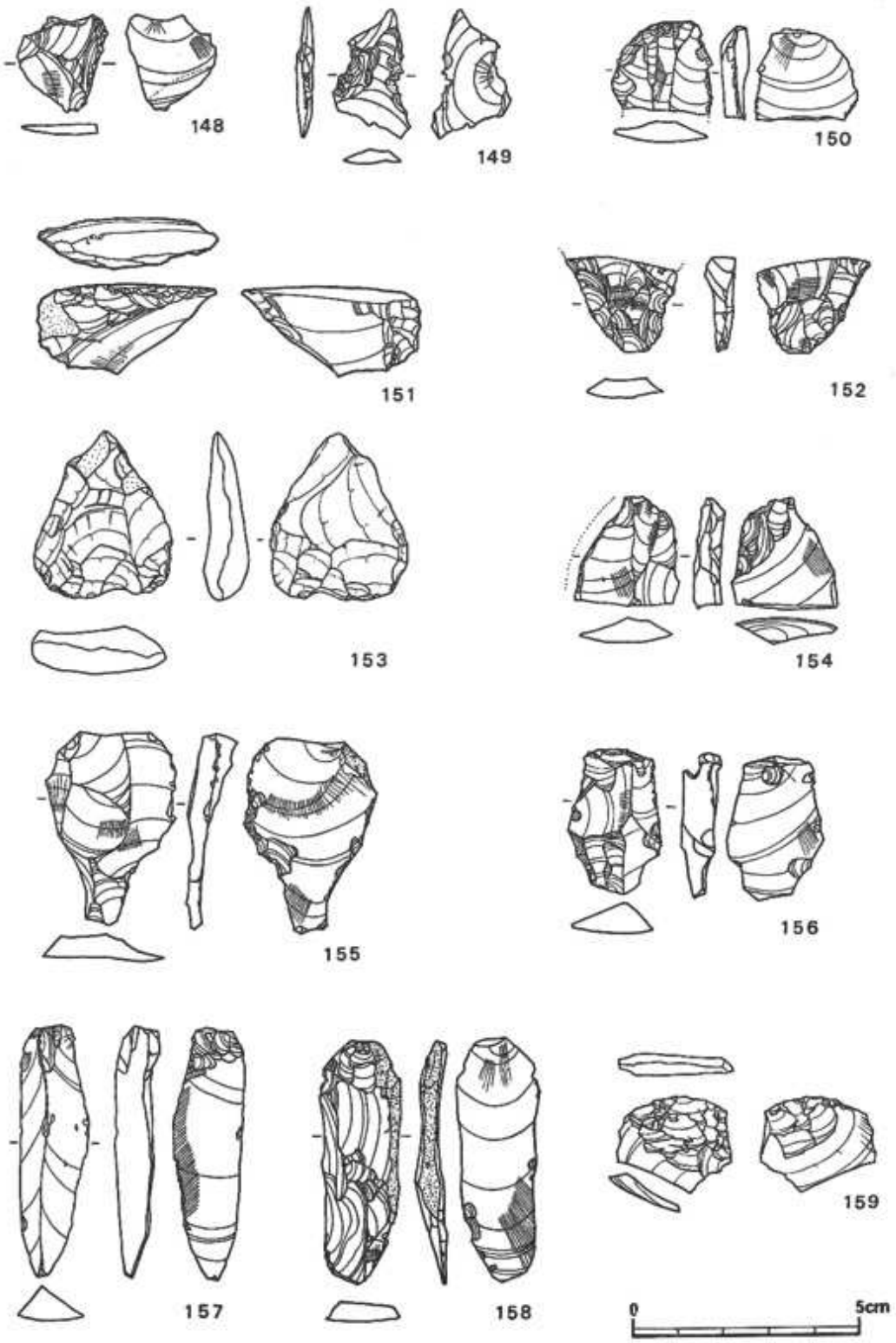
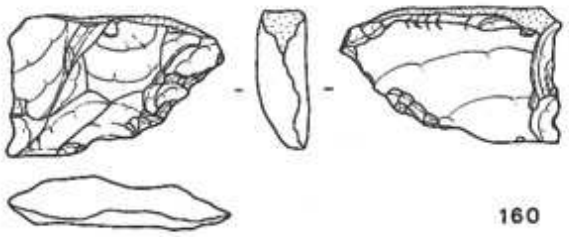
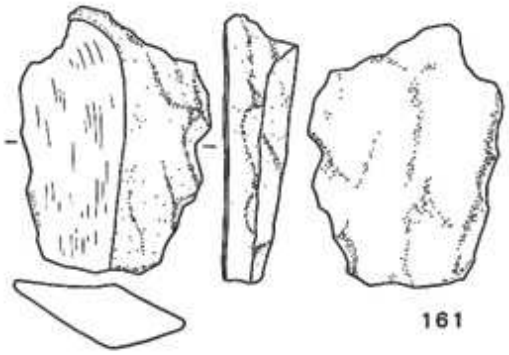
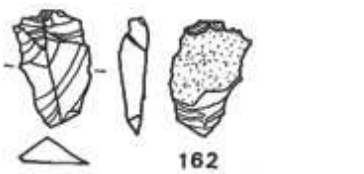
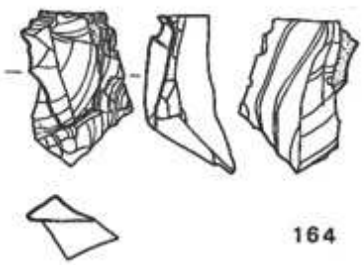


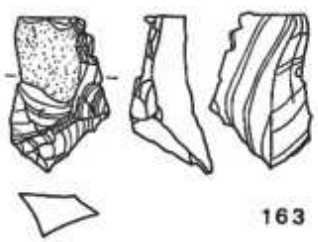
Fig. 93　調整痕および使用痕のある剥片（$\frac{2}{3}$）











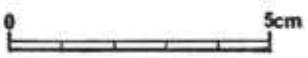


Fig. 94 剝片実測図①（$\frac{2}{3}$）

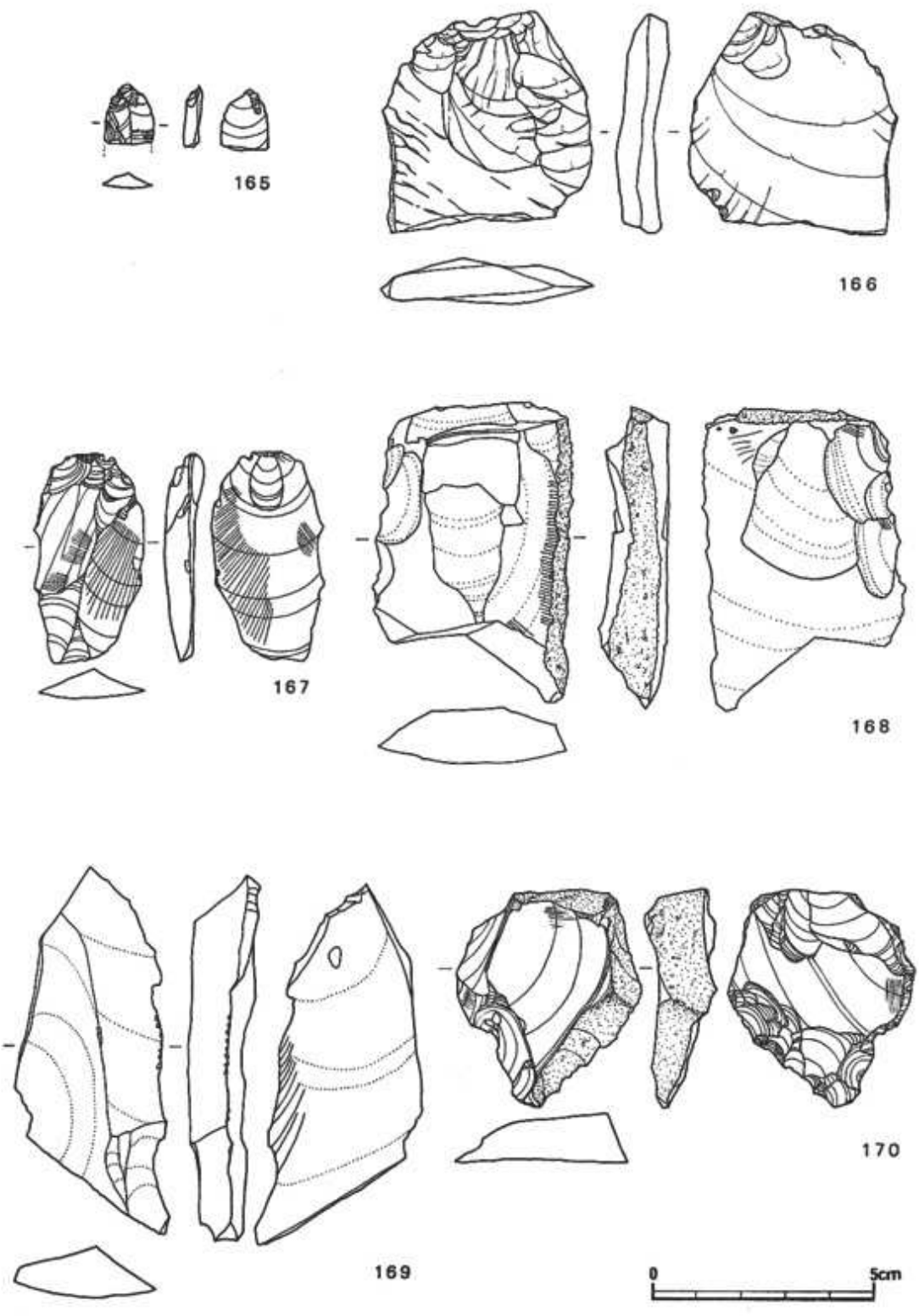


Fig. 95 剝片実測図②（$\frac{2}{3}$）

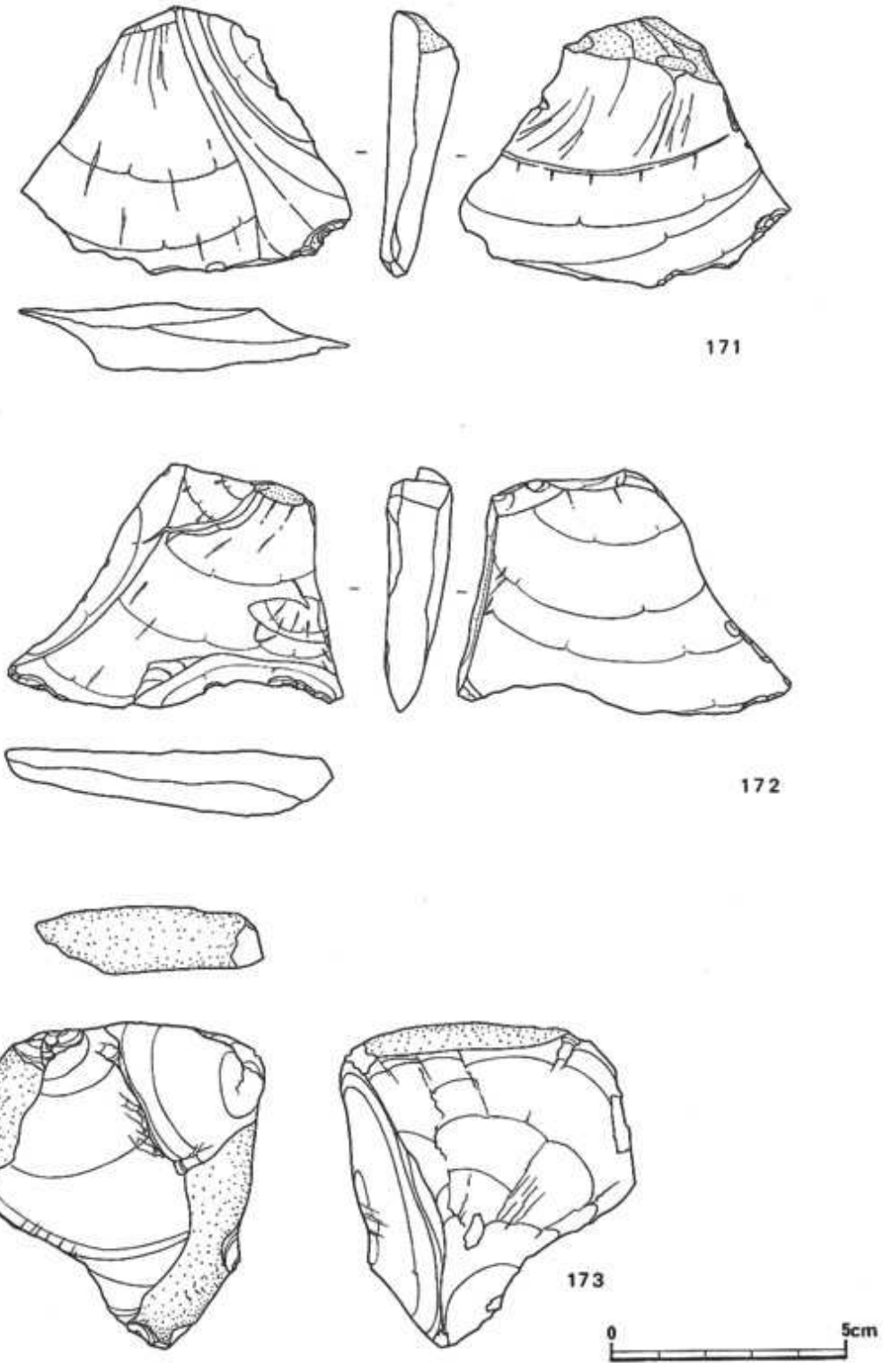


Fig. 96　剝片実測図③（$\frac{2}{3}$）

◦**剝片**（Fig. 94-162～163，Fig. 95-Fig. 96，PL. 88～90）

486点の出土があり，不定形の剝片がその主体をなす。総じて黒曜石の剝片は小形で，安山岩のそれは比較的大形となる傾向を見せる。とはいえ，こんな大形の剝片を作出する大形の石核の出土はない。

165は黒曜石製で一見スモール・ブレイドを連想させるが，他に類似品や石核の出土を見ないので単なる剝片として取扱っておく。

173は赤色の緻密な成分構成を持った岩石で頁岩かシルト岩であろうか。これも前出の玉髄石核同様単独出土である。

接合資料例として剝片同志の接合が1例ある。(Fig. 94-162～164) 石材はチャートである。

◦**磨製石斧**（Fig. 98～101，PL. 92～95）

12点の出土をみる。ほぼ完形が1点（**175**）で，他はすべて破損品であり，その破損状況も形態的にみてまちまちである。推察するに，使用時における破損例が多いようである。（**176～179，183，184**）石斧の中位部で刃部と並行に折れているもの（**174，180～182，185**）もあり，単なる石材の相違によるものか，あるいは使用方法の違いによるものか検討を要する。

概して，刃部は良く研磨されており，研磨痕が明瞭に識別できる。鏑が作出されているものもある。（**174，176，177，179，181，185**）

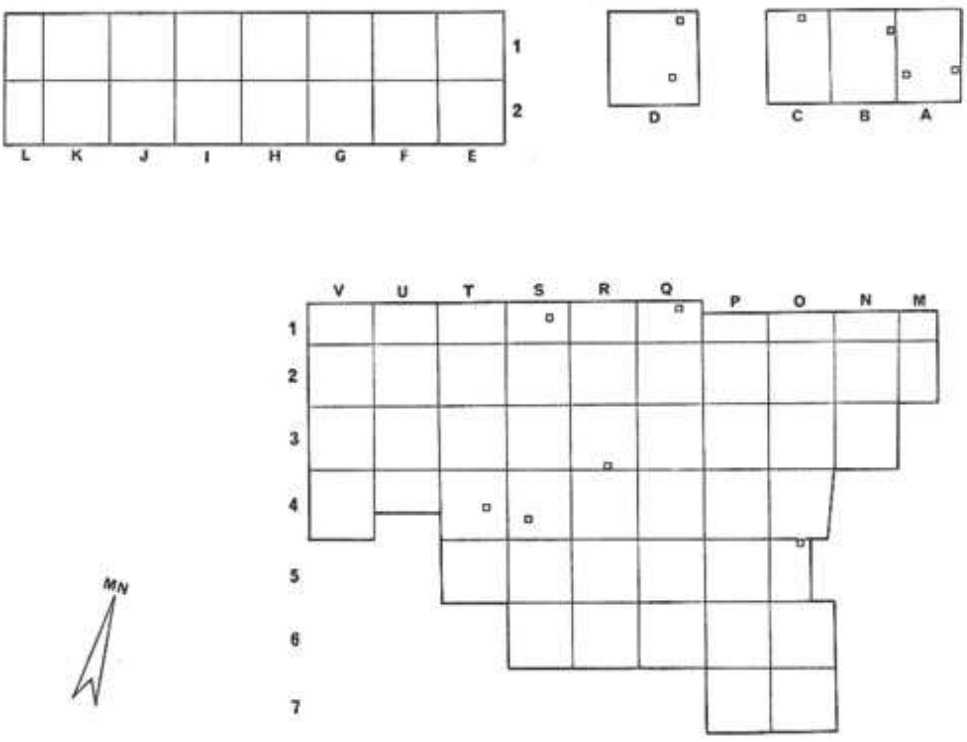
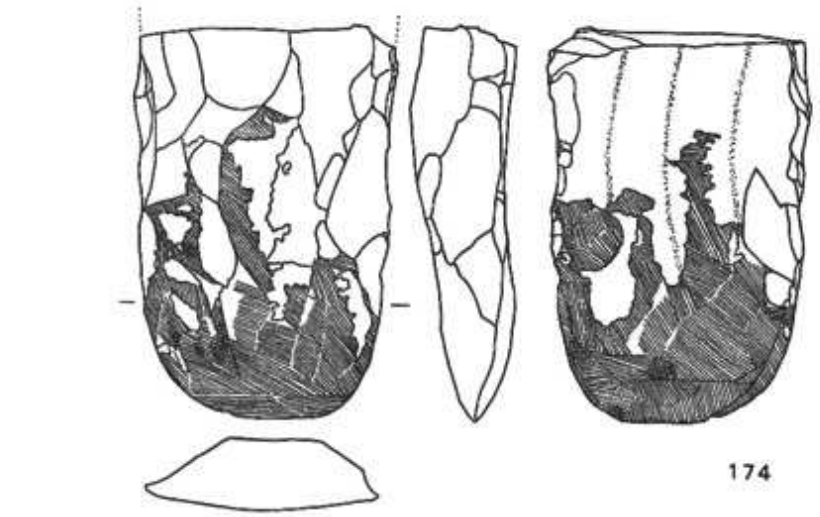


Fig. 97　石器平面分布図（磨製石斧）



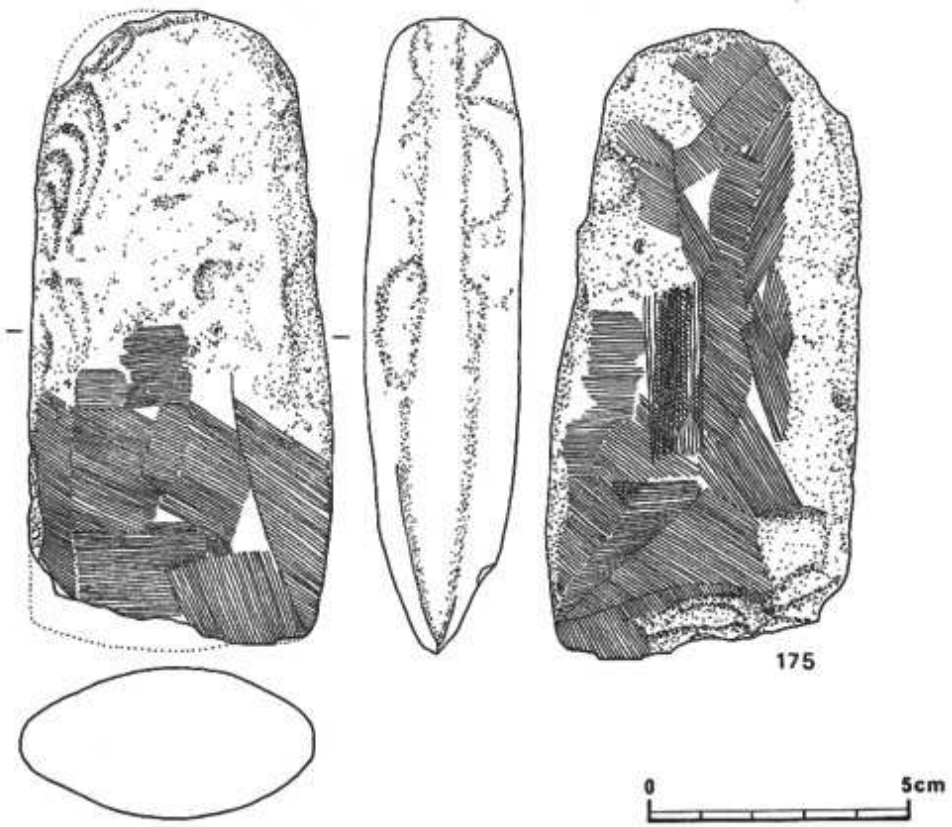


Fig. 98　磨製石斧実測図①（$\frac{2}{3}$）

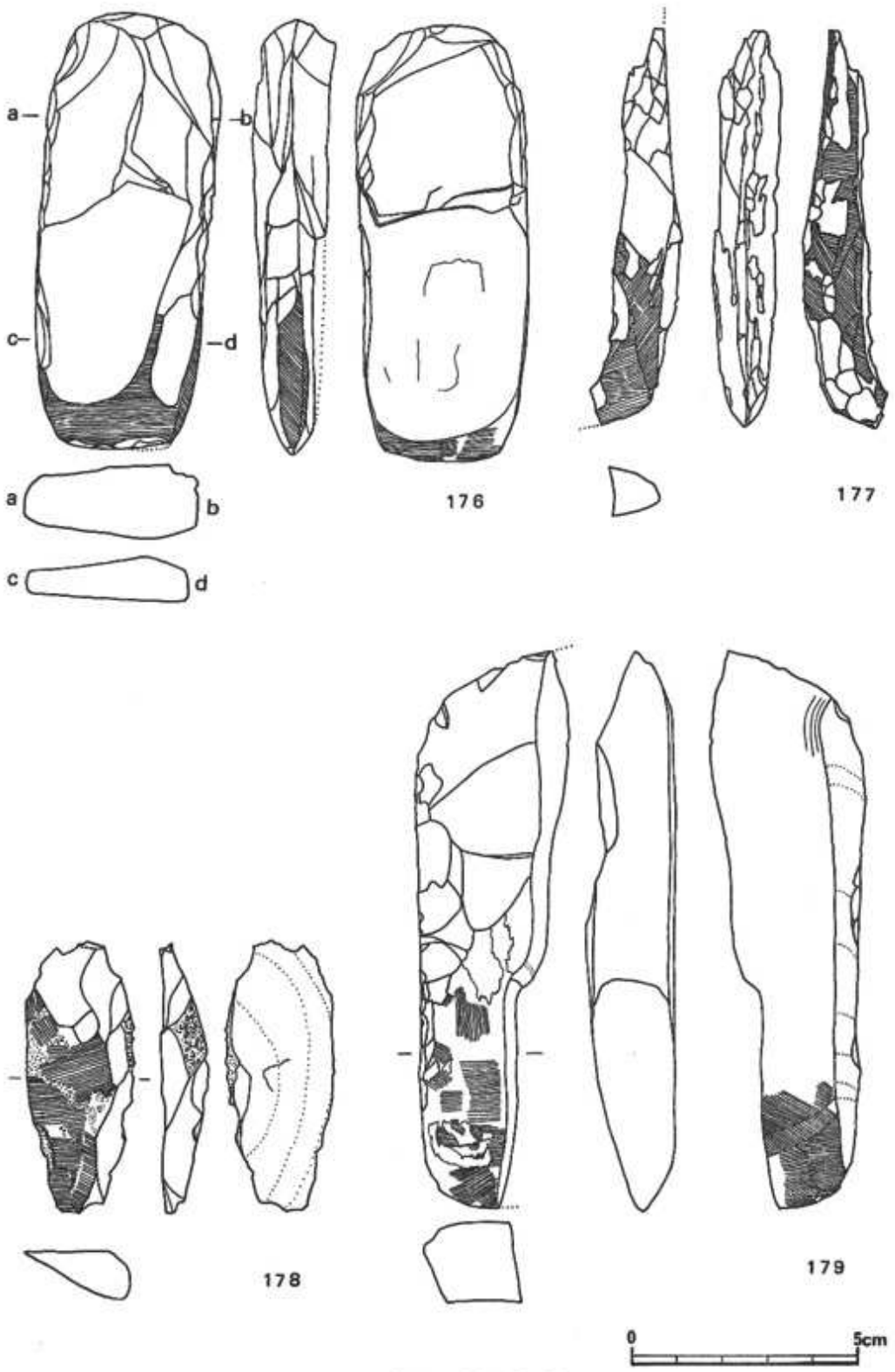


Fig. 99　磨製石斧実測図②（$\frac{1}{3}$）

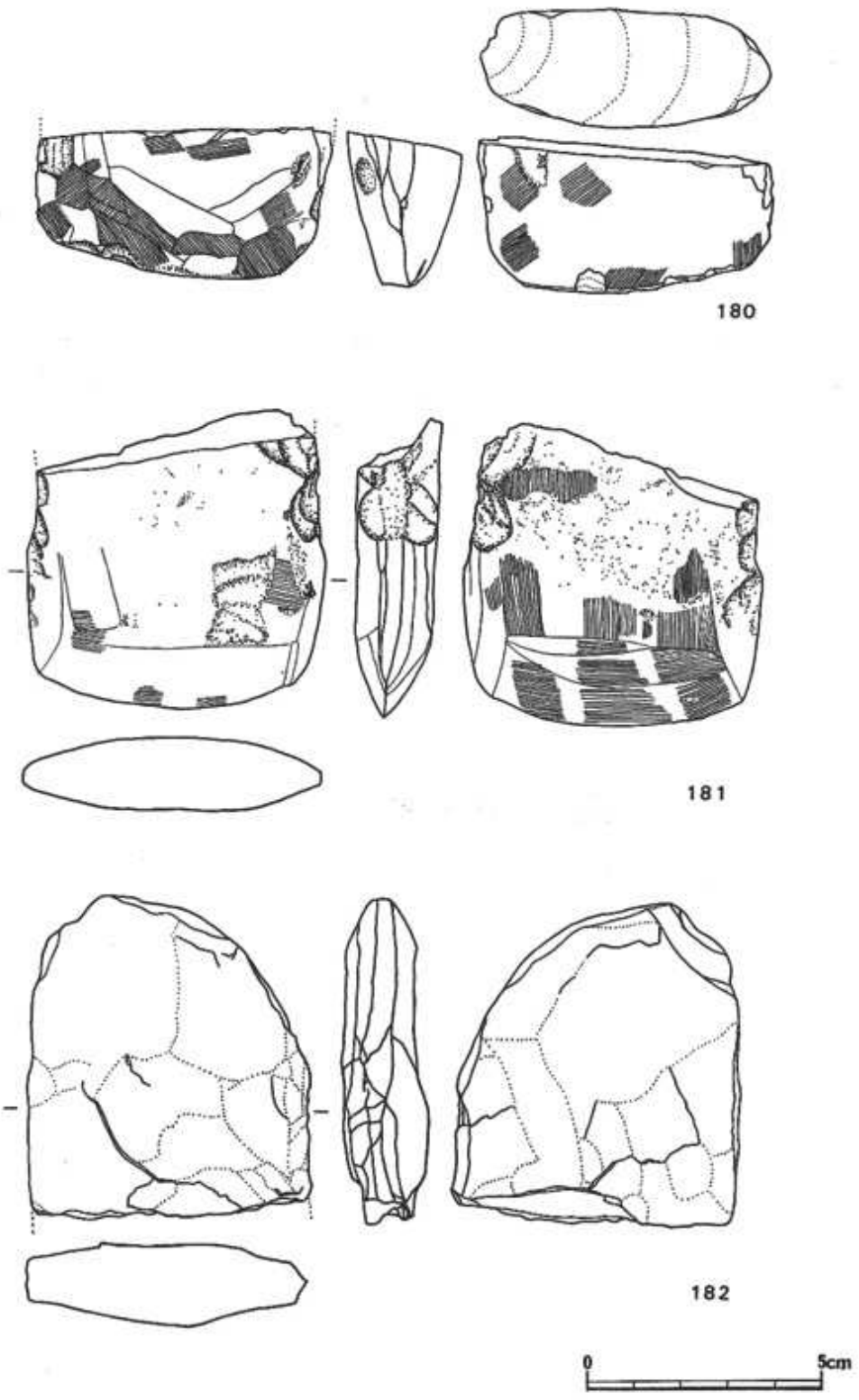
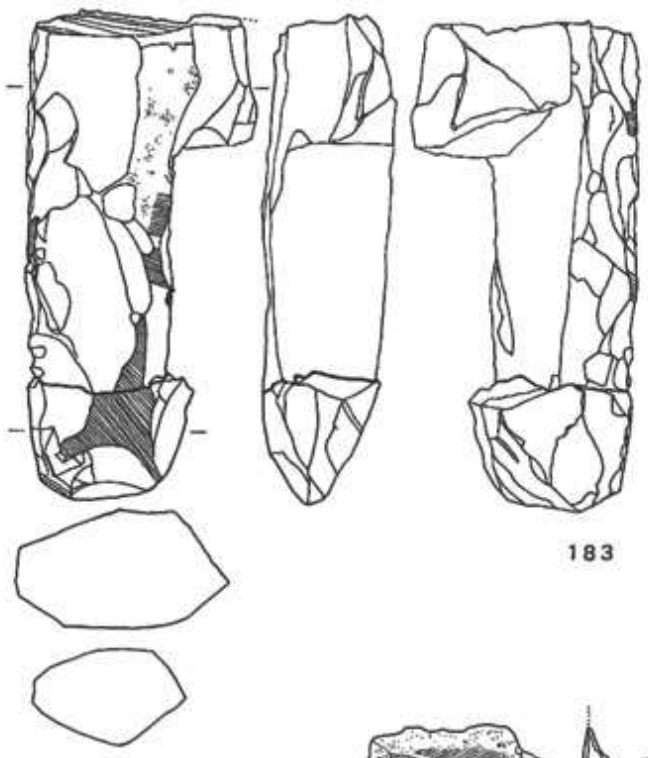


Fig. 100　磨製石斧・石斧実測図（$\frac{2}{3}$）



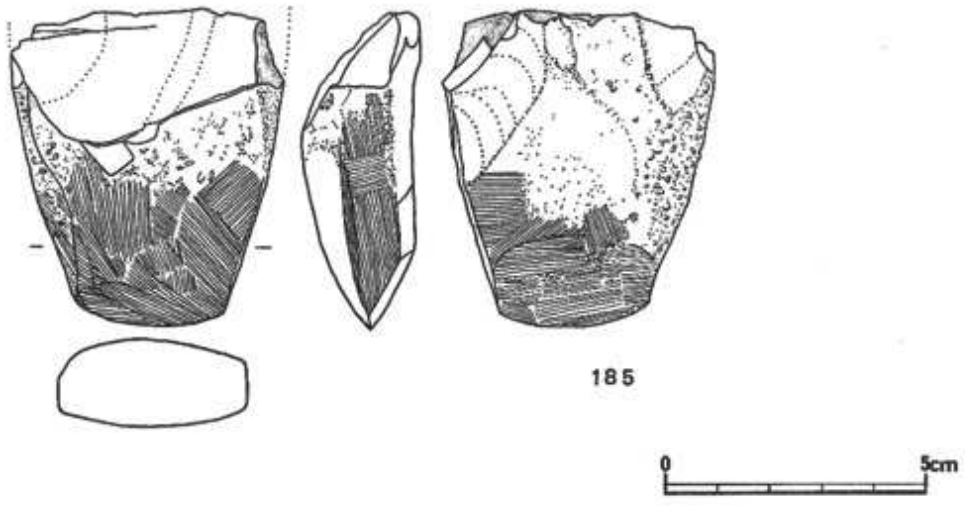


Fig. 101　石斧実測図（$\frac{2}{3}$）

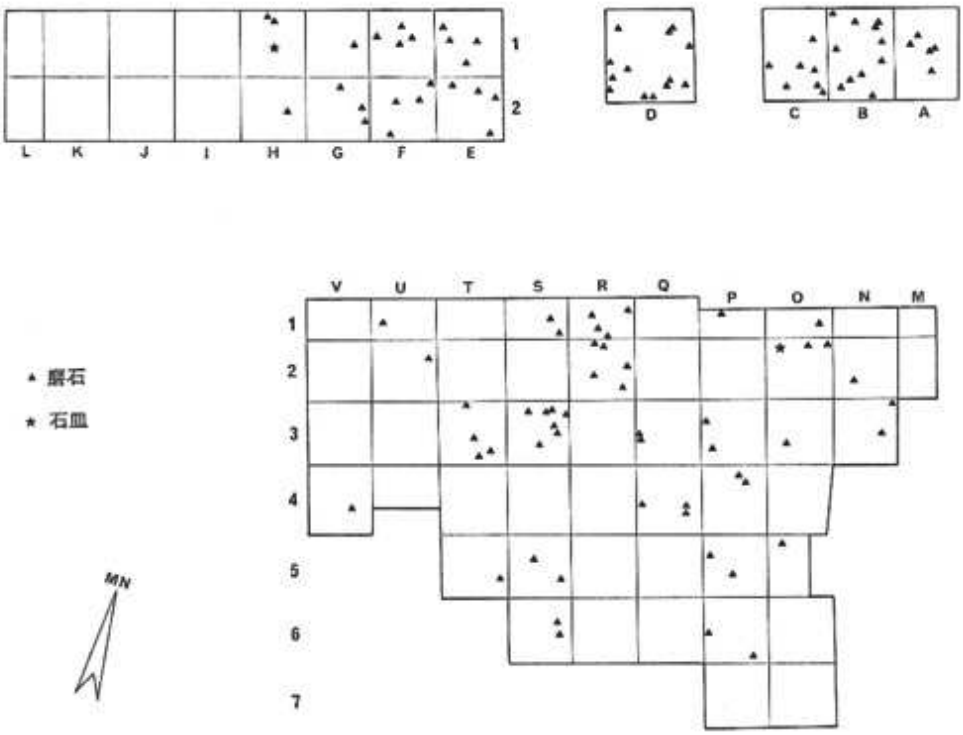


Fig. 102　石器平面分布図（磨石・石皿）

179はノミ状を呈し，刃部に浅い溝が並行して掘り回められている。細かい刃こぼれがある。175は全面に敲打整形痕を良く残す。178，180，185は横からの打撃により破損しており，176は石材の節理面での剥落であろう。刃部からの打撃による破損例は177，179，183，184である。182は粘板岩を使用し，扁平に仕上げている。中位より折損しているため形態は推察するしかないのであるが，打製石斧の可能性が強い。183は接合資料である。石材は硬砂岩で，石斧の片面中央部を一部研磨したに過ぎない。

◦その他の石器　(Fig. 94-161, PL. 91)

161は緑色片岩で作られ，片面に研磨面を有する。研磨面は僅かに凹む。小破片であるが，比較的大形の製品が予想される。他に研磨痕を持たない同種石材の出土もあり興味を引かれるところである。

チップは2次の調査を通じて1,212点の出土数を数え，量において石器全体に占める割合が約52%と絶対優位を誇っている。さらに，その90%以上を黒曜石で占めている点も興味深い。

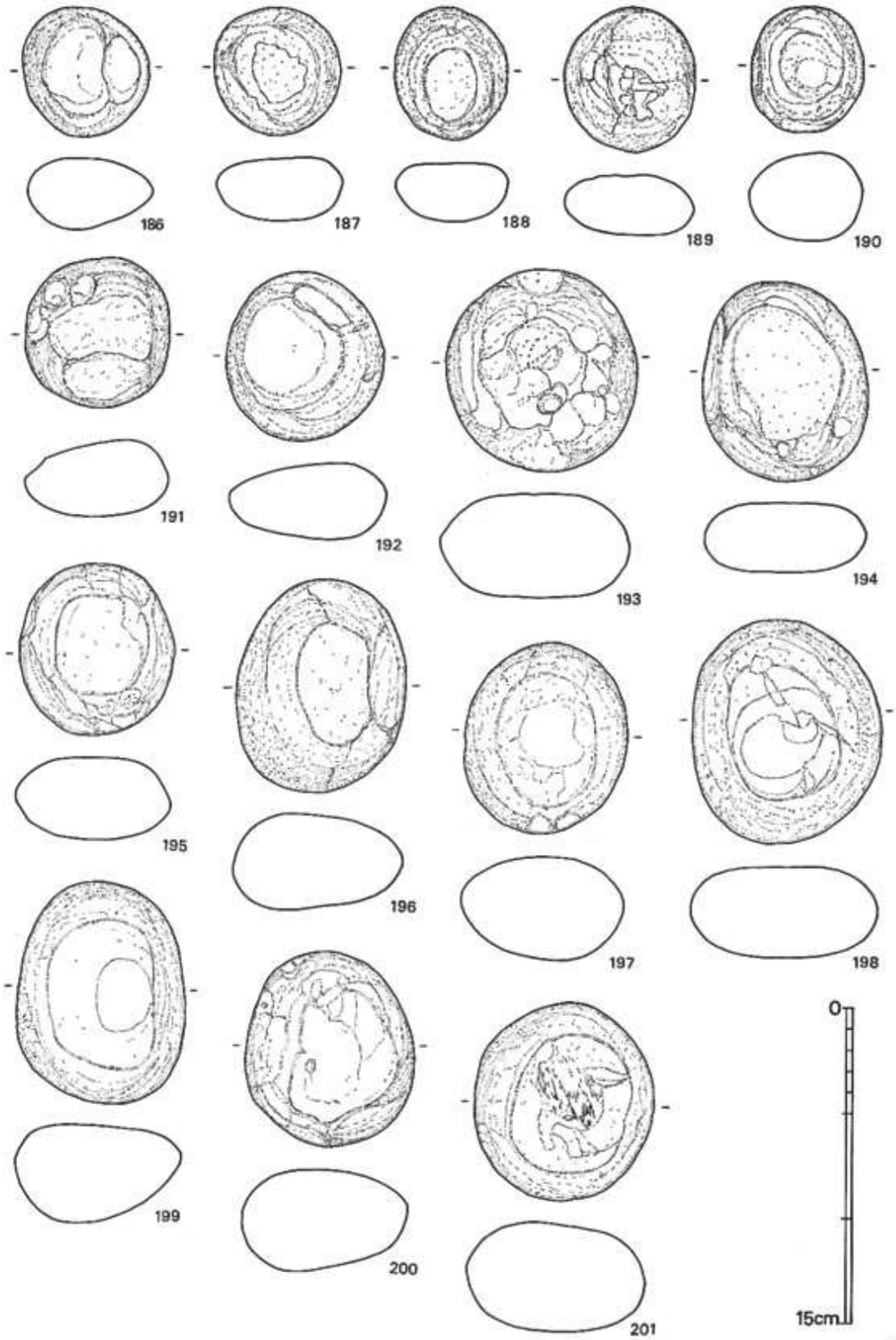


Fig. 103 磨石実測図① ($\frac{1}{3}$)

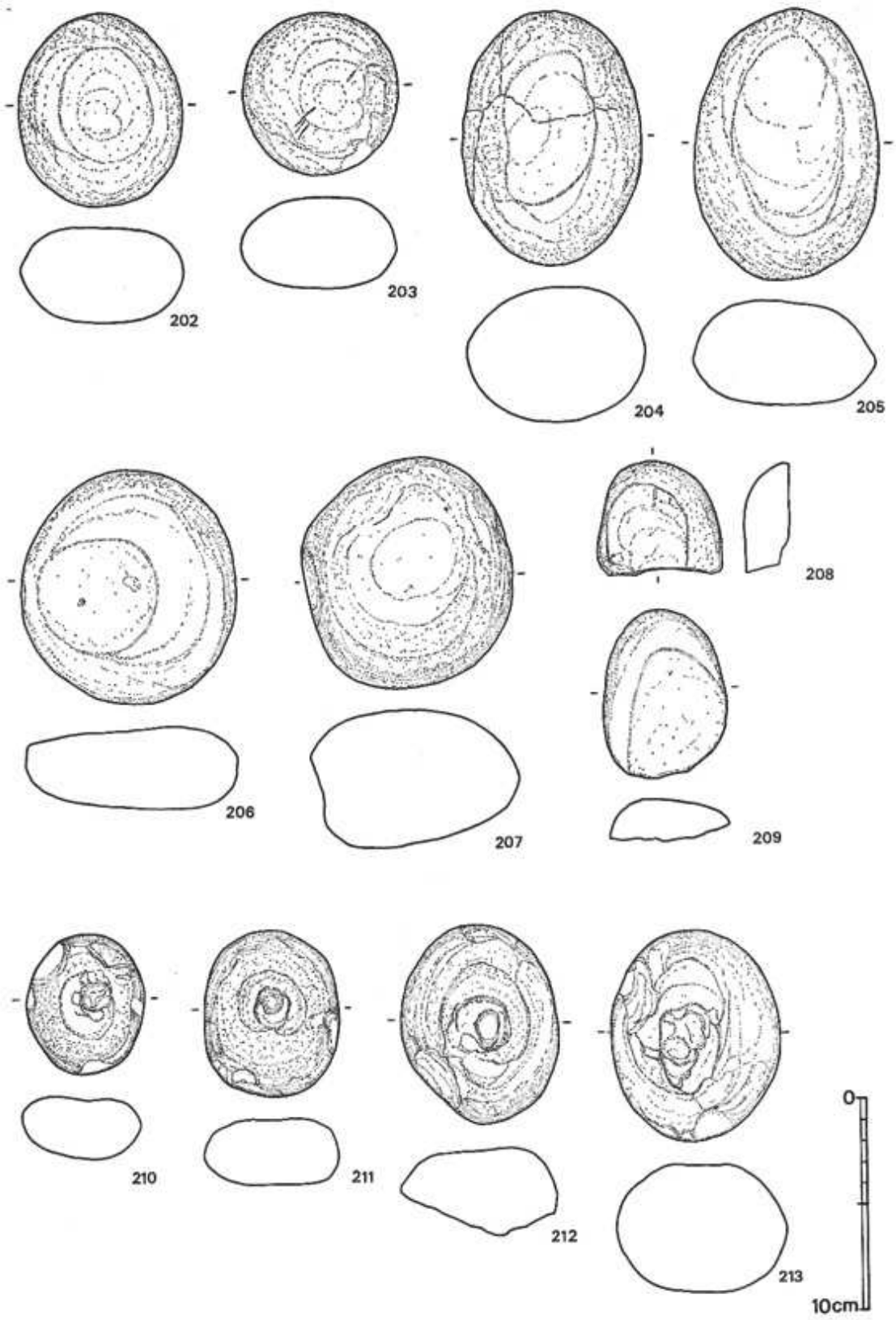


Fig. 104 磨石②，凹石①実測図（$\frac{1}{3}$）

◦**磨石・凹石**（Fig. 102～110, PL. 96～98）

弘法原遺跡を特徴づける石器組成のひとつにこの磨石がある。発掘資料で166点あり，表採品をも含めると相当量にのぼる。総じて，各地の遺跡を通観してみると石鏃の出土量は普遍的に優位を誇っているように見受けられる。しかし，当遺石においては，発掘資料のみに限ってみてみると，石鏃115点に対して磨石166点と優劣が逆転している。興味ある現象である。磨石と対をなす石皿の出土数は稀少であり，これもまた興味ある現象のひとつであろう。

抽出した各資料のデータは表のとおりである。

◦**石皿**（Fig. 112～113, PL. 99）

発掘資料は3点と稀少である。比較的大形のものであるがすべて破片である。**287**は形も良く整い，周辺に稜線が明瞭につく程中央部が凹んでいる。

◦**砥石**（Fig. 112-275～278, PL. 99）

4点出土している。すべて砂岩である。**276**は中央部に約3㎝の細い溝があり矢柄研磨器と考えられる。**279**, **280**は石の目も比較的こまかく，砥面は滑かでツルツルしている。すべて砂岩である。

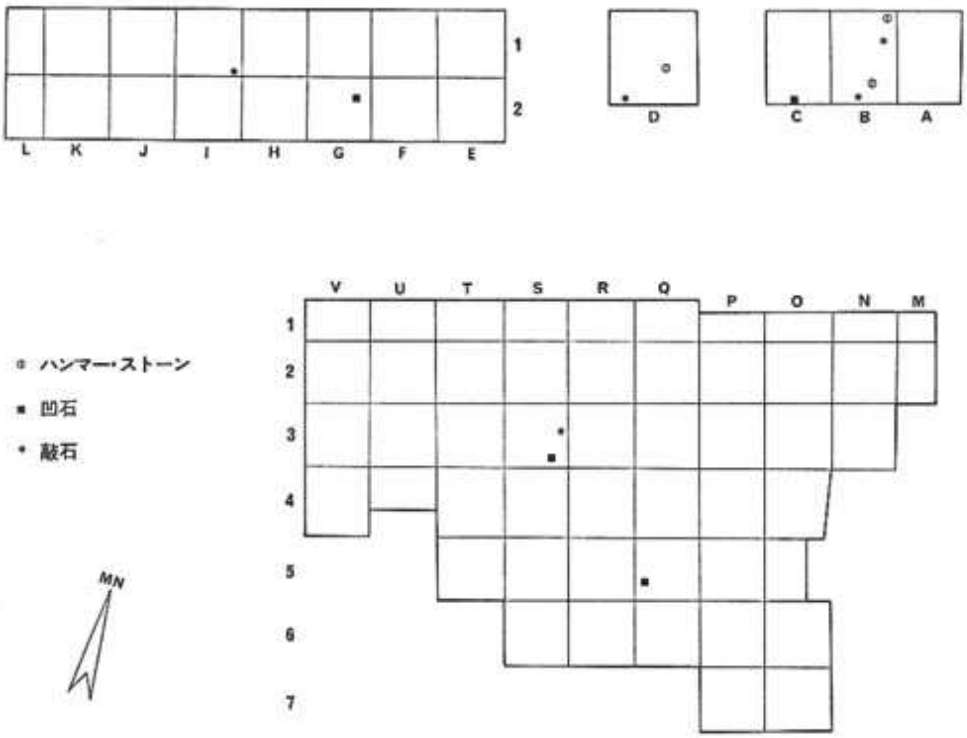


Fig. 105　石器平面分布図（敲石・凹石・ハンマー・ストーン）

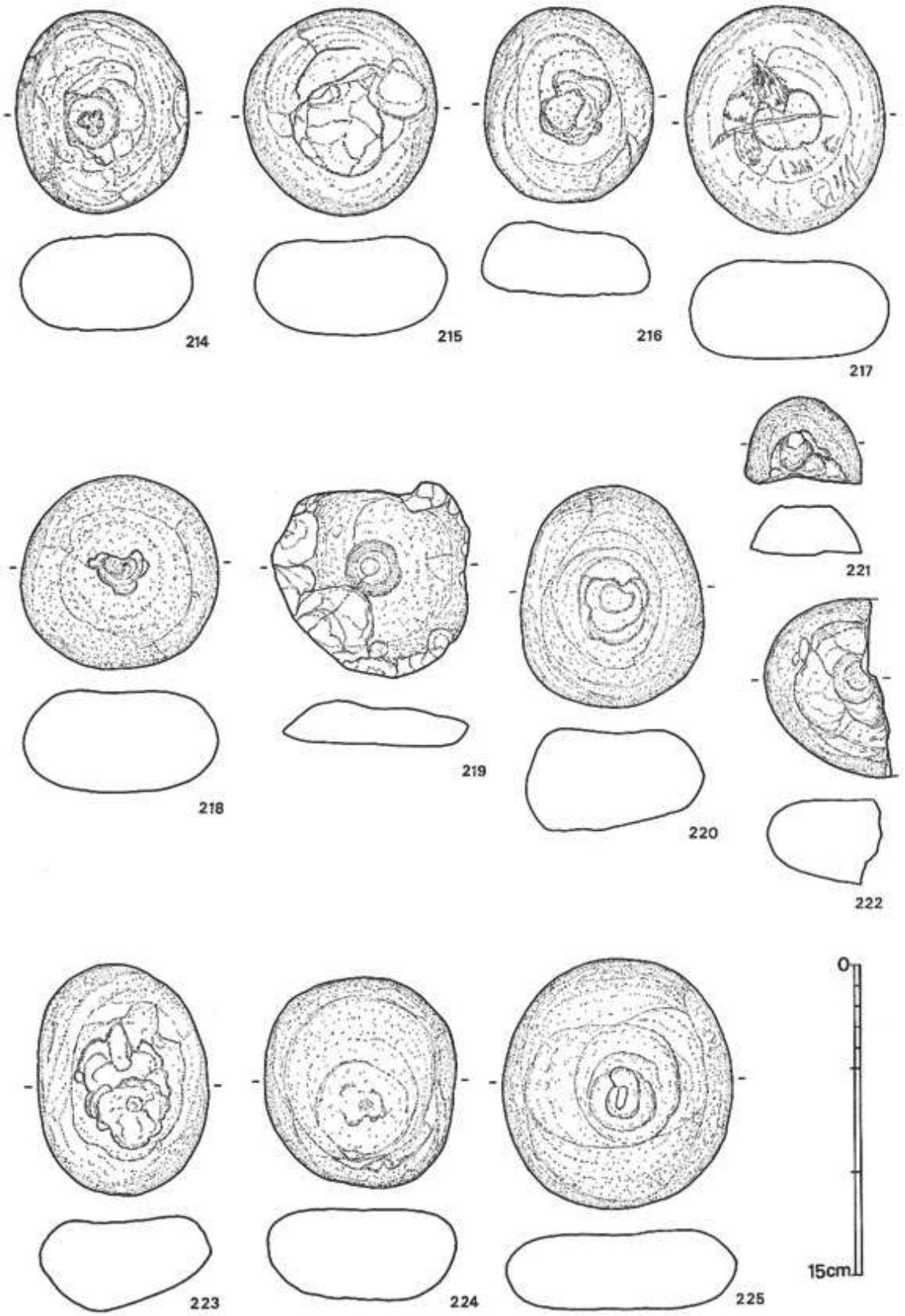


Fig. 106　凹石実測図②（$\frac{1}{3}$）

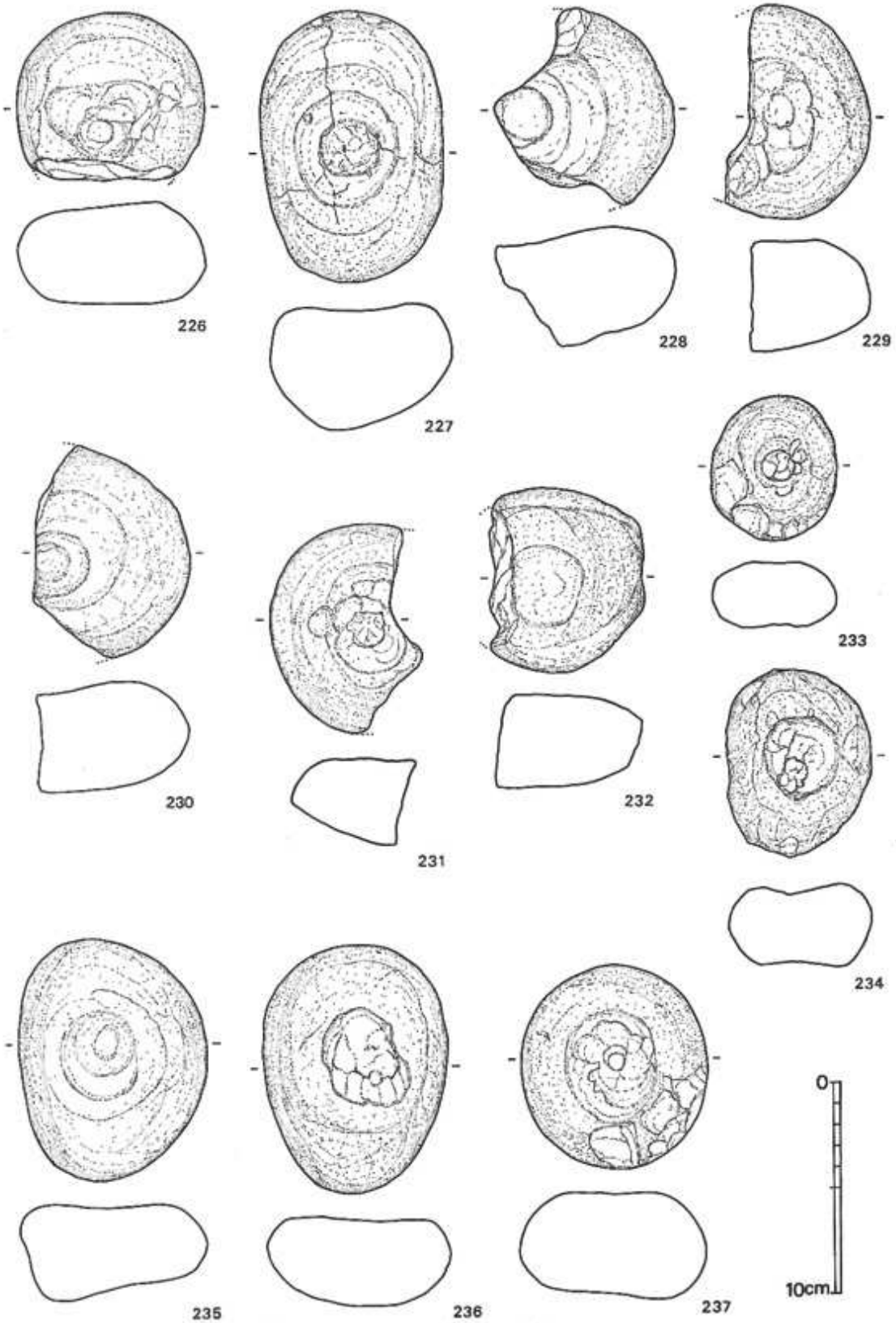


Fig. 107　凹石実測図③（$\frac{1}{3}$）

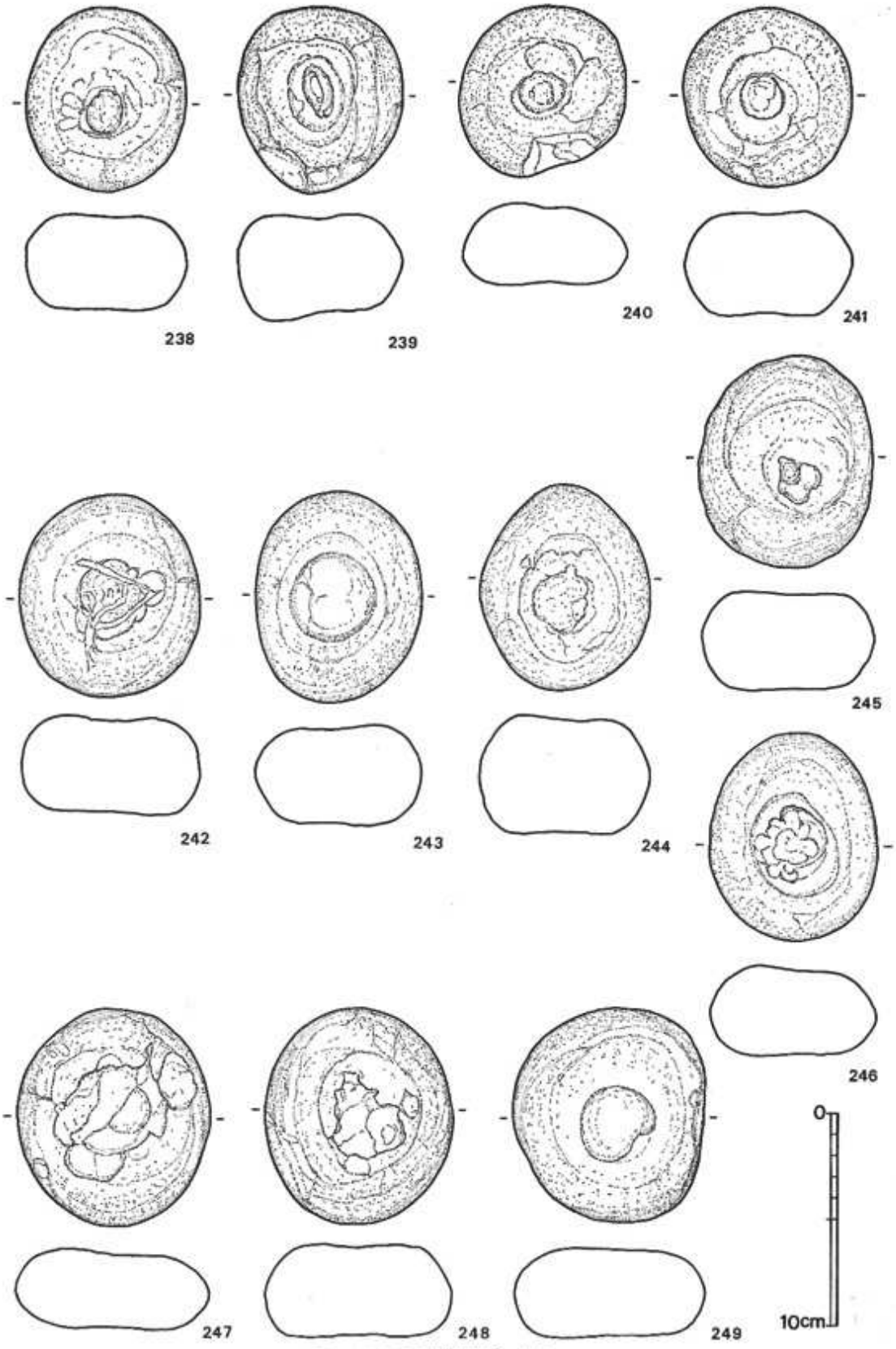


Fig. 108 凹石実測図④ (1/3)

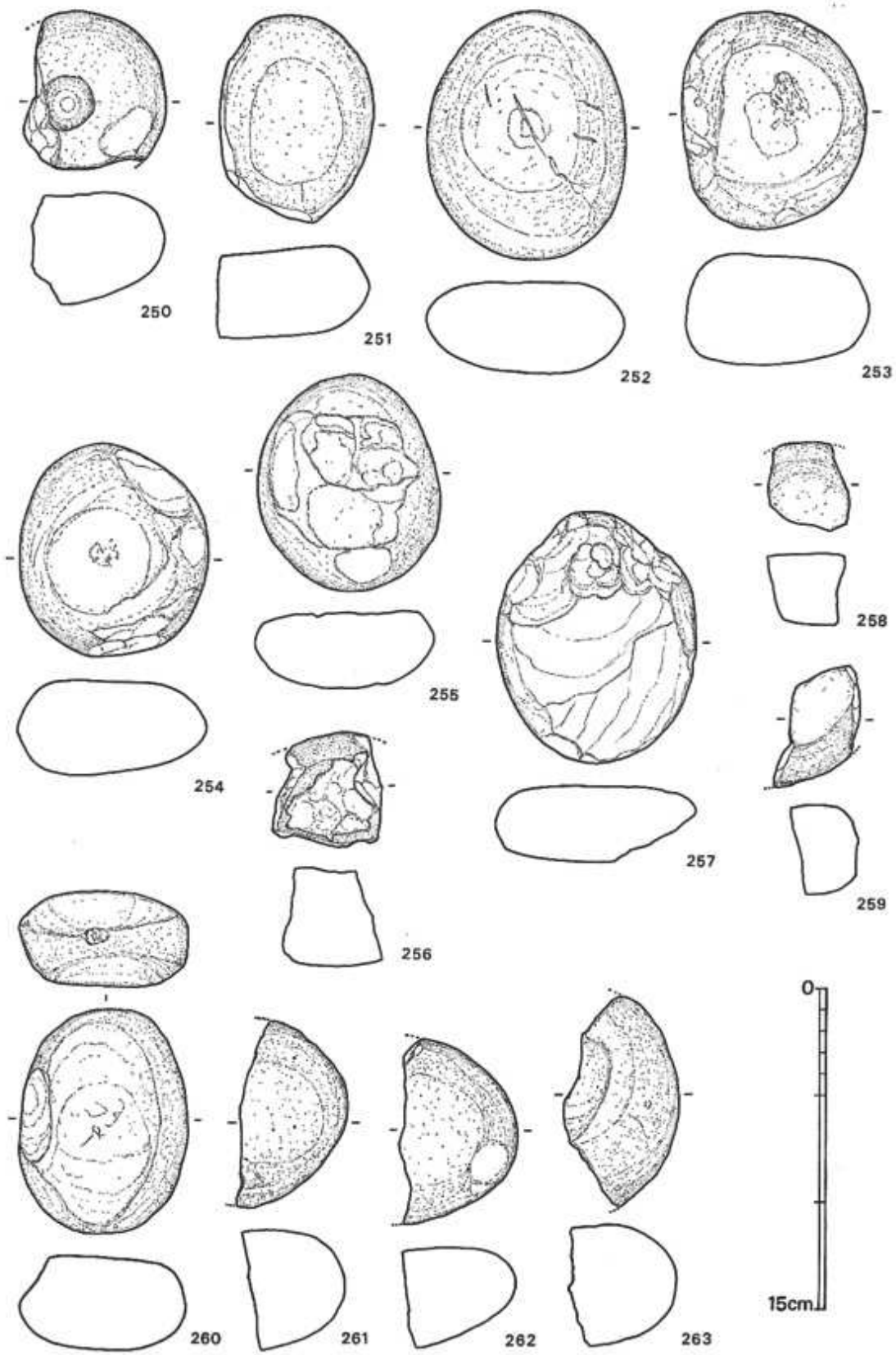


Fig. 109　凹石⑤，磨石，敲石，その他の石器①実測図（$\frac{1}{3}$）

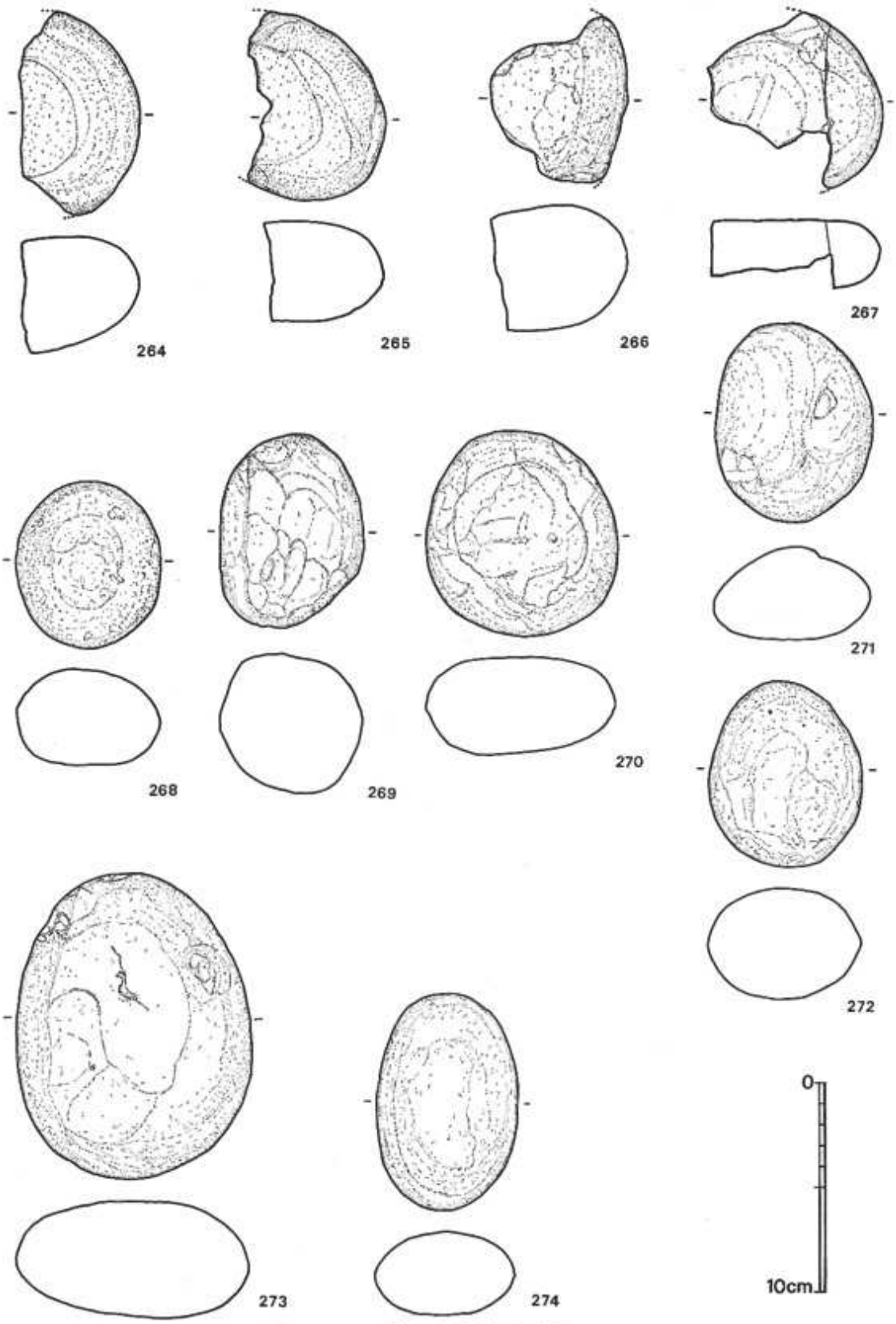


Fig. 110　その他の石器実測図②（$\frac{1}{3}$）

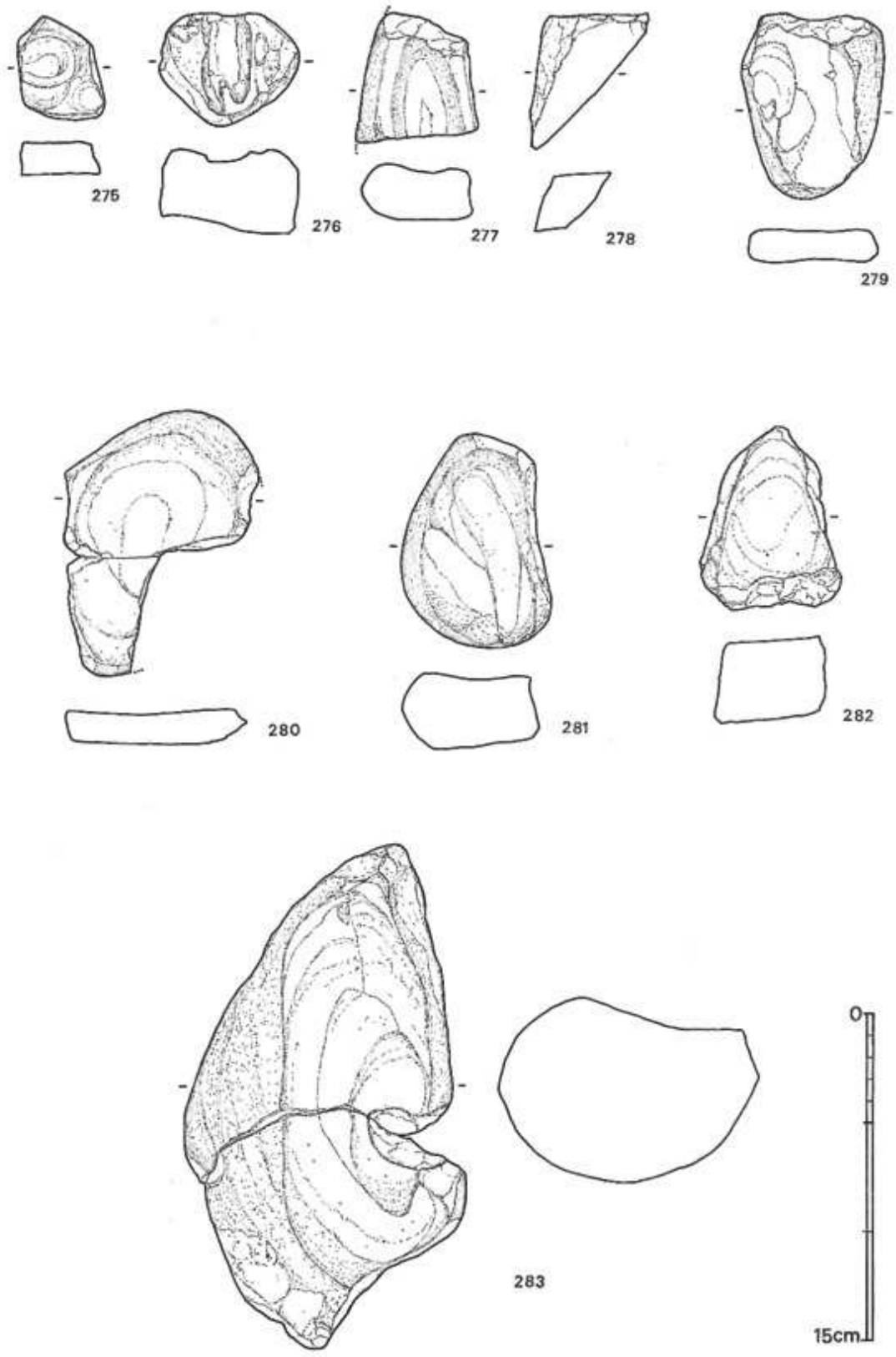


Fig. 111　凝石，石皿①実測図（$\frac{1}{3}$）

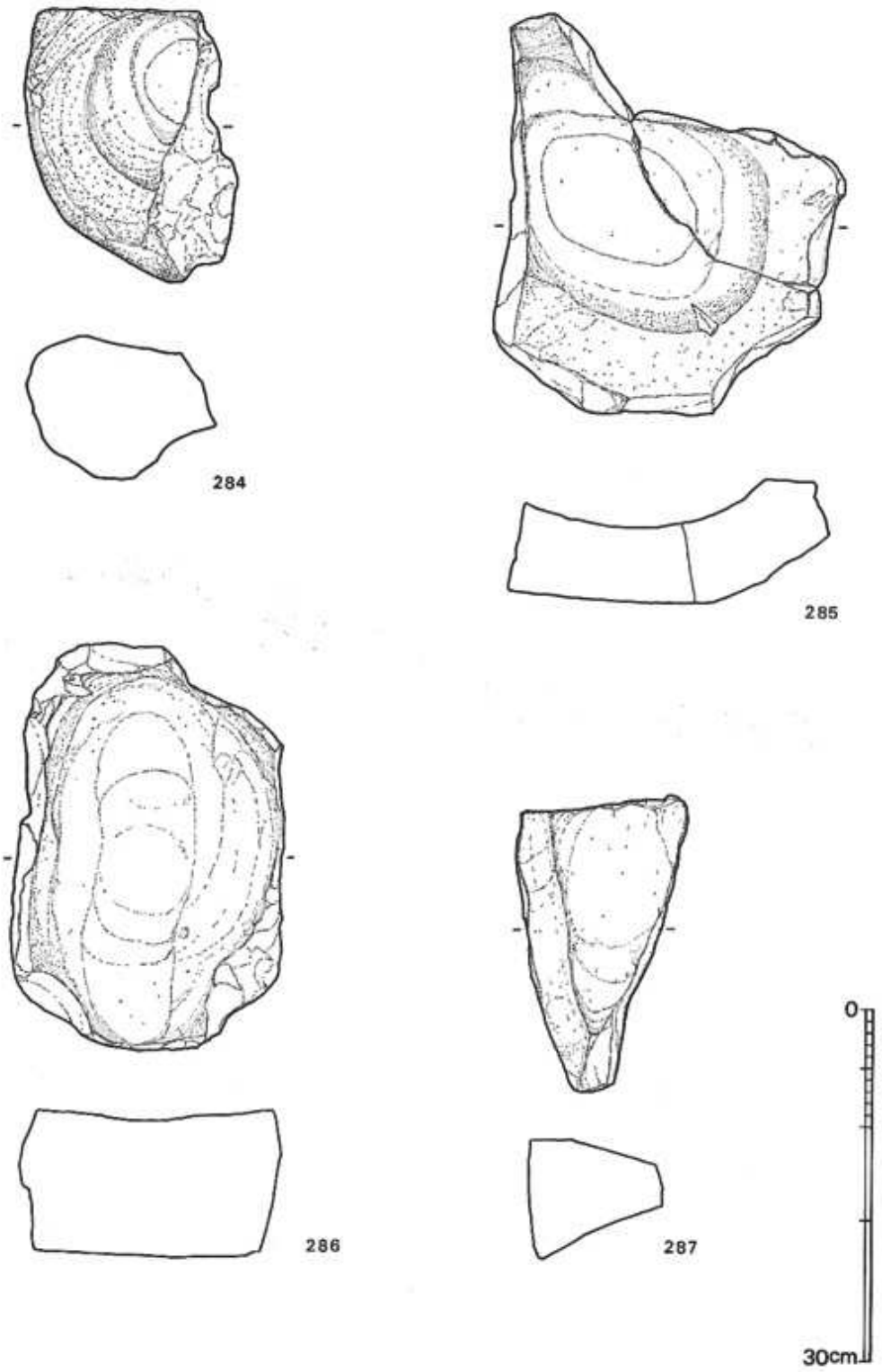


Fig. 112 石皿実測図② (1/8)

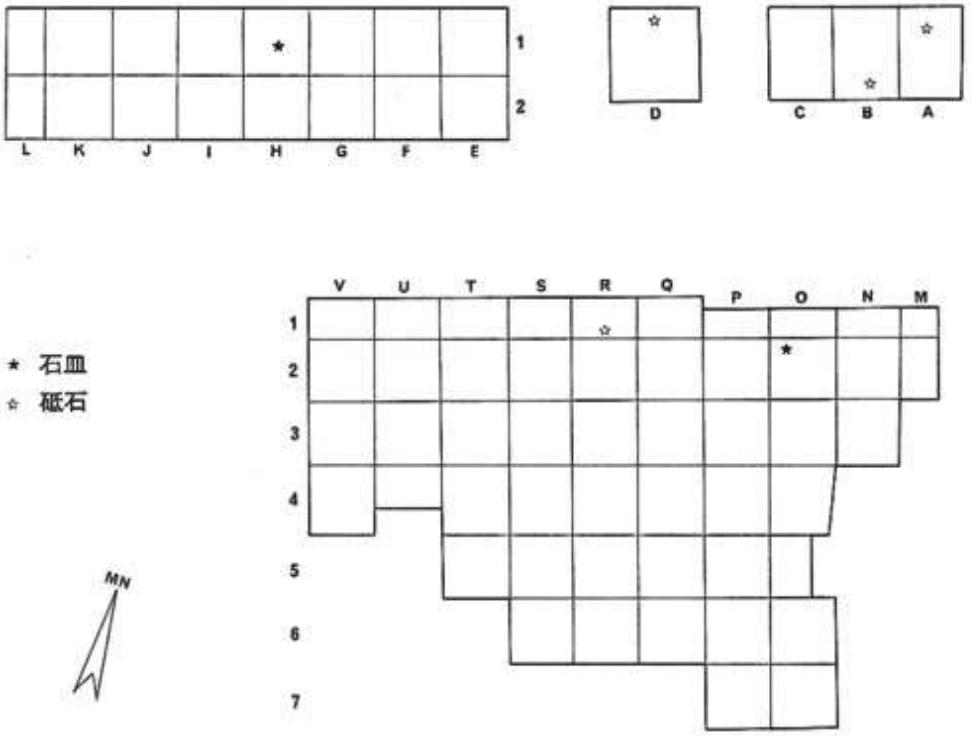


Fig. 113　石器平面分布図（砥石・石皿）

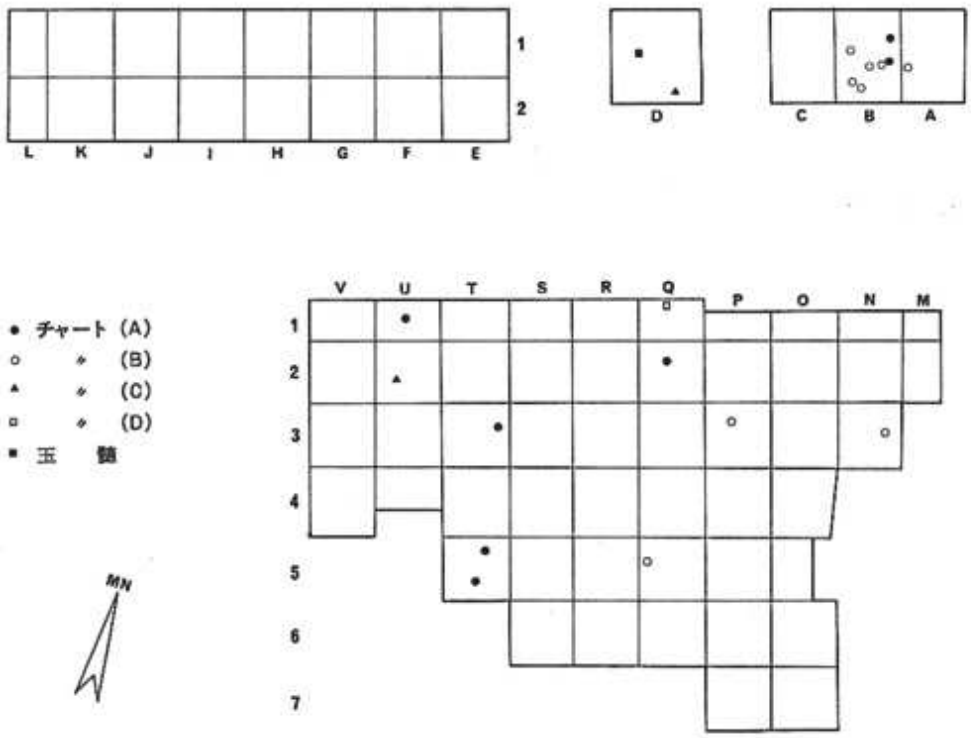


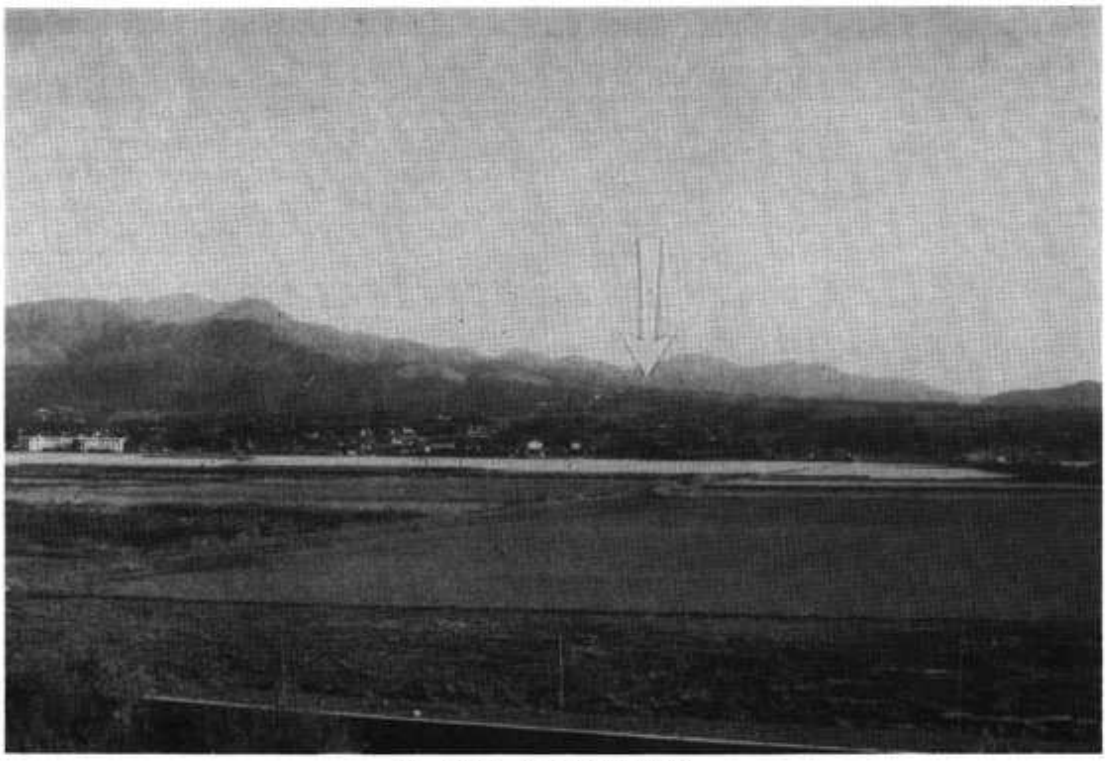
Fig. 114　石材別分布図（チャート・玉髄）

Tab. 16　磨石・凸石・敲石・砥石・石皿・計測表①

遺物番号	写真番号	出土区	層位	最長(cm)	最幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	形状	石質	種別	備考
186		2Kō−Q8−S18		6.2	5.9	3.38	165	完形	安山岩	磨石	表面やや擦れた痕跡を残す。
187		2Kō−03−511		6.1	6.02	3.0	159	〃	安山岩	〃	〃
188		Kō−A263	Ⅲ	6.3	5.3	2.8	75	〃	安山岩	〃	表面のみにやや平たく擦れた痕跡を残す。
189		Kō−G1H1		6.88	6.17	2.8	161	〃	安山岩	〃	両面擦れた痕跡を残す。調査時の傷あり。
190		Kō−D80	Ⅱ	5.9	5.35	4.18	195	〃	安山岩	〃	表面にやや平たく擦れた痕跡を残す。
191		Kō−B148	Ⅱ	7.1	6.8	3.65	230	〃	安山岩	〃	右側辺に打撃痕状のものがみられる磨石。
192		2Kō−Q3−H1	Ⅰ	8.02	7.4	3.6	297	〃	安山岩	〃	表面にやや平たい擦れ痕跡みる。調査時傷あり。
193		2Kō−R2−30	Ⅲ	9.6	9.0	4.98	592	〃	安山岩	〃	表面にやや平たい部分がみられる。
194		2Kō−02−31	Ⅱ	9.45	7.8	3.3	402	〃	安山岩	〃	〃
195		Kō−AH1	Ⅰ	8.17	7.3	3.9	335	〃	安山岩	〃	〃
196		2Kō−U2−15	Ⅱ	10.1	8.05	4.53	515	〃	安山岩	〃	両面に擦り痕残す。
197		2Kō−S5−4	Ⅱ	9.1	7.7	4.9	471	〃	安山岩	〃	表面に擦り痕残す。
198		2Kō−H2		10.6	8.9	4.3	666	〃	安山岩	〃	〃
199		2Kō−T5−1	Ⅱ	10.55	7.92	4.67	585	〃	安山岩	〃	表面擦れた痕跡残す。
200		2Kō−S3−32	Ⅲ	9.3	7.94	4.85	464	〃	安山岩	〃	両面に擦れた痕跡残す。
201		Kō−O145		9.5	8.45	5.17	600	〃	安山岩	〃	中央部に擦れた痕跡残す。
202		2Kō−S1−30	Ⅱ	9.15	7.75	4.53	523	〃	安山岩	〃	表面やや広く擦れ、裏面中央部やや擦れ痕残す。
203		2Kō−S1−33	Ⅱ	7.7	7.25	4.3	335	〃	安山岩	〃	両面ともに擦れ痕残す。
204		Kō−E2−45	Ⅱ	12.1	8.5	6.42	900	〃	安山岩	〃	表面にやや擦れ痕残す。
205		Kō−B22	Ⅱ	12.9	8.65	4.95	790	〃	安山岩	〃	中央部から先端へ向けて擦り痕みられる。
206		Kō−C34	Ⅱ	11.1	10.2	4.9	670	〃	安山岩	〃	中央部がやや凹み擦れた状態である。
207		Kō−F1−8	Ⅱ	10.9	9.85	6.5	980	〃	安山岩	〃	中央部やや擦れた部分がみられる。
208		Kō−A213	Ⅱ	5.43	5.8	5.15	115	約½残	安山岩	〃	中央部やや凹むが擦れた状態がうかがわれる。
209		Kō−B47	Ⅱ	7.9	5.85	2.03	100	〃 ½残	安山岩	〃	中央部より下部へやや擦れた部分がみられる。
210		2Kō−O4−H1	Ⅰ	6.65	5.6	2.9	143	完形	安山岩	凹石	表面中央部に凹みみられる。
211		Kō−A240	Ⅱ	7.9	6.4	3.17	220	〃	安山岩	〃	中央部に片面直径1cm程の凹み部みられる。
212		2Kō−S3−24	Ⅱ	9.42	7.46	4.16	346	約½残	安山岩	〃	中央部に浅い凹みみられる。裏面破損。
213		Kō−C25	Ⅱ	9.92	7.95	6.1	610	完形	安山岩	〃	中央部に片面凹みみられ側辺に打撃痕あり。
214		Kō−E2−10	Ⅱ	9.85	8.35	4.6	530	〃	安山岩	〃	表面に凹部みられ表面擦り痕らしいものあり。風化すすむ。
215		2Kō−R2−10	Ⅱ	10.0	9.22	4.8	621	〃	安山岩	〃	表面のみ使用の凹石。
216		Kō−A228	Ⅱ	9.4	8.1	3.6	335	約½残	安山岩	〃	表面のみ使用の凹石。裏半分欠損。
217		Kō−B3	Ⅱ	11.05	9.58	4.8	760	完形		〃	表面のみ使用の凹石。調査時の傷あり。
218		2Kō−R1−13	Ⅱ	9.32	9.24	4.95	551	〃	安山岩	〃	表裏使用による凹みみられ、裏面にすこし擦りの痕残す。
219		2Kō−S3		9.5	9.5	2.28	258	〃	安山岩	〃	中央に大きな使用による凹みと、周辺打撃がみられる。
220		2Kō−R1−4	Ⅱ	10.73	8.7	4.97	658	〃	安山岩	〃	表面のみ使用の凹石。
221		Kō−A242	Ⅱ	4.2	5.6	2.45	70	約½残	安山岩	〃	中央部分に凹みがみられる。
222		Kō−G2−4		8.66	6.05	4.15	280	〃 ½残	安山岩	〃	表面のみ使用の痕跡、裏面不明である。
223		Kō−H121		11.15	8.22	4.5	555	完形	安山岩	〃	表面のみ使用の凹石。
224		Kō−A2	Ⅱ	10.2	9.2	4.5	615	〃	安山岩	〃	中央部分に浅い凹み部分がみられる。
225		2Kō−P3−91	Ⅲ	12.1	11.03	3.8	750	〃	安山岩	〃	表面には使用の痕みられるが裏面明確でない。
226		2Kō−R6−H1		7.97	8.8	4.8	508	約½残	安山岩	〃	表面にやや凹む部分がみられる。
227		Kō−D30	Ⅱ	12.8	8.6	5.9	943	完形	安山岩	〃	表面のみ使用の凹石。
228		Kō−D140	Ⅱ	9.33	8.5	5.6	500	約½残	安山岩	〃	中央部に使用痕とどめる凹石。
229		Kō−D92	Ⅱ	10.1	6.8	5.2	450	〃 ½残	安山岩	〃	中央部に浅いくぼみみえる。
230		Kō−A6	Ⅱ	10.0	7.45	5.2	542	〃 ½残	安山岩	〃	中央部に凹みみられるも全体の使用範囲不明。
231		Kō−H692		9.9	7.17	4.15	351	〃 ½残	安山岩	〃	表面のみ使用凹石。
232		Kō−B33	Ⅱ	8.8	7.32	4.4	395	〃 ⅔残	安山岩	〃	表面中央部がやや凹む。
233		2Kō−O2−101	Ⅱ	7.8	5.93	3.1	161	完形	安山岩	〃	両面とも使用による凹みみられる。
234		Kō−C		8.9	6.75	3.9	295	〃	安山岩	〃	〃
235		Kō−H690		11.45	8.85	4.6	672	〃	安山岩	〃	〃
236		2Kō−T3−12	Ⅱ	11.7	8.7	4.25	627	〃	安山岩	〃	〃

Tab. 17　磨石・凸石・敲石・砥石・石皿・計測表②

遺物番号	写真番号	出土区	層位	最長(cm)	最幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	形状	石質	種別	備考
237		Kō−H161		9.63	8.8	5.3	623	完形	安山岩	凹石	両面ともに使用により凹む。
238		Kō−E1−81		8.65	7.5	4.53	395	〃	安山岩	〃	〃
239		2Kō−P5−2	II	8.83	7.75	5.04	495	〃	安山岩	〃	〃
240		Kō−G2−5	II	8.15	7.85	3.9	345	〃	安山岩	〃	〃
241		2Kō−O2−96	ピット	8.51	7.91	4.94	492	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹む。風化すすむ。
242		Kō−H679		9.6	8.5	4.7	581	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹む。片面調査傷。
243		Kō−E1−22	II	10.0	7.8	4.75	607	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹む。
244		Kō−E1−43	III	9.74	7.96	5.6	585	〃	安山岩	〃	〃
245		Kō−C10	II	10.0	8.18	4.7	600	〃	安山岩	〃	中央部やや凹状態残す。裏面擦り凹みあり。
246		2Kō−P2−3	II	9.83	7.8	4.3	476	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹む。
247		Kō−H686		10.2	9.13	3.8	515	〃	安山岩	〃	両面使用により凹み部あり。周辺打撃痕残る。
248		2Kō−P2−22	II	10.15	8.9	4.38	591	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹む。
249		Kō−D80	II	10.1	9.0	4.2	620	〃	安山岩	〃	両面ともに使用により凹むが浅い。風化すすむ。
250		Kō−C13	II	7.42	6.65	5.3	605	1/2残	安山岩	〃	両面ともに使用により凹みが観察される。
251		Kō−A92	II	9.7	7.1	4.3	450	3/4残	安山岩	凹石,磨石	中央部にやや凹みがみられ,磨石とも考えられる。
252		2Kō−O3−H1	I	11.63	9.2	4.27	745	完形	安山岩	凹石,磨石	表裏にやや凹みと擦れ,裏面にやや擦れが残る。
253		Kō−B110	II	10.18	8.6	5.25	610	〃	安山岩	凹石,磨石	中央部にやや凹みがみられ,また擦れも観察される。
254		Kō−H1−2	II	9.95	8.8	4.47	585	〃	安山岩	叩き,磨石	中央部にやや敲の痕跡と擦れの観察をみる。
255		2Kō−R2−H1	I	10.04	8.5	3.6	510	〃	安山岩	異形石器	表面に打撃痕残る。
256		Kō−B92	II	5.35	5.1	4.6	190	約1/2残	安山岩	凹石？	中央部に凹みあるも自然によるか使用によるか不明。
257		2Kō−S6−6	II	11.75	9.33	3.6	471	ほぼ完形	安山岩	異形石器	両先端側辺を打撃使用し凹石として使用。
258		Kō−B195	II	4.15	3.75	3.3	80	約1/2残	安山岩	剥片	破片。器種の判別不明。
259		Kō−A254	III	5.67	4.0	4.2	100	〃 1/2残	安山岩	〃	破片、　〃
260		Kō−C150	II	10.45	7.9	4.4	560	ほぼ完形	安山岩	叩き石	中央部と先端部を敲石として使用。
261		Kō−B96	II	8.7	5.15	5.6	255	約1/2残	安山岩	剥片	磨石として使用か？
262		Kō−D83	II	8.7	5.55	4.7	270	〃 1/2残	安山岩	〃	火を受けたのか赤褐色を呈す,側部は打撃痕か?
263		Kō−D41	II	9.8	5.4	5.7	340	〃 1/2残	安山岩	〃	中央部にやや凹みみられるが器種不明。
264		Kō−A89	II	9.75	5.8	5.6	375	〃 1/2残	安山岩	〃	火を受けたのか赤褐色を呈す,中央部やや擦りの痕か?
265		Kō−A253	III	9.05	6.65	4.8	360	〃 1/2残	安山岩	〃	欠損品のため観察不明。
266		Kō−B69	II	7.95	6.55	6.06	345	〃 1/2残	安山岩	〃	風化すすみ使用痕の観察不明。
267		2Kō−O3−10	II	8.4	8.35	3.3	211	〃 3/4残	安山岩	〃	裏面破損,表面の観察では擦りと思われる。
268		2Kō−R4−19	II	8.0	6.95	4.6	312	完形	安山岩	原石	表面やや擦れた状態であるが判別不明。
269		Kō−A230	II	9.3	6.9	6.7	472	〃	安山岩	〃	風化すすみ使用痕不明,自然礫とも考えられる。
270		2Kō−O5−4	II	9.9	9.1	4.7	461	〃	安山岩	〃	〃
271		Kō−D57	II	9.5	7.45	4.42	451	〃	安山岩	〃	側辺部に打撃痕みられるも使用痕みられず,自然礫か？
272		Kō−D91	II	8.85	7.25	5.3	443	〃	安山岩	〃	中央部やや擦れた状態であるが判別不明。
273		Kō−S2−8	II	14.6	11.2	5.6	1,230	〃	安山岩	〃	表面中央より左側辺へやや傾斜がみられるが,自然礫か？
274		Kō−D53	II	10.25	6.7	4.0	440	〃	安山岩	〃	風化すすみ使用痕不明。
275		Kō−B202	III	4.75	3.97	1.5	45	約1/2残	砂岩	砥石	砥石とみられ,使用によって中央部凹む。
276		2Kō−17		5.2	6.4	3.9	95	〃 1/2残	安山岩	〃	砥石とみられ,中央部が凹む。
277		Kō−B69	II	6.0	5.6	2.5	101	〃 1/2残	砂岩	〃	表面砥石としての使用痕がみられ裏面擦り痕みられる。
278		2Kō−R3−10	II	6.35	5.3	2.7	71	〃 1/2残	砂岩	〃	砥石とみられ表面なめらかである。
279		Kō−A178	III	8.5	6.55	1.5	126	ほぼ完形	安山岩	〃	中央部に凹みがみられ,その部分なめらかである。
280		2Kō−S2−H25		12.23	8.85	1.62	211	約3/4残	砂岩	〃	中央部から周辺にまるい凹みをみる接合品。
281		Kō−F1−24	II	9.9	6.9	3.5	311	〃 1/2残	砂岩	〃	中央部に凹みができ,その部分のみすべすべしている。
282		Kō−D61	II	8.4	6.5	3.95	250	〃 1/2残	安山岩		上面と左側辺部に擦り痕みられる。
283		Kō−H1−5	III	23.2	12.8	8.45	2,360	〃 1/2残	安山岩	石皿	二片接合。使用による痕跡よく観察される。
284			II	23.4	18.16	12.1		〃 1/2残	安山岩	〃	両面ともに使用痕跡観察される。
285			II	34.2	29.74	10.6		〃 3/4残	安山岩	〃	使用痕跡よくとどめる。調査時の傷あり。
286			II	34.88	23.26	12.54		ほぼ完形	安山岩	〃	表裏使用による痕跡があり,裏面平らである。(敲石用か)
287		Kō−B25	II	25.34	14.6	10.2	3,800	約1/2残	安山岩	〃	表面に段差がみられるが使用痕らしくなく不明。



遺 跡 遠 景（左側鉢巻山）

第3章　考　　察

1．弘法原出土の土器について

土器の項で説明した如く，土器の総出土点数は6158点であるが，この内2371点については，その殆んどが細片であり文様・器形共に識別不能である。

残りの土器の場合，文様別ではⅠ類の押型文土器が全体の85%を占め，以下Ⅱ類無文土器8.7%，Ⅲ類撚糸・縄文土器0.4%，Ⅳ類条痕文土器1.7%，Ⅴ類沈線文土器0.4%，そしてⅥ類晩期土器の一群が3.5%と続き，木遺跡が押型文土器を主体としている事が判る。その類別出土土器のドットマップについては前に記したとおりである。

次に押型文土器3183点の中では，山形文が2725点で86%と圧倒的比率を示し，格子目文は8%，楕円文は6%の少数でしかない。以下各出土土器についての観察結果から種々の土器についての総括をしておきたい。

押型文土器の器形については，前にも述べたとおり口縁と胴部の特徴から A-F 類に細分できる。この内，A・C・D類は相似た形状を持つ深鉢で，数量的には一番多い。なおC類は円筒形か円筒形に近いと考えられる。B，F も又相似た形状を持つが，F類はより口縁が外反し胴部も張るタイプである。山形や格子目文のものには殆んどみられないが楕円文では主体を成

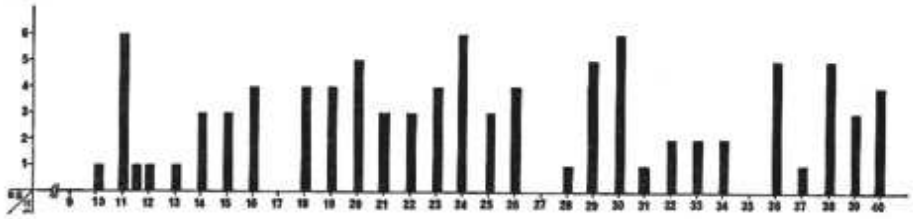


Fig. 115　山形文口縁部口径別数量図

している。なおE類は椀状を示す。

次に土器の大きさであるが，口径については復元計測し得る96点についての結果では（Fig. 115）9～16cmの小型のもの30点，18～26cmの中型のもの36点，28～34cmの大型のもの19点，そして36cmを越す特大のもの18点の4種に分けられる。一方底径については，計測可能な29点の内（Fig. 116）5cm内外の小型のもの1点，8～11cmの中型のもの14点，12～17cmの大型のもの8点，そして21cmを越す特大のものが1点含まれるなど，やはり4種に分類が可能であり，口径と底径のそれぞれの大きさのものが対応するものと思われる。器高については完形資料がない為に推定するしかないが，復元した2点の資料からみると口径は1が22.1cm，底径10.5cm，推定高25.5cm，75は口径24.6cm，底径11.5cm，推定高28.9cmであり中型

Fig. 116　山形文底部底径別数量図

タイプの深鉢では器高23～30㎝前後が標準であろう。同時に出土量もこのタイプが一番多い。

底部の形状については，出土した141点が全て平底であり，尖底は皆無で丸底に近い平底の例が3点みられるのみである。なお，中には**247**，**248**の如く，底部からの立上りが直角に近く先のC類の底部と思われる資料がある。

施文原体の大きさは Fig. 117 の如く，計測し得る資料は90点であるが，その大部分は波長が判り易い山形文である。それによると，原体直径は0.6～0.9㎝のものに集約され，1㎝を越すものはみられない。原体の長さについては2.3～3㎝程度のものが多いが，4㎝を越す例も稀にみられる。

施文方向は横位が多く縦走例は殆んどない。なお傾向としては，口縁下では横位であるが，胴部になると斜位（特に右下り）施文に移り，底部付近で又横位か斜位にする傾向が指摘される。

施文法，及び施文部位は文様によって若干異なる。山形文については，**162**の1例を除いては，全て施文は外壁のみに限定され，口縁下底部に至るまで全面に施文するのが大部分であるが，少数ながら口縁下に無文帯をもつものがある（**136**，**138**等）。格子目については全面外壁のみの施文で内壁に及ぶ例はない。楕円文は前項でも述べた如く4種に分けられる。すなわち，①外壁には全面施文，内壁には原体条痕＋楕円文　②外壁には全面施文，内壁には回転押捺沈線，及び口唇に刻目　③内・外壁共に同種施文　④外壁のみ施文以上である。

これらの資料の内，①～③については，口縁が外反し胴部がふくらんで，丸底に近い小さな平底に移行するタイプのものと思われ，器形が他種文様のものと若干異なる。口縁に限定した類例資料では，熊本県中後迫[註1]，大分県政所馬渡[註2]，同県黒山[註3]，福岡県深原[註4]，長崎県岩下[註5]，同県天ケ瀬[註6]など押型文を多量に出土する遺跡では通常にみられる。

なお，異種原体併用例は本遺跡では2例あるのみで，1つは山形＋格子目，今1つは格子目＋条痕である。

整形技法は全て輪積みによるものと思われるが，PL. 57の如く輪積みの後，壁強化の為別の粘土帯を貼り合わせて厚みを増す例も多い。又底面の接合面に凹凸をつけて接合を容易にする為の配慮がみられる資料（Fig. 39-**246**）が出土している。なお従来より指摘されていることであるが，施文

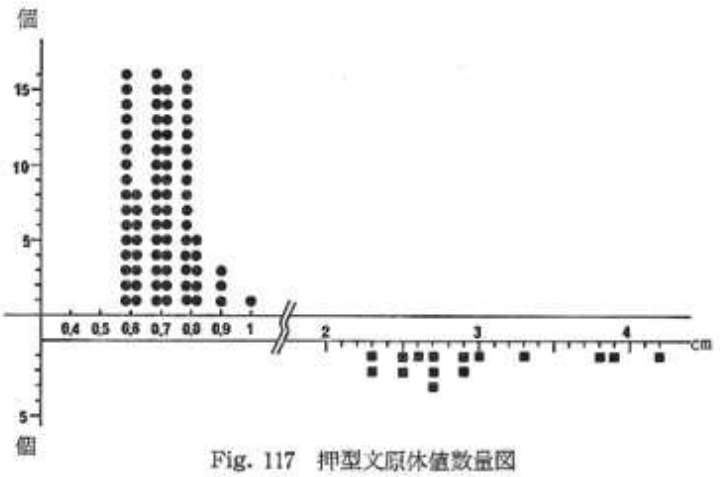


Fig. 117　押型文原体値数量図

は器面の装飾が全てではなく，輪積み整形の各段階毎に器面調整を兼ねて施された資料が数点観察された。

底面には数種の圧痕がみられた。詳細は土器の項で述べたので重複をさけるが，大きく分けると木の葉の葉脈と，その他の圧痕のもの，及び圧痕がみられないものの3種である。

葉脈については，Ⅱ・Ⅲ層土壌の花粉分析の成果と照合した結果，アカガシ属かハンノキ属の葉の特徴がそれに近い。又，その他の圧痕は何れも土器成形後，下敷きから切り離した後の器面調整の為のものであり，原体による太い沈線や撚糸原体の圧痕，及び数本の櫛歯状原体による井桁状の擦痕などが観察される。

以上押型文土器の特徴を総括したが，共通するものとしては，器壁が0.9～1.2cm程度であること，胎土には砂粒・石英粒・長石を含む事，及び焼成が一般的に良好なことである。なお色調は黄褐色，暗褐色，茶褐色のものが多い。

Ⅱ類の無文土器は，比率として8.7%でⅠ類の押型文に次ぐ。出土区はⅠ類と同じくほぼ全調査区より出土する。器壁は1cm前後のものが多く，又，色調・胎土・焼成共にⅠ類と変わるところは無い。只，出土資料に大きな破片がなく器形はよく判らない。

Ⅲ類の撚糸文・縄文は僅か16点しか出土していない為に集中する区域は固定できない。原体については，撚糸文の方は0段の撚糸を縦方向に回転させる。又，縄文資料は何れも1段の無節の縄文を用いるが，上下方向と斜め方向の2通りの施文法が観察される。器壁はやはり1cm前後，胎土・焼成・色調共にⅠ類土器と変わらない。

Ⅳ類の条痕文土器は1.7%の出土比である。出土状況はM・N区の北側区域とT・U区の北側区域を中心とする。器壁は1～1.3cm程度であるが，荒く深い条痕を施すものと，浅い条痕のものとがある。

Ⅴ類の沈線文は僅か16点の出土であるが，何れも色調・焼成・胎土共に酷似するところから同一個体と思われる。施文には太い沈線を巡らすが，あるいは回転押捺文の可能性もある。そうであれば押型文の範疇に入る。

Ⅵ類は晩期土器の一群である。器壁は薄く0.5～0.8cm程度で，出土地点はT，U-1・2・3区と Q，R-3・4 区の2地点に中心をもつ。

器形は壺・浅鉢・深鉢の3種に分かれるが，時期的には晩期前半～中頃のものであろう。

最後にこれらの資料の編年上の位置を示しておきたい。九州地方の縄文早期の土器については草創期の泉福寺洞穴の豆粒文土器や福井洞穴の隆線文土器から早期末に至るまでその編年はほぼ確立しているのでそれらの資料を参考として比較してみたい。[註7]

前述した如く，弘法原出土の土器にも若干の時間幅が考えられ，古いタイプのものは大分県政所馬渡遺跡のⅠ群C類，熊本県中後迫遺跡出土Ⅰ類土器等と同じ特徴をもつ。いわゆるヤトコロ式土器と呼ばれる型式のもので早期末に編年されている。[註8] しかし，その他の径も大きく完全に平底化した深鉢や円筒形に近い器形をもつ資料については，更に後出する要素が考えら

れ，全体としては早期末～前期初頭に比定して大過ないものと思われる。

現在，県内では73ケ所の押型文土器出土地が知られている。(Fig. 118) しかし明瞭に包含層を持つと思われる遺跡は少なく，出土点数も僅少で，流れ込みによる所産と考えられる場合が多い。又，若干の報告[註9]例を除くと比較し得る例に乏しい。

只，遺跡の立地については，県南部では標高200ｍを越す台地上，県北部では100ｍを越す洞穴遺跡が圧倒的に多く，海岸部附近に位置するものは上述流れ入み以外の例を除くと非常に少なく，未だ山の幸中心の生活であった事が窺われる。なお，遺跡が主に島原半島を中心とする県南部に濃密に分布する事実は，有明海を媒介とした中九州や南九州との関連が非常に強い事を示している。

なお，従来より，押型文土器に共伴する土器に塞ノ神式土器がある。本県でも18・岩下洞穴[註10]，30・西輪久道遺跡等で共伴するなど，遺跡の時期を知る上でも重要な資料であるが，本遺跡では1片の出土もない。ここではそれについて言及する時間もないのでその事実だけを指摘しておくに留めたい。

註1　中後迫遺跡調査団　1978「中後迫遺跡調査報告」
註2　別府大学附属博物館　1982「政所馬渡」
註3　大分県教育委員会　1968「黒山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告　第十七輯
註4　福岡県教育委員会　1978「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第8集
註5　麻生優他　1968「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会
註6　宮崎貴夫氏教示
註7　賀川光夫　1982「政所馬渡」p. 75他
註8　同上　p. 67他
註9　註5に同じ
註10　下川達彌氏の教示による

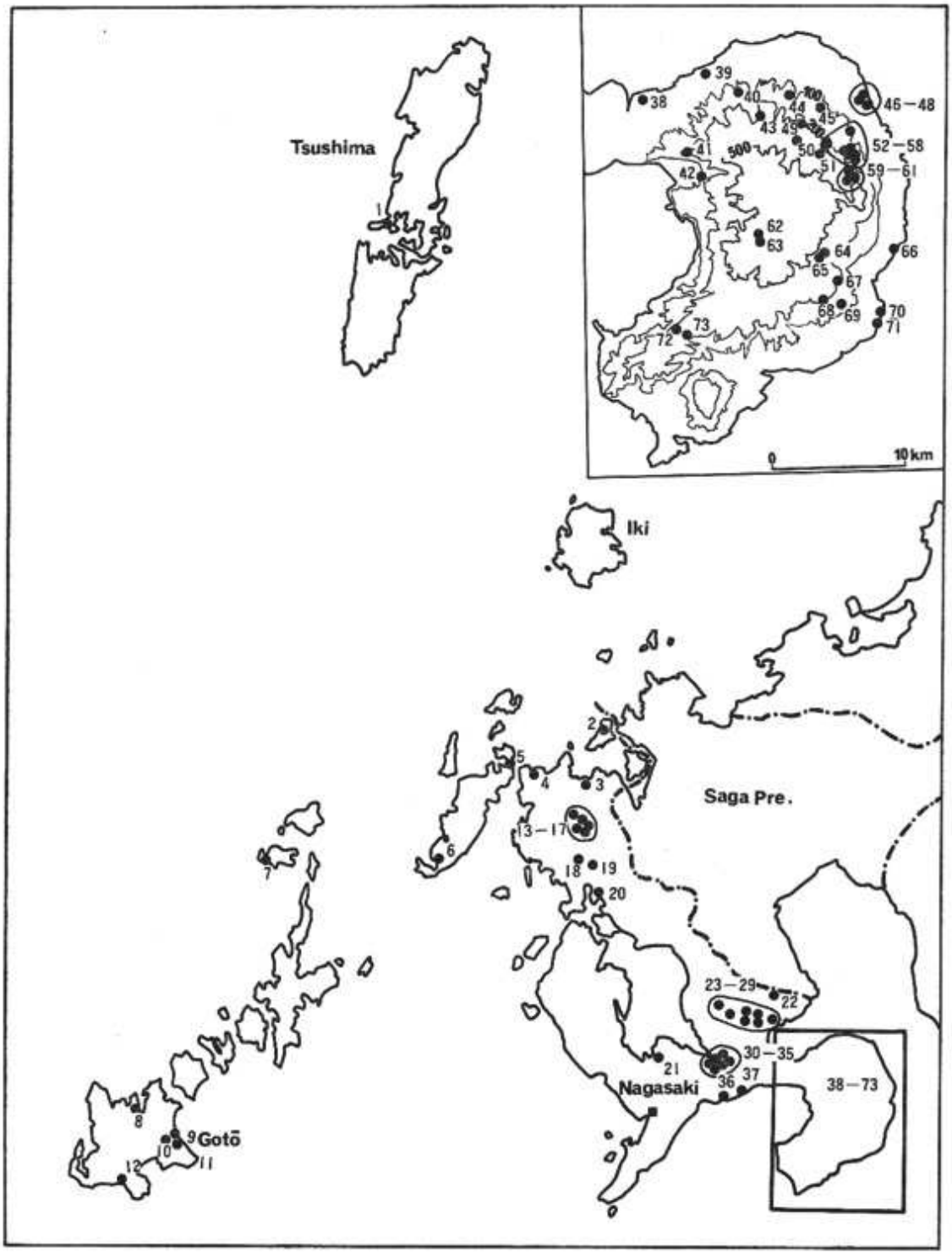


Fig. 118　押型文土器出土地名表

Tab. 18　県内押型文土器出土地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土・共伴遺物	典拠
1	加藤海底遺跡	上県郡豊玉町加藤	−2m　海底遺跡	田村式（?）	1
2	遠泉洞穴	北松浦郡鷹島町阿翁浦	洞穴遺跡	各種刃器、剥片石器	2
3	湯ヶ谷遺跡	松浦市調川町松山田免湯ヶ谷	標高100m　台地上		3
4	里田原遺跡	北松浦郡田平町里免	標高 18m　丘陵先端部	石槍、石核他	4
5	金椎茶屋第2遺跡	平戸市大久保町字山頭	標高 50m　丘陵斜面	石槍他、旧石器～江戸期資料	5
6	志々木遺跡	平戸市志々木宮ノ浦			6
7	ハモキ遺跡	北松浦郡小値賀町斑	標高 4m　海蝕崖岩陰	山形文、無文	7
8	茶園遺跡	南松浦郡岐宿町	標高10m　低丘陵上		8
9	白浜遺跡	福江市崎山字白浜	標高 6m　溶岩台地先端	縄文後晩期、弥生前期	9
10	浜郷遺跡	福江市大浜町浜郷			10
11	皆塚遺跡	福江市上崎山町皆塚	標高100～104m　台地上		8
12	黒崎遺跡	南松浦郡富江町黒瀬			10
13	檜川内洞穴	北松浦郡吉井町檜川内免松原	標高150m	スクレイパー、磨製石鏃他	11
14	福井洞穴	北松浦郡吉井町福井	標高120m　河岸段丘上		12
15	岩谷口第1遺跡	北松浦郡吉井町	標高 90m　台地先端岩陰		13
16	岩谷口第2遺跡	北松浦郡吉井町	標高 90m　台地先端岩陰		13
17	熊頭遺跡	北松浦郡吉井町	標高400m	爪形文	6
18	岩下洞穴	佐世保市松瀬町岩下	標高200m　河岸段丘上	山形、楕円、格子目、無文他	14
19	泉福寺遺跡	佐世保市瀬戸越町	標高 90m　丘陵上		15
20	天神洞穴	佐世保市	標高 30m　海食洞		16
21	前田河内洞穴	西彼杵郡長与町前田河内	標高 52m　洞穴	楕円、スクレイパー、石皿	17
22	山茶花遺跡	北高来郡小長井町山茶花	標高		18
23	雄ヶ原遺跡	大村市諏訪郷	標高170～200m　丘陵上		19
24	大多武堤遺跡	大村市木場郷中石	標高306～322m　丘陵上		19
25	菅納岩陰	諫早市湯野尾町	標高250m　岩陰	細石核	18
26	川頭遺跡	諫早市湯野尾町字女夫石	標高350m		20
27	橋尾遺跡	諫早市長田町	標高130m　丘陵斜面	楕円文	18
28	剃刀峰遺跡	諫早市長田町	標高120～130m　丘陵斜面		18
29	小豆崎遺跡	諫早市長田町里	標高 50m　丘陵斜面	格子目文	10
30	西輪久道遺跡	諫早市津久葉町	標高20～24m　丘陵鞍部	塞ノ神式土器,局部磨製石斧,石槍他	21
31	鹿野遺跡	諫早市津久葉町	標高24～37m　低丘陵上	集石群、炉穴、鍬形鏃、石槍他	21
32	牛込遺跡	諫早市貝津町	標高23～25m　低丘陵上	石鏃,スクレイパー,ナイフ形石器他	22
33	平遺跡	諫早市津久葉町	標高26～29m　沖積地	ナイフ、塞ノ神式土器他	23
34	平山遺跡B地点	諫早市栗面町	標高50m　丘陵斜面	細石核、ナイフ、石鏃、土師器他	24
35	長牟田遺跡	諫早市津久葉町	標高35m　丘陵上	無文、中世山城	25
36	琵琶島遺跡	北高来郡飯盛町江ノ浦			26
37	有喜見塚遺跡	諫早市有喜町六本松	標高10m　台地先端	貝塚	10
38	中熊台遺跡	南高来郡吾妻町	標高17～20m　丘陵先端部	弥生積石墓、流れ込み	27
39	柿の本遺跡	南高来郡瑞穂町古部	標高20m　洞穴		17
40	西郷原遺跡	南高来郡瑞穂町	標高160m　台地上		29
41	弘法原遺跡	南高来郡吾妻町	標高220～225m　丘陵斜面		本書
42	白津遺跡	南高来郡千々石町	標高100m　丘陵鞍部	ナイフ形石器	30
43	大正東原遺跡	南高来郡瑞穂町	標高200m　台地上		30
44	小ヶ倉遺跡	南高来郡国見町多比良	標高140m　台地上		29
45	森岡遺跡	南高来郡有明町森岡	標高120m　台地上	早水台B	29
46	一野遺跡	南高来郡有明町大三東	標高 10m　低丘陵上		31
47	才木遺跡	南高来郡有明町大三東	標高 10m　低丘陵上		31
48	小原上遺跡	南高来郡有明町大三東	標高 10m　低丘陵上		31

Tab. 19　県内押型文土器出土地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土・共伴遺物	典拠
49	百花台遺跡	南高来郡国見町八斗木	標高220～230m　台地上		20
50	魚洗川遺跡	南高来郡国見町八斗木	標高300～350m　台地上		29
51	嗅石原遺跡	島原市三会町	標高250～350m　丘陵上	晩期	20
52	尻無遺跡	島原市三会町広高野	標高150～158m　丘陵上		32
53	坪道遺跡	島原市三会町	標高 88～94m　丘陵上	晩期土器等	32
54	立野遺跡	島原市杉谷町	標高110m　丘陵上	縄文前期(円筒上層)、晩期、弥生土器他	32
55	油掘遺跡	島原市三会町	標高190m　丘陵上		29
56	江里遺跡	島原市杉谷町	標高180m　丘陵上		32
57	江里遺跡	島原市杉谷町	標高100m　丘陵上		32
58	長貫遺跡	島原市三会町	標高100m　丘陵上	平底、撚糸文	29
59	肥賀太郎遺跡	島原市北千本木町肥賀太郎	標高268～300m　丘陵上	寒の神式土器	32
60	平の山遺跡	島原市北千本木町平の山	標高234～258m　丘陵上	晩期	32
61	折橋遺跡	島原市北千本木町	標高160～200m　丘陵上		29
62	別所遺跡	南高来郡小浜町雲仙	標高700m　台地上	轟B	29
63	札の辻遺跡	南高来郡小浜町雲仙	標高600m　台地上	晩期	29
64	田中遺跡	南高来郡深江町田中	標高280m　台地上	晩期、早水台A・B、撚糸、爪形文	29
65	山の寺梶木遺跡	南高来郡深江町梶木	標高170m　丘陵斜面	晩期	29
66	中原瀬野遺跡	南高来郡深江町瀬野	標高 0～20m　低丘陵上	早水台B	29
67	天ヶ瀬遺跡	南高来郡布津町天ヶ瀬	標高240m　丘陵上	押型文土器、石器多数	32
68	三又遺跡	南高来郡有家町三又	標高200m　丘陵上		29
69	藤原遺跡	南高来郡有家町藤原	標高160m　丘陵上	撚糸文	29
70	大崎遺跡	南高来郡布津町	標高 10m	撚糸文	29
71	蒲河遺跡	南高来郡有家町堂崎	標高 0m　海底遺跡	晩期	33
72	諏訪の池遺跡	南高来郡北有馬町	標高250m　台地上	旧石器、晩期	29
73	原山遺跡	南高来郡北有馬町	標高250m　台地上	晩期	29

1. 坂田邦洋　1980「石器時代の対馬」考古学ジャーナル No. 183所収　p. 24
2.「鷹島町郷土史」1975　鷹島町　p. 50
3. 芝本一志　1966「湯の谷遺跡概略報」松浦考古3
4. 長崎県教育委員会　1978「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書第38集　p. 41
5. 平戸市教育委員会　1978「金椎茶屋第2遺跡」p. 23
6. 樋口・釣田　1951「平戸学術調査報告」京都大学学術調査団　p. 55～p. 58
7.「小値賀町郷土史」1978　p. 645
8. 正林護氏教示
9. 桑山竜進　1938「貝殻を混入せる土器」自然学雑誌10—1
10. 七田忠志　1953「佐賀県戦場ケ谷出土弥生式有文土器に就いて」史前学雑誌6—2
11. 長崎県文化財課　1970「橘川内洞穴遺跡緊急発掘調査日誌」
12. 鎌木・岸沢　1965「長崎県福井岩陰」考古学集刊3—1
13. 片岡肇　1976「岩谷口遺跡群の発掘調査」世知原町教育委員会
14. 麻生優他　1968「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会

15. 麻生優他　1980「特集・泉福寺洞穴の調査」考古学ジャーナル　No. 172　他多数
16. 麻生優　1964「佐世保市内発見の四洞穴遺跡」洞穴遺跡調査会会報13
17. 正林護　1974「前田河内洞穴調査略報」長与町文化財調査報告第2集
18. 古賀力氏教示
19. 文化庁　1976「全国遺跡地図42長崎県」国土地理協会
20. 1974年県教委調査　報文未刊
21. 長崎県教育委員会　1981「西輪久道・鷹野遺跡」p. 14
22. 長崎県教育委員会　1982「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ」
長崎県文化財調査報告書第56集　p. 63
23. 長崎県教育委員会　1983「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ」
長崎県文化財調査報告書第65集
24. 諫早市教育委員会　1981「平山遺跡B地点」諫早市文化財調査報告書第3集
25. 副島和明氏教示
26. 酒詰・中島　1943「肥前下ノ釜貝塚発掘報告」人類学雑誌　58-10
27. 古田正隆　1979「吾妻町中熊台地調査報告」吾妻町の文化財4　p. 33
28. 古田正隆　1974「島原市の海中干潟遺跡（図録）」百人委員会埋蔵文化財報告第2集
p. 9
29. 下川達彌　1970「島原半島（長崎県）の先史文化研究について」社会科教育研究集録所収　p. 33～p. 44
30. 長崎県教育委員会　1979「妙法塚遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ所収　長崎県文化財調査報告書第45集　p. 27
31. 宮崎貴夫氏教示
32. 布津町吉田恵順氏資料
33. 長崎県教育委員会　1982「堂崎遺跡」長崎県埋蔵文化財調査報告書第58集　p. 89

2. 土器接合状態について（Fig. 143）

本遺跡の遺物包含状態はⅡ層にその主体を置き，Ⅲ層にⅡ層の遺物が沈降した状態にあることを土器の出土深度表により推定し，深度表によりプライマリーな状況に近いであろうとの見解を示した。しかし遺物自体がプライマリーな状態にあるか否かを検証するためには遺物の垂直分布とともに平面分布による検証が必要であり，特に本遺跡のように焼土以外明確な遺構等がなく，遺物により当時の生活復元をする手掛かりがない場合，その平面的な分布状態がそれらを解決するものであり，遺物が原位置あるいは原位置に近いであろうとの前提条件が必要と

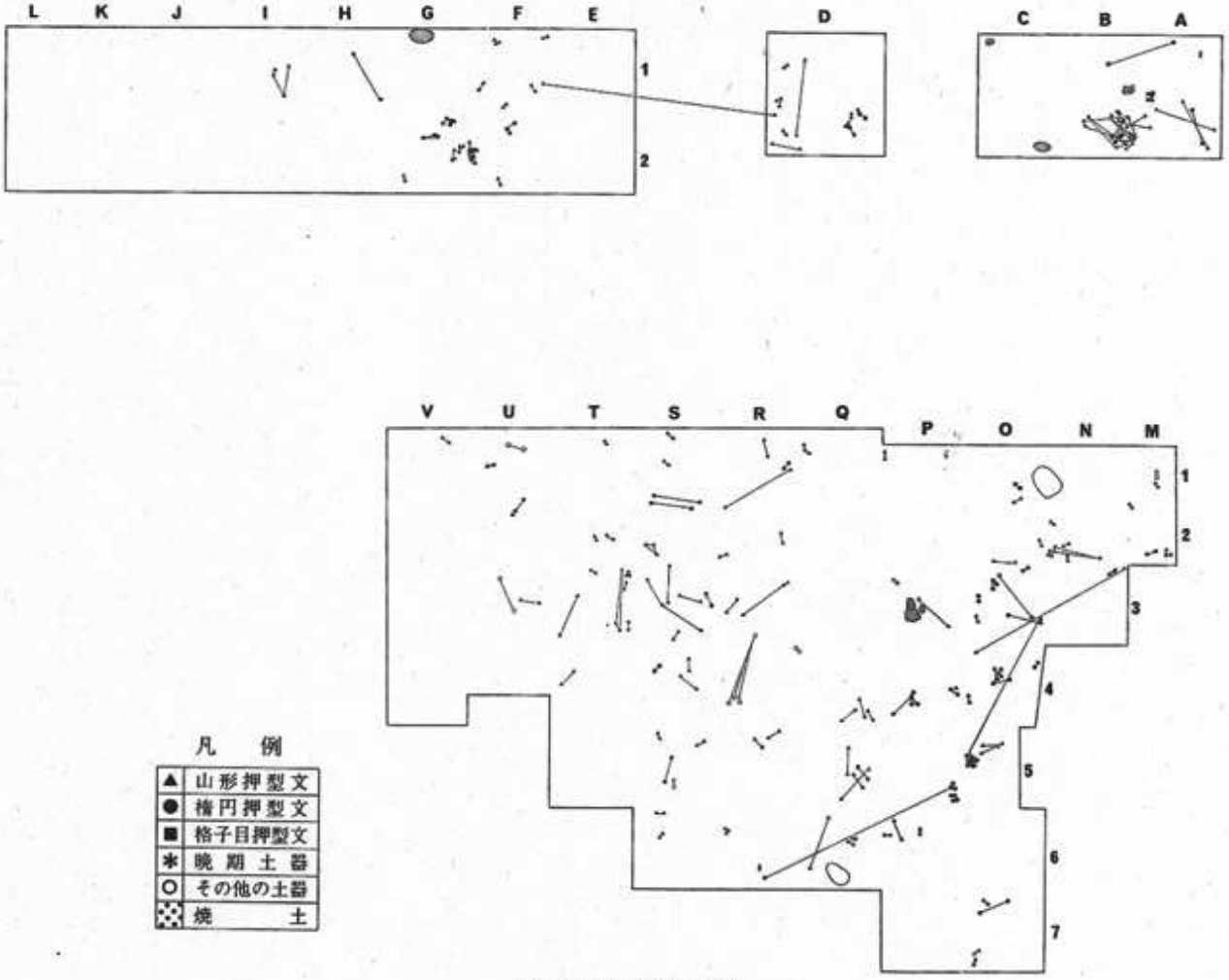


Fig. 119　土器接合資料平面分布

なる。そこで本遺跡では土器の接合関係により遺物自体の動きとその分布の在り方から遺跡自体を捉えることを試みた。

本遺跡では土器出土点数6,158点のうち140例の接合資料がみられた。その接合関係を示したものが Fig. 143 である。接合作業中に見落とした可能性をも考え合わせると，接合資料はいくらか増加する可能性があり，資料に限界があるが140の接合例はかなりの部分を占めているものとして考えられ，その接合状態を捉えていくことにする。本遺跡接合資料のうち約100例が2点間接合で，その他に一部に密集するもの，東西間で接合するものなどいくつかの接合例が見い出される。2点間接合の場合，その接合間距離は10cm～40cm内外に収まるものが多く，かなり安定した接合間距離を保っている。又，2点間接合の中で遺跡の傾斜と相違し，東西間で10m以上の距離をもって接合する例（D区→F-1区・N-3区→O-4区）が何例か見られ，当時の行動の一端を表わしていると考えられる資料である。接合が密集する資料はB区・G-2区・N・O・P列の北側に見られ，これらの資料は何例か固まって出土する傾向が見られる。土器接合が密集する場合は1個体としての復元可能であり，当時そこに遺棄・あるいは廃棄されたものとして捉えられよう。このような状況で密集して接合する例が何例か複合する場が遺跡内に大きく3ケ所（B区・G-2区・N・O・P列北側）あり，特にN・O・P列北側はかなりの接合例が集中する区域である。遺跡内全体から接合のパターンを捉えてみると先述したB区・G-2区・N・O・P列北側の密集して接合するパターンと，R・S・T列に見られるような2点間接合のみにより構成される場合にとで捉えられる。特にR・S・T列では2点間接合が圧倒的に多く，一個体が密集する資料は晩期の土器の資料を除いて捉えることができない状態にあり，これは他の場合と様相を異にしている。この資料だけで結論を出すことは早急であるが，行動パターンの相違としての捉え方もできよう。又これら接合資料と焼土との関係をみると焼土から半径3～4m内での接合は希薄であり，その周辺に密集して接合するという在り方が見られ，この遺跡の1つのパターンとして捉えられよう。このことは焼土と土器の遺棄及び廃棄との関連が非常に密接なものとして考えられる。このような観点から，C区・P-3区に見られる焼土周辺の硬質部も又居住空間との関連性が考えられる。

この接合資料関係では先述したごとく資料の抽出時点での取りこぼし等が考えられるという点において，資料の扁在性が考えられるが，同一個体となるべき資料の取りこぼし（密集接合）は散在して接合する場合よりも少ないことより，弘法原遺跡の接合状態では焼土と密集接合（遺棄・廃棄）との関連性についてのみ捉えるものとする。

註1　多聞寺前遺跡（1982・多聞寺前遺跡調査会編）において田中氏は各土器の個体資料の接合関係の中から接合状態をA種・B種・C種・D種に分類し，個々の接合関係からその人間行動を推定している。

3. 弘法原出土の石器について

弘法原遺跡は，その発見時よりこれまで縄文時代早期の単純遺跡として取り扱われてきたが，昭和55年度よりの3次にわたる発掘調査の結果，先土器時代から長い間培われてきた文化が所在することが判明した。先土器時代文化の所産としてのナイフ形石器やドリル等は数少ないとはいえ立派な証拠品であり，また，先土器時代の石器類として分類可能なものも多少確認した。

オープン・サイトにおける遺跡の把握は，遺物の出土状況が密と粗の部分があまりにも明瞭な区別をもって形成されているため，時として難しい一面を持っている。幸いにも，僅かの資料とはいえそれら遺物の確認によりその所在が明らかになった現在，さらに深い追求が望まれるところである。とはいえ，これまでの調査区域内での本遺跡の基本層位は前章に掲載したとおりであり，遺物包含層は縄文時代早期のもののみしか確認していない。先土器時代の文化層の確認は，別の地点でなされるであろう。

本遺跡におけるすべての出土石器の平面分布は Fig. 59に見るとおりであり，概観すれば東に密で西に粗といった現象が見られる。すなわち，A・B・C・M・N区により多くの出土をみ，J・K・L区は皆無である。土器の平面分布についても同様の現象を呈しており，遺跡の中心部は調査区域のさらに東方の谷を望む丘陵斜面上に所在すると考えられる。

出土石器総点数は2,326点である。そのうちフレイクとチップの合計が1,698点で，その約73%を占める。コアとフレイク・チップの平面分布を見ると，その集合は5ブロックに大別できる。この場所での石器製作は紛れもない事実であるが，ブロック中での接合例はわずか1例しかなく，また，ハンマー・ストーン等石器製作に必要不可欠の出土資料にも乏しく，いきなり定型化した石器製作址に直結させるのは早計であろう。本遺跡において出土量の少いチャート，頁岩等の平面分布においても何等その規則性は見られない。

特殊な石材として玉髄らしきもののコアを1点みるが，フレイク・チップ等1片の出土がなく，このことからも同様のことがいえよう。

石器組成はバラエティーに富む。特徴的な石器として，その出土量において第2位に位置づけられるものに磨石がある。その出土数の豊富さは他に比類がなく，当遺跡の性格づけに欠かせない要因のひとつであろう。調査区域全域からの出土をみるが，やはり他の石器類と同様の偏在性を顕示している。セット関係にある石皿の出土はそれに比して少なく，その平面分布からみても相互関係は明示できない。

表面採集品を含めた完形品についての計測を別図（Fig. 122）に示した。多少のバラつきはあるが，長さ5cm，重量500～600g附近にその集中度をみる。重量の最大のものは1,000gに近く，最小のものは150g位である。石皿の凹んだ部分が使用の結果とするならば，磨石自体の摩耗も著しいと考えられる。小さい一群にはそれらも含まれる可能性もある。

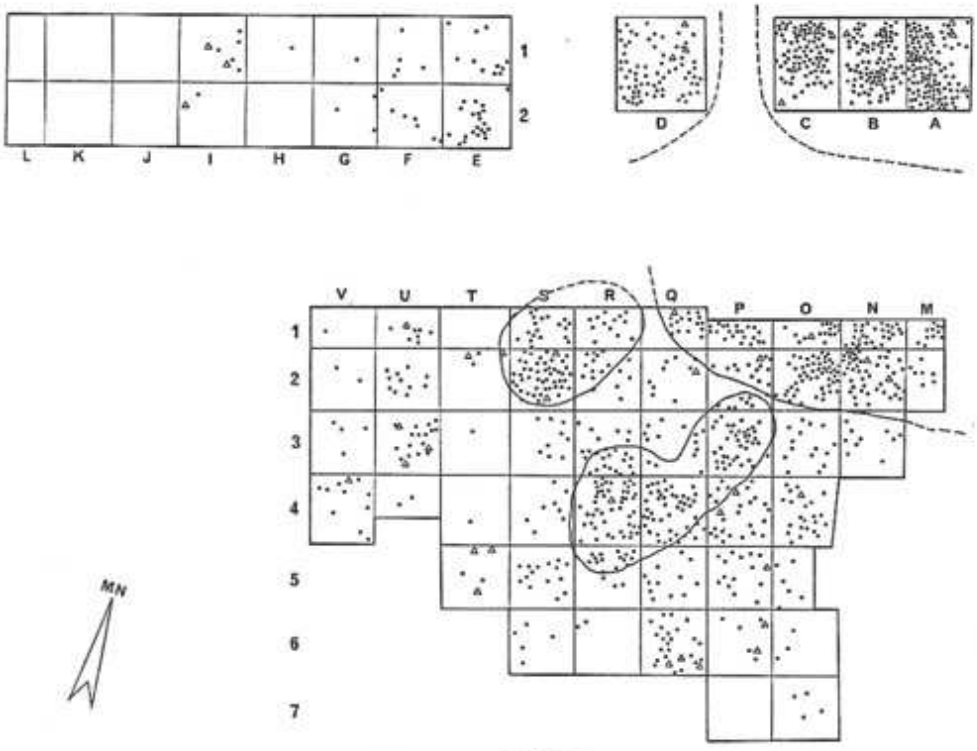


Fig. 120　石器分布図

また，1/2，1/4の幾何的破損品も比較的多く見られるが，単に収獲物の敲き潰しだけで幾何的に破損するとは考えられず，別の使用法によるものか，あるいは当初から何等かの意図のもとに作出されたものかは今後の検討課題として残される。

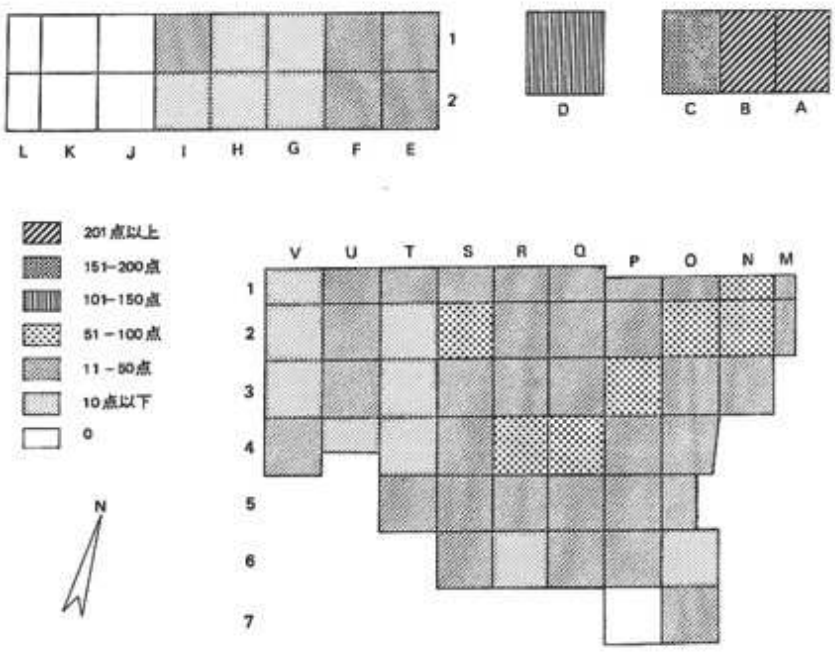


Fig. 121　石器出土量図

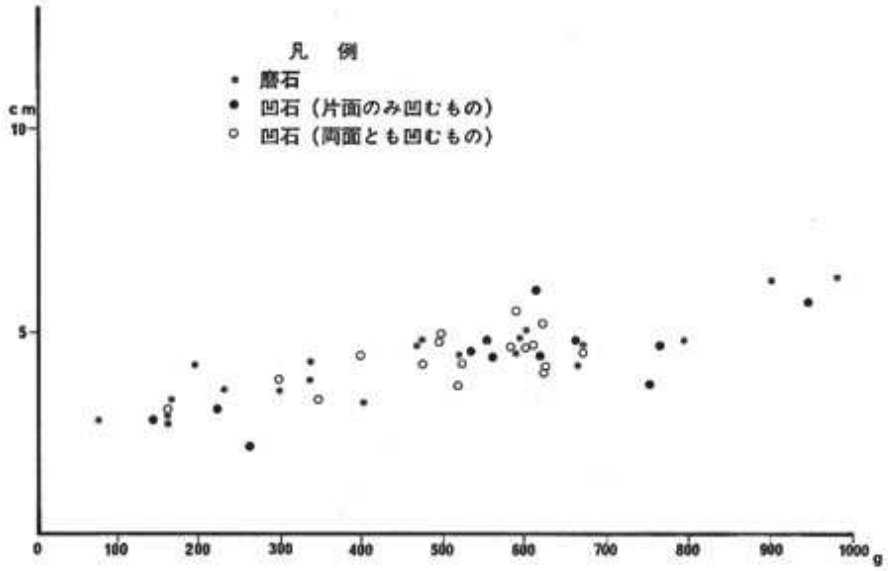


Fig. 122　磨石・凹石計測表

4．石鏃について

石鏃については先に，形態別に分類して，そのそれぞれの属性をみてきたが，Ⅰ～Ⅲ類はそれぞれ相似の諸属性をもつものの，石材別の利用状況や，長幅比と抉りの深さと幅の比（Fig. 85）にそれぞれ若干の特長をもつことがわかった。そして各類の石鏃は形態に多様性をもっている[註2]（Fig. 78）。また特にⅢ類の99～114のものについては鍬形石鏃と呼ばれ，古くより縄文文化早期の押型文土器に伴うものといわれてきた[註3]もので，昭和23年に八幡一郎氏は両者の関係を指摘[註4]され，その後の発掘の結果においても鍬形石鏃の殆んどが押型文土器に伴い，この両者が非常に密接な伴出関係にあることが明らかになってきた。そして大分県の早水台遺跡[註5]では，典型的な鍬形石鏃は，押型文土器の中でも主として楕円文土器が多く出る地区から出土しているが，当遺跡においては顕著な関係は認められなかった。また上野佳也氏は，鍬形石鏃考の中で鍬形石鏃の出自について考察[註6]され，長野県細久保[註7]，岐阜県江名子ひじ山[註8]，滋賀県石山[註9]，和歌山県高山寺[註10]，香川県小蒜島[註11]，岡山県黄島[註12]，広島県宮脇[註13]，大分県早水台[註14]の各遺跡の伴出関係より，二等辺三角形の局部磨製鏃と，側縁が直線をなし抉りの部分が二等辺三角形で脚部下端が直線をなす石鏃を，鍬形石鏃に先行する形態のものとされ，鍬型石鏃は押型文土器文化のある時期において上記の局部磨製鏃と側縁が直線をなし抉りの部分が二等辺三角形のものにとって代って出現したものであると述べられている。尚当遺跡においては上記の形態の2石鏃の出土はな

いが側縁が直線をなすということでは，当遺跡のⅠ類のものと共通してなくもない。抉りの部分は二等辺三角形のものはなく基部下端が全体的に弓なりに抉り込むか丸く抉り入むものしかない（Fig. 72）。この抉りの部分の形態の差は時間差を表すものかそれとも地域性の表われなのかは問題点として残る所である。

Ⅰ～Ⅲ類の関係については，Ⅲ層においてⅠ類が47%と一番多い割合を示し先行することも考えられるが，出土点数の少なさもありこれも問題点として残る所である。

註1　分類に際しては，佐原真氏が分析した「柴雲出」の分類を踏襲した。小林行雄・佐原真　1964「柴雲出」
註2　生産用具であるため形状変化が激しかったともいわれている。白石浩之　1982「縄文時代草創期の石鏃について」考古学研究28―4
註3　赤木清　1937「江名子ひじ山の石器時代遺跡」（その11完）ひだびと5の3
註4　八幡一郎　1948「鍬形石鏃―石鏃の最古型式の一―」
註5　八幡一郎・賀川光夫　1955「早水台」大分県文化財調査報告第3号
註6　上野佳也　1962「鍬形石鏃考」考古学研究8―4
註7　松沢亜生　1957「細久保遺跡の押型文土器」石器時代 NO. 4
註8　註3に同じ
註9　坪井清足・丹信実・塚本一　1956「石山貝塚」平安学園考古学クラブ
註10　浦宏　1939「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」――押型文土器の単純遺跡について――考古学10―7
註11　三森定男　1937「讃岐小蔦島遺跡の研究――押型文土器に対する考察――」考古学論叢第4号
註12　鎌木義昌　1949「備前黄島貝塚の研究」吉備考古77
註13　豊元国・桑田五郎　1949「備後宮脇石器時代遺跡について――特に細石器押型文土器の図解を中心として――」吉備考古77
註14　註5に同じ

五 ま と め

3ケ年にわたる調査で，ドットマップで記録した遺物は土器6,158点，石器2,326点の計8,484点であった。それらの密集度をあらわすとFig. 123のようになる。開拓道路に隣接したA．B．M区など，より東側に集中し，西側へ移るにつれて稀薄となるのが判る。昭和46年の開拓道路建設の際の遺物出土量が想像できる。なお，遺物の分布状況からみると遺跡の範囲も又推定できる。北側についてはすでに開墾の折の重機による撹乱で判然としないが，南，西側は，I区からP—7区に至る扇形のカーブ内に入るものと思われる。東側は道路を隔てた現植林地内にも及ぶ事は確実で，従ってその面積は東西100m前後，南北70～100mの最大1万㎡にも上る事が推定される。出土石器の内，磨石，敲石，石鏃などが特に多い事実や，遺跡東端直下に求められる豊富な湧水点の存在は，地理的にも採集，狩猟などの経済活動にとっても又極めて安定した好条件を備えていたものと解される。

遺構としては集石状遺構2基，多数の性格不明のピット，そして数ケ所の小さな焼土が検出された。集石状としたのは，遺構内の礫群と基盤の安山岩礫とが見分けにくいなど今一つ明確さを欠く事による。焼土については，特にG—1区II層面の例は，数個の塊石で囲むもので明瞭な炉址として捉えられる（PL. 12)。ピットはかなり検出されたが，深さ，方向等何れも規則性に欠ける。概して島原半島に於ける住居址検出例は少なく，特に明瞭な竪穴式住居の例は縄文期では殆どない。堆積土の色調のせいもあろうが，平地式などの形態も考慮に入れる必要があろう。

遺物の出土状況は，II層より80%，III層より20%で各区共安定した数値を示す。但し，III層中のものでII層最下面として捉えられる例もあり，そうするとその比は更に拡がることになる。花粉分析の結果では，II層とIII層とでは本質的に気候の変化は無いが，植生は若干異なるという。その差異が土器間の時間差と一致するかの断はつけ難く，むしろIII層中遺物は，何らかの小動物や自然的要因による自然沈下の結果である可能性も否定できない。

土器の熱ルミネッセンス測定結果によると，B. P 7,700年という数値が示された。但し，当該地附近の算出基礎となるデータが不十分という事であり，将来的な課題が残されている。

長崎県下の押型文出土地は多いが，まとまった資料には乏しく，且つ報告例も少ない。従って県下に於ける押型文土器の編年は未だの感が強いが，本遺跡は早期末より前期初頭の大遺跡として記録に残るものである。この意味でも，未だ残存する遺跡東側部分の保存について，関係者の深い理解と行動が要求されよう。

Fig. 123 遺物出土密集団

調　査　風　景

第4章　科学分析による遺跡の古環境について

一　弘法原遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代測定結果の報告

奈良教育大学　市　川　米　太

今回，長崎県吾妻町の弘法原遺跡出土の押型文土器5個について熱ルミネッセンス年代測定を行なった。試料はA63，A70，A387，B416，B241であった。熱ルミネッセンス法は土器中の直径0.1㎜程度の石英粒子を取り出して測定試料とするのであるが，これらの土器試料は一般に石英粒子の含有量が非常に少なく充分な測定試料を得ることが困難であった。これはこれらの土器の胎土が火山性の粘土であるためと考えられ，九州や北海道の火山地帯の土器にみられる特徴である。このため，5個の土器の中で，測定のための石英粒子が試料調整によって得られたのは，A63とA387の2個のみであった。これらの土器についても測定試料が少なく充分な精度で年代を得ることができなかった。

測定法

試料の調整法は下記のように行なった。

1) 土器の表面を1㎜の厚さにわたって剝離する。
2) この土器片を粉砕し，0.075～0.105㎜の鉱物粒子を篩い分けによって取り出す。
3) この鉱物粒子を電磁分離機によって白色鉱物と有色鉱物に分け，前者をフッ化水素酸で処理し，石英粒子

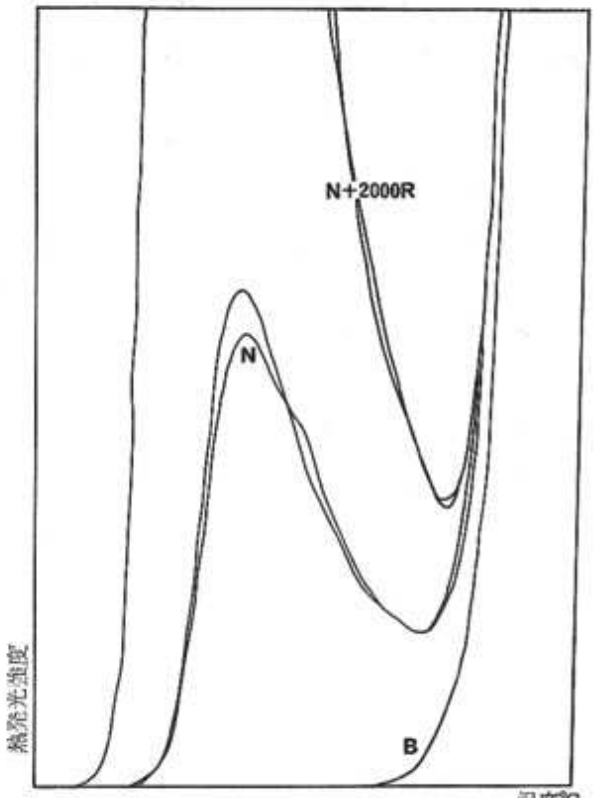


Fig. 124　A・63土器の熱発光曲線

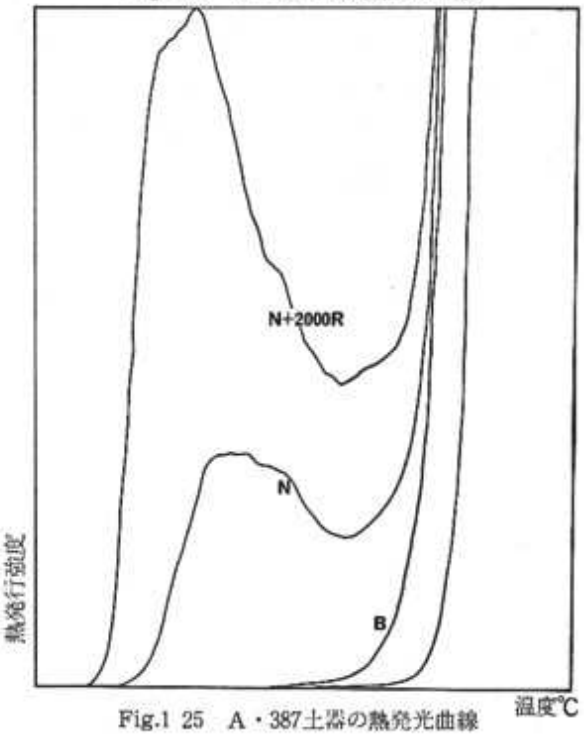


Fig.1 25　A・387土器の熱発光曲線

を取り出す。

試料調整によって得られた石英粒子試料を加熱することによって熱発光曲線を記録し，この熱発光曲線とコバルト60からのガンマ線照射したときの熱発光曲線とを比較することによって蓄積線量を求めた。熱発光量の測定に使用した装置はハーショウ2000型であった。試料は1秒間に20℃の加熱速度で500℃まで加熱された。

年間線量は土器の胎土からのベータ線量と周囲の土からのガンマ線量とをそれぞれ熱ルミネッセンス線量計，Ca SO_4；Tm を使用して直接測定した。周囲の土からのγ線量の測定は，土器の出土層が残されていなかったので，弘法原下3層に相当する遺跡付近の地点に測定用線量計を埋めて測定した。

結　果

弘法原遺跡出土の2個の土器の熱ルミネッセンス年代測定の結果が表に示されている。

弘法原遺跡出土土器のTL年代

土器試料	蓄積線量（ラド）	年間線量 β線量	年間線量 γ線量	TL年代 (B.P.)
A 63	1460	0.105	0.095	7300
A387	1780	0.125	0.095	8100

今回測定した土器は，前述したように石英粒子の含有量が少なく高い精度で年代を求めることができなくて，±12%程度の誤差がある。したがって，これらの土器の年代の間には800年の差があるが，この遺跡の土器の年代としては，これらの土器の平均値である7700 B.P. 年と考える方が実年代に近いものと思われる。

二　長崎県吾妻町弘法原遺跡試料花粉分析結果報告

はじめに

長崎県教育委員会殿より吾妻町弘法原遺跡試料の花粉分析の御依頼を受けました。

このほど，分析が終了いたしましたので，その結果を御報告いたします。

1. 試料

試料は弘法原遺跡のE区南壁から採取した3点である。各試料の番号，層位，土質，花粉・胞子化石産出傾向について，第1表試料表にまとめた。

Tab. 19　試　　料　　表

試料番号	採取位置	層位	土質	花粉・胞子化石産出傾向
1	E区南壁	II	黄褐色土	普通
2	〃	III	黒色土	〃
3	〃	IV	黄褐色ローム	少ない

2. 分析結果及び考察

花粉分析の結果は検出した花粉・胞子化石の総数を基数として，各試料に於ける花粉・胞子化石の百分率を産出し，付表－1にまとめた。その中で主なものについて，ダイアグラム(Fig.126)を作成後掲したので参照されたい。

この度の分析によって検出された花粉・胞子化石には以下のものが挙げられる。

《AP－1（針葉樹花粉)》

Abies（モミ属)，Pinus（マツ属)，Taxodiaceae（スギ科)，Sciadopitys（コウヤマキ属)

《AP－2（広葉樹花粉)》

Pterocarya（サワグルミ属)，Salix（ヤナギ属)，Alnus（ハンノキ属)，Carpinus（クマシデ属)，Castanea（クリ属)，Castanopsis（クリカシ)，Cyclobalanopsis（アカガシ亜属)，Lepidobalanus（コナラ亜属)，Aphananthe（ムクノキ属)，Celtis（エノキ属)，Ulmus（ニレ属)，Zelkova（ケヤキ属)，Acer（カエデ属)，Symplocos（ハイノキ属)，Anodendron（サカキカズラ属)

《NAP（草本花粉)》

Caryophyllaceae（ナデシコ科)，Cruciferae（アブラナ科)，Haloragis（アリノトウグサ属)，Umbelliferae（セリ科)，Carduoideae（キク亜科)，Artemisia（ヨモギ属)，Cichorioideae（タンポポ亜科)，Gramineae（イネ科)，Cyperaceae（カヤツリグサ科)

《FP（形態分類花粉)》

Tricolpate pollen（三溝型花粉)，Tricolporate pollen（三溝孔型胞子)

《FS（羊歯類胞子)》

Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科)，Osmundaceae（ゼンマイ科)，Polypodiaceae（ウラボシ科)，Ophioglossum（ハナヤスリ属)，Lygodium（ツルシノブ属)，Pteris（イノモトソー属)，Monolete spore（単条溝型胞子)，Trilete spore（三条溝型胞子)

次に各試料の花粉・胞子化石構成と古環境について述べる。

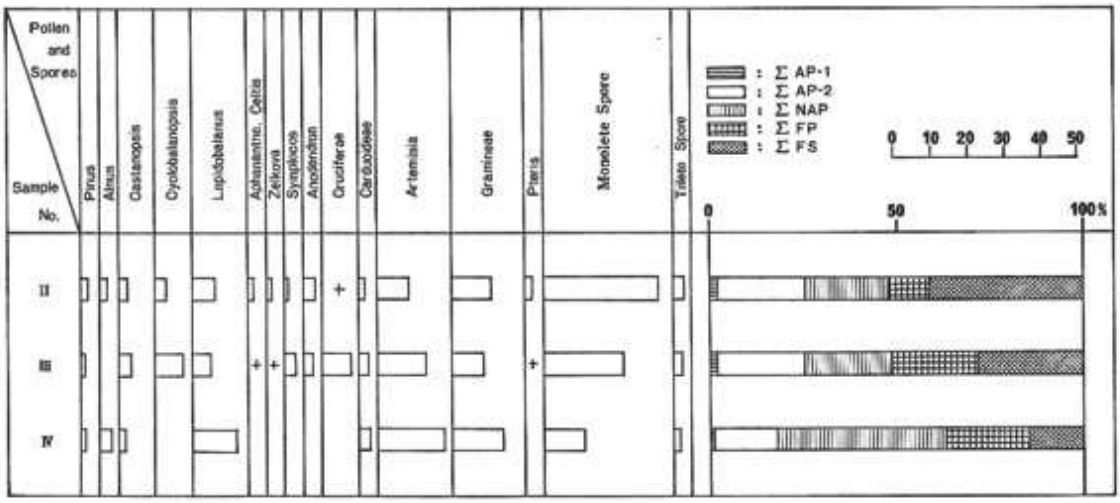


Fig. 126　主要花粉胞子化石ダイヤグラム

No. 1　II層

針葉樹花粉は全体の2.0%と非常に少なく，モミ属とマツ属が僅かに検出されたに過ぎない。広葉樹花粉は23.5%を占めた。主なものとして，コナラ亜属が6.0%，アカガシ亜属とサカキカズラ属が各々3.0%ずつ，クリカシ属が2.5%検出された。

草本花粉は全体の22.5%を占めた。主なものとして，イネ科が11.0%，ヨモギ属が8.5%検出された。

羊歯類胞子は全体の41.5%を占め，多かった。その大部分が単条溝型胞子であり，31.0%検出された。その他に三条溝型胞子，ウラホシ科，ヒカゲノカズラ科等が検出された。

以上の様な花粉・胞子化石の構成から古環境について述べると，次の様になろう。

樹木花粉は針葉樹，広葉樹を合せて25.5%であり，草本花粉と羊歯類胞子の合計の64.0%に比較して少ない。

従って，樹木類は森林を形成するほど多く繁茂していなかったものと考えられ，かなり樹木の間が開いていた林地と考えられる。又，樹木の間の空地には，イネ科，ヨモギ属等の草本類と羊歯類が生育していたものと言えよう。

林地を形成していた樹木は主として落葉広葉樹のコナラ亜属と常緑広葉樹（照葉樹）のアカガシ亜属とクリカシ属及び常緑つる性の樹木であるサカキカズラ属である。

No. 2　III層

針葉樹花粉は全体の2.0%と非常に少なく，マツ属，スギ科，コウヤマキ属が僅かに検出されたに過ぎない。

広葉樹花粉は全体の23.5%を占め，主なものとして，アカガシ亜属が7.5%，コナラ亜属が5.0%，クリカシ属が3.5%，ハイノキ属が3.0%，サカキカズラ属が2.5%検出された。

草本花粉は全体の23.0%であり，主なものとして，ヨモギ属が13.0%，イネ科が9.0%，キ

ク亜科が2.5%検出された。

羊歯類胞子は全体の28.5%を占め，比較的多かった。単条溝型胞子が21.5%の外に，ウラボシ科，三条溝型胞子等が各々3.0%以下で検出された。

以上の様な花粉・胞子化石構成から古環境について述べると次の様になる。

草木花粉と羊歯類胞子の合計が51.5%であり，No. 1 試料よりも若干減少するもののまだ樹木花粉より多い。又，樹木花粉は25.5%と No. 1 試料と全く同じである。

従って，No. 1 試料と同様な古環境と考えられる。しかし，樹木構成は多少異なり，落葉型のコナラ亜属よりも常緑型のアカガシ亜属の方が多くなり，クリカシ属も増加する。この事よりNo. 1 試料よりも アカガシ亜属，クリカシ属等の 常緑樹が 多く生育していたものと考えられる。

No. 3　Ⅳ層

針葉樹花粉は全体の1.0%と非常に少なく，マツ属が僅かに検出されたのみである。

広葉樹花粉は全体の17.0%であり，コナラ亜属がその大部分を占め，12.0%検出された。その他にはハンノキ属が3.0%，クリカシ属が2.0%検出された。

草本花粉は全体の45.0%と多く，主なものとして，ヨモギ属が18.0%，イネ科が14.0%，アブラナ科が8.0%，キク亜科が3.0%検出された。

羊歯類胞子は全体の15.0%であり，単条溝型胞子が11.0%の他，三条溝型胞子，ハナヤスリ属，ウラボシ科が低率で検出された。

以上の花粉・胞子構成から，古環境について述べると次の様になる。

草本花粉と羊歯類胞子の合計が60.0%を占め，草地の環境を示している。一方樹木花粉は全体の18.0%であり，コナラ亜属が12.0%と多いものの，検出される樹種が No. 1，2 と較べて極端に少ない。

従って，ヨモギ属，イネ科，アブラナ科，及び羊歯類が繁茂した草地と考えられ，樹木はコナラ亜属が付近に林地を形成していたか，又は草地の内外に散在して生育していたものと考えられる。

古気候については，検出された樹木花粉の構成から推定すると，最下位の No. 3 は落葉広葉樹のコナラ亜属が多く常緑広葉樹はクリカシ属が検出されただけで少ない。

従って，No. 3 の古気候は温帯に相当するものの照葉樹林を形成するほどは暖かではなかったものと言えよう。

No. 2 になると，常緑広葉樹のアカガシ亜属が最も多くなり，クリカシ属，サカキカズラ属等の常緑樹が見られる。落葉広葉樹のコナラ亜属ムクノキ属，エノキ属，ケヤキ属等も検出される。

従って，照葉樹林帯に近い温帯から暖温帯に相当すると推定される。

No. 1 も No. 2 と同じ様に温帯から暖温帯に相当すると思われるが，常緑広葉樹よりも落葉広葉樹の方が多くなり，No. 2 よりも若干気温が低下していたものと考えられる。

Tab. 21 花粉分析結果一覧表

Sample No. / Pollen and Spores	II 層	III 層	IV 層
Abies	0.5		
Pinus	1.5	1.0	1.0
Taxodiaceae		0.5	
Sciadopitys		0.5	
Σ AP-1 (N)	4	4	1
(%)	2.0	2.0	1.0
Pterocarya	0.5		
Salix	0.5		
Alnus	2.0		3.0
Carpinus	0.5		
Castanea	1.0		
Castanopsis	2.5	3.5	2.0
Cyclobalanopsis	3.0	7.5	
Lepidobalanus	6.0	5.0	12.0
Aphananthe, Celtis	1.5	0.5	
Ulmus	0.5		
Zelkova	1.5	0.5	
Acer		1.0	
Symplocos	1.0	3.0	
Anodendron	3.0	2.5	
Σ AP-2 (N)	47	47	17
(%)	23.5	23.5	17.0
Σ AP (N)	51	51	18
(%)	25.5	25.5	18.0
Caryophyllaceae	0.5	0.5	
Cruciferae	0.5		8.0
Haloragis	0.5	0.5	
Umbelliferae		1.0	1.0
Carduoideae	1.5	2.5	3.0
Artemisia	8.5	13.0	18.0
Cichorioideae		1.0	
Gramineae	11.0	9.0	14.0
Cyperaceae		0.5	1.0
Σ NAP (N)	45	56	45
(%)	22.5	23.0	45.0
Tricolpate pollen	3.5	10.5	16.0
Tricolporate pollen	7.0	7.5	6.0
Σ FP (N)	21	36	22
(%)	10.5	18.0	22.0
Lycopodiaceae	2.0	0.5	
Osmundaceae	0.5		
Polypodiaceae	2.5	3.0	1.0
Ophioglossum			1.0
Lygodium		0.5	
Pteris	2.0	0.5	
Monolete spore	31.0	21.5	11.0
Trilete spore	3.0	2.5	2.0
Σ FS (N)	83	57	15
(%)	41.5	28.5	15.0
Σ Pollen & Spores (N)	200	200	100